

ROAD

Annual Report
2019



2020年3月 第8号

国立大学法人 愛知教育大学
国立大学法人 静岡大学

愛知教育大学大学院教育学研究科
静岡大学大学院教育学研究科
共同教科開発学専攻

2019 年度報告書

ROAD



令和元年 8月24日(土)
於：愛知教育大学 教育未来館 3C

開会式



研究発表



講演会



令和元年度
教科開発学セミナーⅢ合同発表会

Annual Report 2019

令和元年 8 月 25 日 (日)
於：愛知教育大学 教育未来館 3C



令和元年度
最終試験 (9月修了生)

Annual Report 2019

令和元年 7 月 15 日 (月)
於：静岡大学 教育学部 G 棟 202



令和元年度
教科開発学セミナー I・II 合同発表会

Annual Report 2019

令和2年2月15日(土)・16日(日)
於：静岡大学 教育学部 G棟 201・202



令和元年度
最終試験 (3月修了生)

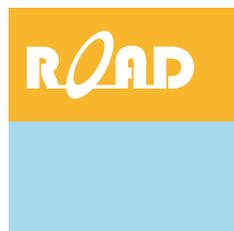
Annual Report 2019

令和2年1月26日(日)
於：愛知教育大学 教育未来館 3C



CONTENTS

目次



巻頭言	
I. 共同教科開発学専攻の概要	1
II. 共同教科開発学専攻連絡協議会議長年次報告	21
III. 教科開発学研究会	41
IV. 学生の研究活動	45
V. 修了生の論文要旨及び執筆体験談	79
VI. 教員の教育・研究活動	85
VII. 諸資料	123

巻頭言



新たな博士課程に向けて

静岡大学大学院教育学研究科長
江口尚純

社会の変容や子どもの変化等によって教育課題の複雑化・多様化が進み、教育職員免許法で伝統的に行われている教科教育、教科専門、教職専門という区分の科目を深めるだけでは課題が解決しないという状況が起こってきている。そうした中、「教育事象の因果関係を把握する能力」「学術的な専門的知見を教科内容として構成できる能力」「理論と実践の検証能力」の養成を目的に教育職員免許法の3つの科目区分を統合する学問として「教科開発学」が誕生した。教員養成の高度化が叫ばれる中、それに対応した教育を遂行できる大学教員の育成は急務で、愛知教育大学と静岡大学が協働して博士課程の共同教科開発学専攻を設置したのが平成24年度であった。完成年度の平成26年度末に2名が博士の学位を取得したのを皮切りに陸続と学位取得者を輩出してきている。これも設立理念に共鳴し真摯に教育研究に当たってくださっている愛知教育大学、静岡大学両大学院の共同教科開発学専攻の教員各位のご尽力によるものと敬意を評したい。

教員養成の高度化・修士レベル化が言われて久しいが、国の政策を受けて全国の教員養成大学・学部の修士課程の教職大学院化は加速した。静岡大学大学院教育学研究科でも令和2年4月に修士課程を一本化して新しい教職大学院が誕生した。次の課題は教職大学院に対応した博士課程、すなわちEd.D.学位課程の構想である。平成29年8月に出された「国立教員養成大学・学部、大学院、附属学校の改革に関する有識者会議報告書」でも中長期的な方針として「Ed.D.の検討」を挙げ、「我が国では、Ed.D.についての統一的な定義や共通認識がなく、現時点では具体的に制度改正を検討できる段階には至っていない」とし、現行の博士(教育学)とは別の学位であるEd.D.についての検討の加速化を求めている。「Ed.D.の検討」は急務である。しかし一方でこれまでの博士課程での理論研究の蓄積も活かしたい。有識者会議報告書でも「教職大学院で得られる学位「教職修士(専門職)」の上に置く、実践性を重視した博士の専門学位が必要との声や、Ph.D.を持つ者が臨床的な研究を行って更にEd.D.を取得し、二つの博士学位を持つ者が大学での教員養成を担うことが教員養成の質的向上をもたらすとの声がある。」と指摘するように、両学位が併存する博士課程は望めないか。共同教科開発学専攻への期待は増すばかりである。

巻頭言



共同大学院博士課程の現在とこれから

愛知教育大学 教授・副学長（大学院改革・評価担当）

2019年度 共同教科開発学専攻連絡協議会 副議長 岩山 勉

2012年4月に共同教育課程制度を活用して、静岡大学と後期3年だけの博士課程である「共同教科開発学専攻」がスタートし、8年が経過しました。本専攻では、子どもたちを取り巻く環境を視野に入れ、教科との関わりの中で学校教育が抱える複雑化、多様化した諸課題に対応した教科開発学の分野における教育及び研究を行っており、

- ◎教育事象の因果関係を把握する能力を身につけ、教科との関わりの中で学校教育が抱える諸問題に自立して対応し得る研究能力
- ◎学術的な専門的知見を教科内容として構成できる能力を身につけ、教育論、教科内容の構成原理や教育方法、教材を開発する能力
- ◎理論と実践の検証能力を身につけ、学校教育の実践を理論化し、その理論を実践に活かす能力を持ち、専門に関する幅広い知識や深い理解に基づき研究を遂行する能力及び実践力を有する大学教員をはじめとした研究職を志向する者の育成を目指しています。

本専攻の担当教員は当初の設置以降、定年退職や転出などもありましたが、教育現場等においてニーズの高い分野を中心とし、双方の大学において担当教員の充実も積極的に行って来ています。また、博士学位取得者も定常的に輩出してきています。さらに、学位取得後には、国公立大学の教員養成系の学士課程、教職大学院を含む大学院課程等の高等教育機関に就職したり、学校現場に戻ったりして、本専攻で学んだことを積極的に生かし、自立した教科開発学分野の教育者及び研究者として広く活躍しており、本専攻の設置の目的を十分に達成していると言えます。

近年、Society5.0の実現に向けて、教育現場でどのような人材を育成すべきかが盛んに議論されています。言うまでもなく、Society 5.0とは、狩猟社会(Society 1.0)、農耕社会(Society 2.0)、工業社会(Society 3.0)、情報社会(Society 4.0)に続く、新たな社会を指すもので、第5期科学技術基本計画において我が国が目指すべき未来社会の姿として初めて提唱されたものです。Society 5.0では、膨大なビッグデータを人間の能力を超えたAI(人工知能)が解析することで、これまでになかった新たな価値が社会全体にもたらされることが期待されます。教育に携わる者、組織もこのような周囲の環境の変化に柔軟に対応できるよう、常にアップデートし続けることが強く求められています。本専攻についても、日本の教員養成を先導できる博士人材を育成するため、教職大学院との接続性や実践性等を重視した広い意味で教員養成の専門的な学位授与機関への変革が強く求められています。

I. 共同教科開発学専攻の概要

1. 専攻の趣旨・目的

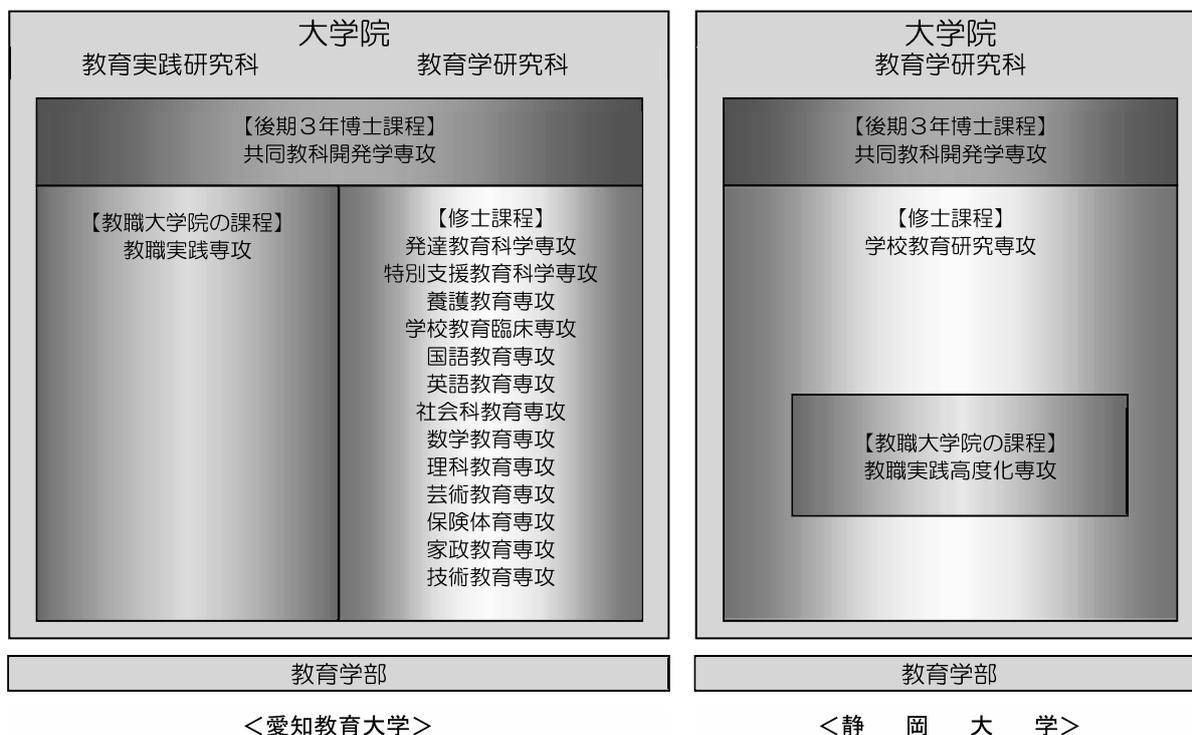
共同教科開発学専攻（以下「本共同専攻」という。）は、共同教育課程制度を活用し、愛知教育大学と静岡大学の教育学研究科に設置された、後期3年のみの博士課程です。

本共同専攻の設置は、教育を取り巻く社会状況や学校教育が抱える課題が複雑化し、学校教育現場の教員に高い資質能力が求められていく一方で、教員養成カリキュラムの目的性や科目の体系的な欠如等の課題が浮き彫りになってきていること、それに加え、中央教育審議会においても、教員の資質能力の向上のための教員養成システムにおける修士レベル化が検討されることとなり、これらに対応するための体系的な教員養成カリキュラムの編成及び専門科目の体系化、また、それを可能とする大学教員の養成が喫緊の課題となっていること、などが背景となっています。これらの課題に応えるため、愛知教育大学及び静岡大学教育学部は、国立の教員養成系大学学部としてこれまで取り組んできた実績を活かし、大学教員養成のための博士課程を設置しました。

専攻名称ともなっている「教科開発学」は、教科専門・教科教育・教職専門の枠を越えて、子どもたちを取り巻く環境を視野に入れ、教科との関わりの中で学校教育が抱える複雑・多様化した諸課題に対応した研究を遂行していくため、教科専門と教科教育を融合・発展させた「教科学」と、教職専門を発展させた「教育環境学」とをあわせて体系化することを目指す新たな学問領域です。

本共同専攻は、「教科開発学」の究明を通じて、教科内容の構成原理等を明らかにしながら「教科学」と「教育環境学」の融合・体系化に熱意を持って取り組む大学教員を養成していくこと、また、「教科開発学」を専門とする大学教員を養成し、その教員が「教科開発学」に関する教育研究に基づいた教員養成カリキュラムを編成して学部、あるいは修士課程等で指導を行うことにより、優れた学校教育現場の教員を輩出するという教員養成系大学・学部ならではのサイクルを確立することを目指しています。

共同教科開発学専攻が置かれる環境



2. 専攻の内容・特色

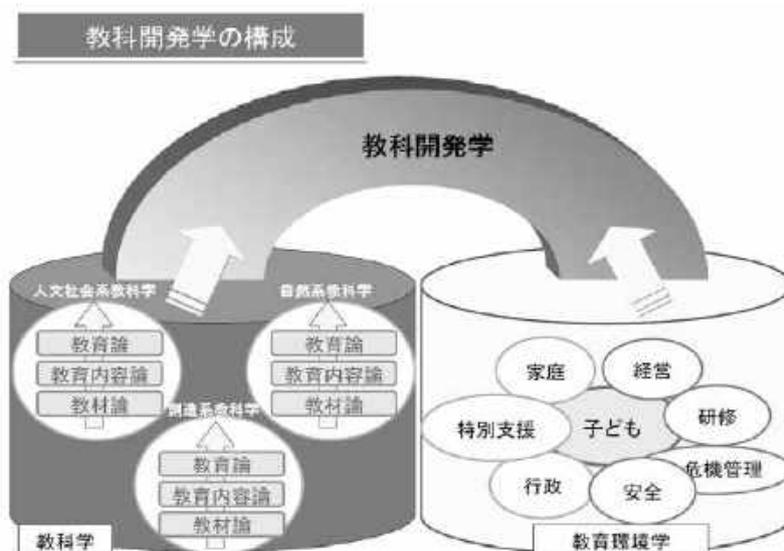
「教科開発学」は、教科専門・教科教育・教職専門の専門性の枠を越えて、子どもたちを取り巻く環境を視野に入れ、教科との関わりの中で学校教育が抱える複雑・多様化した諸課題に対応した研究を遂行していくものです。「教科開発学」は、主に、教育環境に適した教育内容構成の研究(教科学)、教科内容として構成されたものを実践するための教育環境の研究(教育環境学)から構成されます。教科専門と教科教育を融合・発展させた「教科学」と、教職専門を発展させた「教育環境学」が「教科開発学」を構成します。そして、本共同専攻は、「教科学」あるいは「教育環境学」のいずれかを基軸としつつ、もう一方の学問分野の研究を進めていくというところに特色があります。

専攻の分野として「教育環境学」、「教科学」(人文社会系教科学, 自然系教科学, 創造系教科学)という4つの分野を設置しています。

教科学研究のアプローチとして、教育論・教育内容論・教材論という3つの基本軸からのアプローチを行うことも本共同専攻のもう一つの特徴です。「教育論」は、児童生徒の発達のために、どのような教育目標のもとに、どのような内容をどのように教え(教師)・どのように学ぶか(学習者)を論じるもので、従来の「教科教育科目」で検討してきた目標論, 指導論, 学習過程論をも含みます。「教育内容論」は、それぞれの学術(学問・芸術)分野を基盤として持ちながら、その全体像から個々の学問分野の必須部分を抽出し、個々の専門分野がどのように関連しながら「教科」の内容がいかなるものから構成されているかを追究するものです。「教材論」は、教科が、それぞれの学術(学問・芸術)分野を基盤としながら構成されている教材の在り方を論究し、教材の開発をすることにより教科内容の構成あるいは教材配列等を実践的に考察・検証するものです。これらの3つのアプローチにより、3つの系を超えて教育論・教育内容論・教材論を集約し、教科内容構成を追究していきます。

教育関係等の仕事に従事しながら、入学して修学することができるよう、講義は、原則的に土曜日、日曜日に実施し、夏期や冬期における集中講義も導入するなど、時間割や学修プログラムを作成している点も本共同専攻の特色です。

(専攻名)	(分野)
共同教科開発学専攻	— 教育環境学 人文社会系教科学 自然系教科学 創造系教科学



教育環境学分野

子どもたちが主体的に働きかけ、働きかけられる自然・社会・文化・日常生活等のあらゆる過程を子どもの発達の視座から教育環境を捉える学問。確かな学力・豊かな心・健やかな体の調和を重視して「生きる力」を育む場合、家庭、学校、地域、社会といった学校を取り巻く環境との関連を常に視野に入れておくことが重要です。「教育環境学」においては、従来の教職専門領域で扱ってきた内容を発展させ、子ども、学校、地域、社会を含めた幅広い学校教育を取り巻く多様な環境領域を体系的に研究し、教科の土台や基盤を追究します。

教科学分野

従来の教員養成カリキュラムでは、「教科」の学問的内容を「教科専門」，「教科」の指導法を「教科教育」として編成されていますが、両者の体系化はまだ進んでいません。そのため、教員養成における「教科」の研究を本格的に確立するために「教科学」を創設します。「教科学」は、従来の教科専門と教科教育を融合し、教科がどのような構成原理で成り立っているのか等を中心に教科内容の構成原理を探究するものです。教科を「人文社会系」，「自然系」，「創造系」という3つの分野に分類し、教科における学習内容の構成がいかなる原理からなっているか、その編成の仕方はどうあるべきか等を探究します。以下、3つの分野について紹介します。

① 人文社会系教科学分野

地域社会における言語、文学、歴史、文化、自然にかかわる人文社会的な課題に対して、自らが実際にかかわることにより主体的に考察を進め、地域に密着した教育方法や教材を作り上げていく必要があります。この分野では、誰かが集めた史資料（二次史資料）や既存の結論で考察を進めるのではなく、史資料読解やフィールドワーク（参加、体験、観察、インタビュー、収集など）により自らが積極的に対象にかかわることで得られた一次史資料や知見によって地域研究を進め、その研究成果をもとにした教科開発をめざします。具体的には、言語学、歴史学、地理学、民俗学の立場からアプローチして、それらの研究領域から得られた高度な地域研究の成果をふまえた教育論、教育内容の構成原理や教育方法、教材を開発します。

② 自然系教科学分野

社会が複雑化し、自然環境が変化し、従来の価値観が変わる中で、科学的リテラシー、数学的リテラシー（科学的、数学的に思考するための基本となる能力）の育成が求められています。観察、仮説の立案（モデルの構築）、検証（論理的説明、実証）などの活動を通して自然系教科における教育論、教科内容の構成原理や教育方法、教材を開発します。具体的には、（ア）地球環境という視点からみた新たな理数教育カリキュラムや日常生活及び先端科学技術とリンクした理数教育カリキュラムの構築、（イ）最先端の研究成果から様々なトピックの提案を「教科学」の立場から行い、情報教育・情報科学の知識を活用して、教材化及び必要なデジタルコンテンツ化を図る、（ウ）電子黒板やPDA端末などのICT環境が整備された教室における教育内容・教育方法のあり方、あるいは学習集団の特性・行動パターンを反映しうる動的な教材を開発します。

③ 創造系教科学分野

音楽科・美術科・体育科・家庭科・技術科等では、子どもたちの潜在的な能力や感性を引き出し、これらを育てる活動を支援する方法を組織的・系統的に開発していく必要があります。この分野において「生きていく上で基礎となる幅広い生活力や、健康あるいは体力を備え、豊かな表現力を発揮できる人間の育成」を目指し、「生活力」，「身体力」，「表現力」を中心とした教育論、教科内容の構成原理や教育方法、教材を開発します。具体的には「生活力」の周辺領域として、異世代との共感力、自らの生活課題の発見、生活課題を解決する知識・技術、ものづくり教材開発、ものづくり教材の授業実践等があります。「身体力」の周辺領域として、保健情報の収集と分析、体育教師教育論、運動学習、運動に対する動機づけ等があります。「表現力」の周辺領域として、観賞とリテラシー、思考プロセスと表現技法、音楽と身体の動き、発想支援等があります。

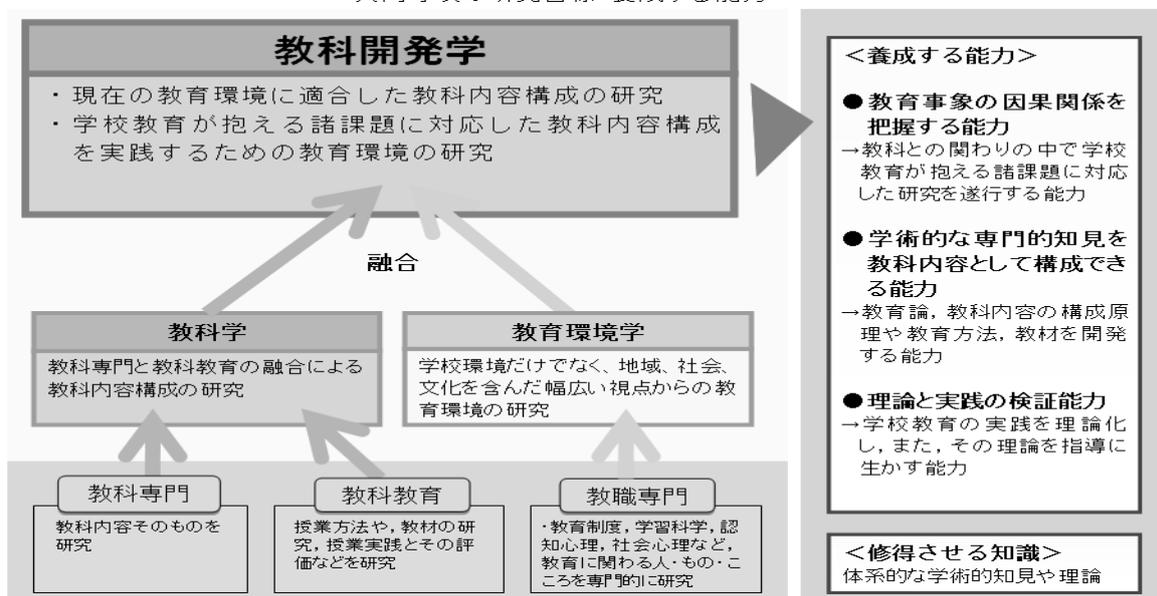
3. 養成する人材像

本共同専攻は、「教科開発学」による教育研究を通して、子どもたちを取り巻く環境を視野に入れ、教科との関わりの中で学校教育が抱える複雑・多様化した諸課題に対応した研究を遂行する能力（「教育事象の因果関係を把握する能力」）や、教育論、教科内容の構成原理や教育方法の研究、教材を開発する能力（「学術的な専門的知見を教科内容として構成できる能力」）といった学術的な専門的知見を教科内容として構成できる力を養成します。

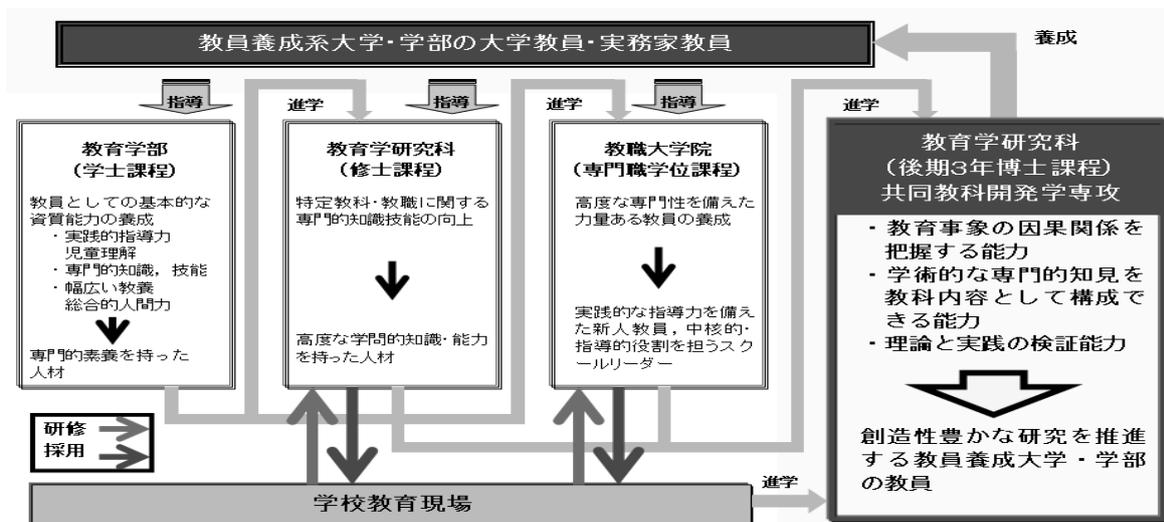
本共同専攻の入学者は、修士課程修了者、教職大学院修了者、教育現場を熟知した現職教員などを想定していますが、これらの多様な経験を持つ学生が交流することにより、学校教育の実践を理論化し、また、その理論を指導に生かす能力（「理論と実践の検証能力」）を身につけることもねらいとしています。

このような能力を身につけることによって、今日の学校教育が抱える諸課題に対応可能な現場教員を育てる教員養成系大学・学部 教員として、広く教育界に貢献する大学教員を養成します。

共同専攻の研究目標・養成する能力



共同専攻設置の目的



4. 修了要件・学位

<修了の要件>

標準修業年限は3年ですが、特に優れた研究業績をあげた者にあつては修了年限の短縮も可能です。修了に必要な取得単位数は20単位以上とし、基礎科目は6単位以上、分野科目は10単位以上、応用科目は4単位以上です。なお、分野科目は選択科目から10単位以上を取得する必要がありますが、「教育環境学」の分野科目のうちから2単位及び教育環境学分野以外の3分野の選択科目のうちから2単位の計4単位は必ず履修します。

本共同専攻は、必要な研究指導を受けた上に、学位論文の審査及び論文の内容や専門分野に関する口述ないし筆記試験等に合格することを修了要件として課します。なお、学位論文の提出要件は、本共同専攻内の申し合わせに基づくものとします。

単位履修表

科目 専攻	基礎科目		分野科目				応用科目	合計
			教育環境学 分 野	人文社会系 教科学分野	自 然 系 教科学分野	創 造 系 教科学分野		
	必修	選択	選択	選択	選択	選択	必修	
共同教科 開発学専攻	3	3	1 0				4	2 0
合計	6		1 0				4	2 0

<学位論文と学位の授与>

学位論文は、本共同専攻の目標とするところに従い、「教科開発学」を主領域として「教育環境学」及び「教科学」にかかわる実証的な内容とするものとなります。

本共同専攻の課程を修了した者に対しては、愛知教育大学及び静岡大学から博士の学位を授与します。学位記には愛知教育大学及び静岡大学の大学名が記載されます。

博士の学位を授与するにあたって付記する専攻分野の名称は、「博士（教育学）」とします。

なお、学位を授与された方が、学位の名称を用いるときは、両大学名を付記するものとします。

「博士（教育学，愛知教育大学及び静岡大学）」

5. 研究指導体制

本共同専攻における教育は、授業科目の履修と学位論文の作成に関する指導によって行います。学生の希望等を踏まえて決定した本籍を置く大学の研究指導教員を主指導教員とし、主指導教員は学位論文の指導のみならず、履修指導も行います。本共同専攻では、主指導教員の他に、両方の大学から少なくとも1名以上の副指導教員を配置し、3名以上の教員で指導します。このように共同大学院の特色を活かした指導体制を整え、様々な研究分野を包含する指導体制の充実を図ります。

本共同専攻の学生は、主指導教員の指導の下に科目の履修方針を決めます。講義は、履修登録に沿って履修します。入学時に合同オリエンテーション等を行い、主指導教員、副指導教員等と学生の信頼関係を作り、3年間共に学び、研究していく関係を構築するために両大学の教員と学生、あるいは学生同士が直接対面して密に交流する機会を設けます。

講義や研究指導に関して、遠隔教育システムを取り入れて、教員及び学生の大学間の移動に配慮しています。

セミナー方式で開催する演習等においては、両大学で毎年交互に行います。

6. カリキュラム

本共同専攻の教育課程は、博士後期課程が担う科目群として「教科開発学」に関する「基礎科目」、各分野の専門的な「分野科目」、各分野の総合的な「応用科目」の3つの科目で構成されています。

基礎科目の「教科開発学原論（2単位）」では、「教科開発学」の原理的諸課題や「教科開発学」の研究方法論を習得し、「教科開発学実践論（1単位）」では、大学教員としての教育実践力、教員FD等、実践的諸課題を探究します。これら2科目は、必修です。その他も含めて基礎科目群からは、必修科目の2科目3単位を含め選択科目のうちから3単位、計6単位以上を選定して履修します。

分野科目は、「教育環境学」と「教科学」の先進的かつ多様な知見を習得するとともに各教員の研究活動に基づく最先端の科目を「教科開発学」の分野科目として開講します。教育環境学分野ではマネジメント領域、教育方法領域、環境領域から科目を構成し、学校を取り巻く諸環境や利点を把握し、これらの知見を教科の開発研究に活用することを追究します。

学校教育を取り巻く諸環境の特性や利点を把握し、 それらを取り入れて教育に有効に活用する能力を育成する。		
<u>マネジメント領域</u> 学校経営論研究 教育経営臨床論研究	<u>方法領域</u> 教育哲学・思想論研究 教育工学論研究 身体運動指導論研究	<u>環境領域</u> 遊び文化環境論研究 学校適応論研究 養護実践教育学論研究 保育・幼児教育学研究

教育環境学分野における分野科目

「教科学」は、「人文社会系」、「自然系」、「創造系」という三つの分野に分類し、「教育論」、「教育内容論」、「教材論」の三つの基本軸から科目を構成します。「教科学」では、教科内容を構成する学問の構築をめざし、教科のあり方・枠組そのものを検討し、人文社会系教科学、自然系教科学、創造系教科学の各分野の先端的な知識を修得します。

人文社会系教科学分野では、言語・多文化領域、歴史領域、風土領域から科目を構成し、教育方法・教材開発を行います。

言語に関する「教科学」の開発 地理学・民俗学・歴史学における教材の開発		
<u>言語・多文化領域</u> 言語教育内容論研究 外国語教育内容論研究 外国語教育論研究 国語科教育教材論研究 生活科教育内容論研究 国語教育論研究	<u>歴史領域</u> 歴史教材論研究	<u>風土領域</u> 地理学教材論研究 民俗学教材論研究

人文社会系教科学分野における分野科目

自然系教科学では、先端科学と教科内容領域、教材開発と学習支援領域、教育方法の開発領域から科目を構成し、先端科学技術と関連した自然系教科のカリキュラムを構築し、教育の情報化に対応した教育方法・教材開発を行います。

先端科学技術とリンクした理科教育カリキュラムの構築 教育の情報化に対応した教育方法・教材開発		
<u>先端科学と教育内容領域</u> 理科教育内容論研究 生物教育内容論研究	<u>教材開発と学習支援領域</u> 数学教材論研究 物理教材論研究	<u>教育方法の開発領域</u> 数学教育論研究 理科教育論研究 数学教育内容論研究

自然系教科学分野における分野科目

創造系教科学分野では、生活力領域、身体力領域、表現力領域から科目を構成し、基礎的な生活力や健康・体力を備え、豊かな表現力を発揮できるような教育方法・教材開発を行います。

基本的な生活力や健康・体力を備え、豊かな表現力を発揮できる 人間の育成をめざす教科学を構想できる力量の形成		
<u>生活力領域</u> 家政教育内容論研究 技術教育内容論研究 家庭科教材論研究 技術教育教材論研究	<u>身体力領域</u> 体育教育論研究 保健教育内容論研究 体育・課外活動教材論研究	<u>表現力領域</u> 美術教材論研究

創造系教科学分野における分野科目

なお、分野科目は選択科目から10単位以上を取得する必要があるが、「教育環境学」の分野科目のうちから2単位及び教育環境学分野以外の3分野の選択科目のうちから2単位の計4単位は必ず履修します。

応用科目では、全教員と全学生が一堂に会し、(1) 教員がそれぞれの研究課題を提示し、学生と討議する、(2) 学生自身が、「教科開発学とは何か」、「その研究方法論と課題」について問いながら自己の研究課題を追究し、その成果をまとめて発表します。「教科開発学セミナーⅠ(2単位)」と「教科開発学セミナーⅡ(2単位)」は、必修です。応用科目群では、必修科目の2科目4単位以上を選定して履修します。

開設予定授業科目・担当教員及び講義開講場所等（2019年度）

科目区分	授業科目	単位数	担当教員	愛知教育大学キャンパス(刈谷市)	静岡大学キャンパス(静岡市)	
専攻基礎科目	必修科目	2	石川 恭	○	○	
			野平 慎二			
			中野 真志			
			高橋 美由紀			
			黒川 みどり			
			坂口 京子			
			杉山 康司			
	村上 陽子					
	教科開発学実践論	1	稲葉 みどり	○	○	
			倉本 哲男			
			小川 裕子			
			新保 淳			
			松永 泰弘			
	鎌塚 優子					
	選択科目	文化資源活用論	1	野地 恒有	○	
				伊藤 貴啓		
				丹藤 博文		
		科学技術活用論	1	岩山 勉	○	
				稲毛 正彦		
飯島 康之						
教育評価実証方法論		1	古田 真司	○		
			石田 靖彦			
教育プログラム開発論	1	村山 功		○		
表現・鑑賞論	1	北山 敦康		○		
		伊藤 文彦				
教育フィールド調査	1	村越 真		○		
教育プレゼンテーション論	1	白畑 知彦		○		
		小南 陽亮				
専攻分野科目	教育環境学分野選択科目	遊び文化環境論研究	2	石川 恭	○	
		教育経営臨床論研究	2	倉本 哲男	○	
		学校適応論研究	2	石田 靖彦	○	
		教育哲学・思想論研究	2	野平 慎二	○	
		保育・幼児教育学研究	2	新井 美保子	○	
		教育方法・内容論研究	2	竹川 慎哉	○	
		学校危機管理論研究	2	村越 真		○
		教育工学論研究	2	村山 功		○
		身体運動指導論研究	2	吉田 和人		○
		養護実践教育学論研究	2	鎌塚 優子		○
		特別支援教育学研究	2	香野 毅		○
		情報教育学研究	2	塩田 真吾		○

人文 社会 系教 科学 分野 選択 科目	言語教育内容論研究	2	稲葉 みどり	○		
		民俗学教材論研究	2	野地 恒有	○	
		地理学教材論研究	2	伊藤 貴啓	○	
		国語科教育教材論研究	2	丹藤 博文	○	
		生活科教育内容論研究	2	中野 真志	○	
		外国語教育内容論研究	2	高橋 美由紀	○	
		外国語教育論研究	2	白畑 知彦		○
		歴史教材論研究	2	黒川 みどり		○
		国語教育論研究	2	坂口 京子		○
	自然 系教 科学 分野 科目	数学教材論研究	2	飯島 康之	○	
		物理教材論研究	2	岩山 勉	○	
		理科教育内容論研究	2	稲毛 正彦	○	
		数学教育内容論研究	2	小谷 健司	○	
		数学教育論研究	2	熊倉 啓之		○
		生物教育内容論研究	2	小南 陽亮		○
		理科教育論研究	2	郡司 賀透		○
	創造 系教 科学 分野 科目	保健教育内容論研究	2	古田 真司	○	
		美術教材論研究	2	伊藤 文彦		○
		体育教育論研究	2	新保 淳		○
		技術教育内容論研究	2	松永 泰弘		○
		家政教育内容論研究	2	小川 裕子		○
		技術教育教材論研究	2	紅林 秀治		○
		体育・課外活動教材論研究	2	杉山 康司		○
	家庭科教材論研究	2	村上 陽子		○	
専攻 応用 科目	必修	教科開発学セミナーⅠ	2	全教員	○	○
		教科開発学セミナーⅡ	2	全教員	○	○
	選択	教科開発学セミナーⅢ	2	全教員	○	○

7. 教員一覧

(愛知教育大学)

分野	氏名	職名・学位	現在の主たる研究テーマ
教育環境学	石川 恭	教授 博士 (教育学)	遊び文化環境論 教育社会論 余暇教育論 遊戯文化論 生涯スポーツ論 子どもと遊び論
	倉本 哲男	教授 博士 (教育学)	授業／教育課程・学級経営・学校経営論 カリキュラムマネジメント論 レッスン・スタディー論 アクションリサーチ論 Ed.D.指導論 サービス・ラーニング論

	野平 慎二	教授 博士（教育学）	教育哲学 教育思想史 物語論的人間形成論 美的人間形成論 システム理論と教育 道徳教育論
	石田 靖彦	准教授 博士（心理学）	教育・社会心理学 学校・学級への適応過程 関係の親密化 自己評価維持機制
	竹川 慎哉	准教授 博士（教育学）	教育方法学 教育課程論 批判的リテラシー教育 授業研究
人文 社会 系 教科 学	野地 恒有	教授 博士（文学）	社会科教育内容論 日本民俗論 近現代庶民生活史論 歴史民俗博物館論 博物館教育論 フィールドワーク調査論 郷土研究方法論
	稲葉みどり	教授 博士（学術）	英語科教育論 英語科教育方法論 英語教授法 異文化理解教育 日本語教授法 日本語教育実践研究 留学生教育 第一言語習得及び第二言語習得
	中田 敏夫	教授 文学修士	外国人児童生徒教育論 国語リライト教材論 母語保持政策論 言語文化論 戦前台湾における国語教育論 標準語と地域言語教育論 近代標準語成立論 近代語彙（学校用語）の成立論
	伊藤 貴啓	教授 博士（理学）	地理学教材論 農業地理論 経済地理論 地誌論 教師の力量形成と地域教材開発 農業地域の自立的発展とその条件 ヨーロッパ国境地帯の空間動態 ヨーロッパにおけるルラルリズムと農村の持続的 発展

	中野 真志	教授 博士（文学）	生活科教育論 総合的な学習の理論と実践 社会科教育論 カリキュラム論 教育方法論 ジョン・デューイの教育論
	丹藤 博文	教授 教育学修士	言語教育方法論 文芸批評理論 文学教育論 文学教材研究論 国語科授業方法論 物語理論研究
	高橋美由紀	教授 博士（地域研究）	小学校英語教育論（早期英語教育論） 小学校英語教育の理論と実践 小学校英語科授業方法論 小学校・中学校英語における教材開発論 諸外国の言語政策と外国語（英語）教育研究 児童の多言語多文化教育研究
自然系教科学	岩山 勉	教授 博士（理学）	理科教材開発論 理科（物理）教育論 理科におけるものづくり教育 先端科学技術の活用と還元 自然エネルギー利用技術 半導体光物性 ビーム（イオン，レーザー）物性
	稲毛 正彦	教授 理学博士	理科教育内容論 環境科学による教科開発 無機化学 錯体化学 生物無機化学
	飯島 康之	教授 教育学修士	数学教育論 教材開発論 学習環境開発論 コンテンツ開発論 授業研究 図形指導 数学的問題解決
	小谷 健司	教授 博士（理学）	数学教材開発 常微分方程式論
創造系教科学	古田 真司	教授 博士（医学）	学校保健論 保健教育内容論 学校疾病予防論 健康情報リテラシー 保健分野の批判的思考力 養護教諭が行う保健指導 児童・生徒の不定愁訴への対応

(静岡大学)

分野	氏名	職名・学位	現在の主たる研究テーマ
教育環境学	村越 真	教授 博士 (心理学)	学校の危機管理 空間認知と地図理解の認知過程 自然体験活動のリスクマネジメント リスク認知 安全教育
	村山 功	教授 教育学修士	認知心理学 理科教育 情報教育 I C T 校内研修 授業研究
	吉田 和人	教授 博士 (スポーツ健康科学)	身体運動学 身体運動指導論, スポーツパフォーマンス分析 スポーツの科学サポート実践 幼児期の運動発達
	鎌塚 優子	教授 博士 (教育学)	養護教諭の実践に関わる教育 健康相談論 学校保健学 特別な教育的支援を要する子どもの健康教育 養護教諭養成教育
	香野 毅	教授 博士 (心理学)	特別支援教育 からだを窓口とした援助 障害領域における心理支援 動作法 子育て支援
	塩田 真吾	准教授 博士 (学術)	情報教育 I C T キャリア教育 遠隔教育
文社会系教科学	黒川みどり	教授 博士 (文学)	日本近現代史 日本近現代思想史 歴史教育 近代日本のマイノリティ 近代日本のアジア認識
	白畑 知彦	教授 博士 (文学)	第二言語としての英語習得研究 第二言語としての日本語習得研究 外国語としての英語教授法 外国語学習論 児童英語教育論 教室における第二言語習得 外国語学習評価論 英語教育課程論

	坂口 京子	教授 博士 (教育学)	国語・国語科 (言語教育) カリキュラム論 国語科目的・目標論 国語科授業研究 国語科教材開発論 国語科教師教育 戦後国語教育史
自然系 教科学	小南 陽亮	教授 理学博士	生物多様性教育のための教材開発 生態系教育内容論 生態系における生物種間相互作用 里山における生物多様性の保全 生物の共存メカニズム 生物群集の動態 絶滅危惧種の保全 植物の繁殖戦略
	熊倉 啓之	教授 理学修士	算数教育論 数学教育論 算数・数学教育課程論 算数・数学授業研究 算数・数学教材開発論 算数・数学教育の目的論 小・中・高接続カリキュラム論 数学教育の国際比較研究
	郡司 賀透	准教授 博士 (教育学)	理科カリキュラム論 理科カリキュラム史研究 理科教材論 理科教育内容選択論 理科授業研究
創造系 教科学	新保 淳	教授 博士 (教育学)	身体教育論 授業研究論 教員養成論 教師教育論 理論と実践の関係 スポーツ科学論 体育哲学
	松永 泰弘	教授 博士 (工学)	熱弾性論 材料強度学 機能性材料応用開発 ものづくり教材開発 ものづくり教材の授業実践 動くおもちゃのデザインとメカニズム 地域におけるものづくり交流 ものづくり教室の評価基準
	小川 裕子	教授 博士 (工学)	学校行事等から繋げる家庭科の授業 住生活学習の教材開発 住生活学習で育つ能力

			家庭科教育論 家庭科内容論
	伊藤 文彦	教授 学術修士	美術教育論 デザイン教育論 デザインリテラシー教育論 デザインプロセス論 鑑賞方法 発想支援方法 コミュニケーションデザイン論
	紅林 秀治	教授 博士 (学校教育学)	技術教育論 技術教育教材開発 設計を主体とした技術教育 システム概念の形成過程
	杉山 康司	教授 博士 (スポーツ健康科学)	身体運動学 体力科学 体育・スポーツ科学 発育発達の科学 加齢と健康科学 スポーツ指導論
	長谷川 慎	准教授 修士 (音楽)	音楽教育学 日本音楽 地歌箏曲演奏
	村上 陽子	教授 博士 (学術)	食文化 食品・料理色彩学 食品物性学 調理学 家庭科におけるものづくり教育 教科連携

8. 教育方法

1 教育・研究指導

大学院の教育は、専攻に応じて教育上必要なものとして開設する授業科目の履修及び博士論文の作成等に対する指導によって行われます。

(1) 主指導教員

学位論文及び修学その他学生生活上の指導・助言を行うため、専攻に属する専任教員（大学院設置基準第9条に定める教員）のうちから主指導教員を定めます。主指導教員は、入学試験の出願に際して出された第1希望、または第2希望の教員であり、合格発表の際に通知された教員です。

(2) 副指導教員等の届

主指導教員とは別に、専攻に属する専任教員の中から、2名以上の副指導教員と、研究上の必要性に応じて指導補佐教員を定め、研究指導を受けます。副指導教員については、各大学から1名以上を選ぶものとします。学生は、原則として、授業開始日（合同ガイダンス実施日）から10日以内に、主指導教員の助言を得て副指導教員および指導補佐教員を選び、所定の様式による「副指導教員等申請書」により、研究科長あてに提出しなければなりません。

(3) 副指導教員等の決定

研究科長は、学生から提出のあった副指導教員等申請書に基づき、共同専攻連絡協議会の議を経て、それぞれの副指導教員および指導補佐教員を決定します。

2 単 位

各授業科目の単位数は、授業内及び授業外を合わせて、45時間の学修をもって1単位とします。多くの授業が、1時限（1コマ）を2時間（実際は90分）として、16回（定期試験を含む）で2単位としているのは、1時限の教室内の授業に対して、2時限分の教室外での事前学習及び事後学習（以下「自習学習」という。）を行って2単位という意味です（8回では1単位となります）。

3 授 業

(1) 学 期（授業期間）

学期を前期（4月1日～9月30日）、後期（10月1日～翌年3月31日）の2学期に区分し、さらに、開講する授業の日程によって、前期をおおよそA週（4月から5月）、B週（6月から7月）、C週（7月から8月）、後期をD週（10月）、E週（11月から1月）、F週（1月から2月）に分けて授業を実施します。

●詳細については、「時間割および授業カレンダー」を参照してください。

(2) 授業方法

授業の方法は、講義、演習のいずれかにより行います。

(3) 授業時間

授業は、原則として土曜日と日曜日の各5時限（計10時限）で実施します。

◎ 授業時間（土曜日および日曜日）

時 限	授業開始 ・ 終了時刻
1 時 限	9 : 0 0 ~ 1 0 : 3 0
2 時 限	1 0 : 4 0 ~ 1 2 : 1 0
3 時 限	1 3 : 0 0 ~ 1 4 : 3 0
4 時 限	1 4 : 4 0 ~ 1 6 : 1 0
5 時 限	1 6 : 2 0 ~ 1 7 : 5 0

(4) 履修方法

学生は、原則として土曜日と日曜日に愛知教育大学・静岡大学の両キャンパスで開講される授業及び夏季・冬季の休業等の長期休業期間に集中講義で開講される授業を履修します。また、これらの他に浜松等で開講される授業もあります。

4 履修登録

(1) 履修手続き

学生は、主指導教員と相談の上、授業開始日（合同ガイダンス実施日）から10日以内に、その年度に履修しようとする全ての授業科目を愛知教育大学では教務課、静岡大学では教育学部学務係に提出します。その際、前期の履修科目については4月中に開講される科目を除き、4月末までに各事務に届け出れば変更は可能です。後期の履修科目については、9月末までに各事務に変更を届け出てください。それぞれの届け出期限以降の変更は、原則として認められません。なお、いずれの変更も主指導教員と相談の上、その許可を得て届け出をしてください。

(2) 講義室（集合場所）

講義等の初回の集合場所は、原則として本籍を置く大学の共同大学院講義室とします。ただし、掲示や合同ガイダンス等により指示ある場合には、指定場所へ集合してください。

5 成績および単位について

(1) 成績の評価は、筆記試験、口答試問、報告書等（以下「筆記試験等」）により行います。

(2) 成績評価のための条件

成績の評価には、その授業時間の3分の2以上の出席を必要とします。

(3) 成績評価の基準

成績の評価は、その授業の構成単位をS秀・A優・B良・C可又はD不可の評語にて判定し、C以上を合格、D不可は不合格とし、合格した単位は取り消すことができません。ただし、下記の単位は認定しません。

成績評価の基準

評価	評価基準（100点満点の場合）		
S	秀	90点以上	合格
A	優	80点～89点	
B	良	70点～79点	
C	可	60点～69点	
D	不可	0～59点	不合格

① 合格した授業科目を再度受講して
修得した単位

② その他、定められた履修方法以外
の方法により修得した単位

(4) 単位の授与

本学は、履修登録した授業科目の授業を履修し、当該授業の筆記試験等に合格した学生に対し、所定の単位を授与します。

(5) 再・追試験

○ 再試験は行いません。

○ 追試験は、病気・災害等の特別の事情がある場合、愛知教育大学では教務課、静岡大学では教育学部学務係に願い出ることによって許可されることがあります。この願い出については、指導教員を通じて提出します。

(6) 不正行為

○ 筆記試験等で不正と認められる行為があったときは、当該科目を不合格とします。

○ 不正行為の内容によっては、その学期に修得したすべての単位を削除します。場合によっては、学則の規定により処分します。

6 学位論文の提出

学位論文及び学位授与は、指導教員の指導を受けて作成し、大学院研究科の審査を受けなければなりません。その詳細については、別途、お知らせします。

7 長期履修学生制度について

この制度は、原則として、職業を有している方や、育児・介護等の事由により通常期間で

の就学が困難であると認められる方の大学院での進学環境を改善するためのものです。
現在のところ、両大学での取り扱いが異なるため、その詳細は、別途お知らせします。

8 修学上の注意事項

- 休学や退学の手続き等は、必要に応じて、各大学で指導を受けて下さい。
- 気象警報発令時・交通機関運休時・東海地震注意情報発令時等における休講の取扱いについては、両大学で異なるので、別途お知らせします。
- 両大学で利用できる情報ネットサービスの内容については、大学ごとに、別途お知らせします。

愛知教育大学と静岡大学の共同教科開発学専攻連絡協議会規程

2011年12月14日
規程第142号

(目的)

第1条 この規程は、愛知教育大学学則（2004年学則第1号）第25条第3項及び静岡大学大学院規則（昭和39年4月27日）第5条に定める共同教科開発学専攻（以下「共同専攻」という。）に係る教育，研究等に関する重要な事項を協議し，円滑な管理運営を行うため設置する共同教科開発学専攻連絡協議会（以下「連絡協議会」という。）の組織及び運営に関し，必要な事項を定める。

(連絡協議会)

第2条 連絡協議会は，次の各号に掲げる委員で組織する。

- (1) 愛知教育大学及び静岡大学（以下「構成大学」という。）の共同専攻の専任教員
- (2) 構成大学の研究科長が特に必要と認めた者若干名
- 2 連絡協議会に議長を置き，連絡協議会の業務を掌理する。
- 3 議長は，連絡協議会を招集し，その議長となる。
- 4 議長の任期は，1年とし，委員の互選により選出し，構成大学間で隔年交代とする。
- 5 連絡協議会に副議長を置き，副議長は，議長を補佐し，議長に事故があるときは，その職務を代行する。
- 6 副議長の任期は，1年とし，議長が所属する大学と異なる大学の委員のうちから委員の互選により選出する。

(協議事項)

第3条 連絡協議会は，共同専攻に係る次の各号に掲げる事項を協議する。

- (1) 構成大学において開設する授業科目及びこれに係る教員の配置などカリキュラムの編成及び実施に関する基本的事項
- (2) 研究指導教員の選定に関する事項
- (3) 入学者選抜の方針及び実施計画に関する事項
- (4) 学生の身分取扱及び厚生補導に関する事項
- (5) 成績評価の方針に関する事項
- (6) 学位審査委員会の設置に関する事項
- (7) 学位の授与及び課程修了の認定に関する事項
- (8) 教育研究活動等の状況の評価に関する事項
- (9) 予算に関する事項
- (10) 広報に関する事項
- (11) 自己点検・評価に関する事項
- (12) FD推進に関する事項
- (13) 共同専攻の設置に関する協定書の改正及び廃止並びに運用に関する事項
- (14) その他構成大学が必要と認めた事項

- 2 協議内容は、構成大学の教授会若しくは研究科委員会又は教育研究評議会（以下「会議等」という。）に報告し、必要に応じて承認を得るものとする。
- 3 前項の承認を得るものについては、同項の会議等の議を経て、連絡協議会が別に定める。（専門委員会）

第4条 連絡協議会の円滑な運営を図るため、連絡協議会の下に次の各号に掲げる専門委員会を置く。

- (1) 運営委員会
- (2) 学務委員会
- (3) 入試委員会
- (4) 学位審査委員会
- (5) 教員人事選考委員会
- (6) 紀要編集委員会
- (7) その他連絡協議会が必要と認めた委員会

- 2 専門委員会に関する事項は、別に定める。（議事及び運営）

第5条 連絡協議会は、構成委員の3分の2以上の出席をもって成立する。ただし、次の各号に掲げる者は、構成委員の総数に算入しない。

- (1) 休職又は停職中の者
- (2) 育児休業中の者
- (3) 30日以上にわたる連続した休暇を取得中の者

- 2 連絡協議会の議事は、出席委員の過半数の賛成をもって決し、可否同数の場合は議長が決する。ただし、連絡協議会が特に重要と認めた事項については、出席委員の3分の2以上の賛成により決する。
- 3 連絡協議会が必要と認めたときは、委員以外の者の出席を求め、その意見を聴くことができる。
- 4 この規程に定めるもののほか、連絡協議会の議事及び運営について必要な事項は、連絡協議会が定める。

（事務局）

第6条 この規程に定める事務を取り扱うために事務局を置く。

- 2 事務局は、愛知教育大学事務局及び静岡大学教育学部事務部が担当する。

附 則

この規程は、2012年4月1日から施行する。

附 則（2014年規程第39号）

この規程は、2014年12月17日から施行する。

附 則（2015年規程第58号）

この規程は、2015年6月3日から施行する。

Ⅱ. 共同教科開発学専攻連絡協議会 議長年次報告

教科開発学連絡協議会 議長年次報告

1. 入学試験及び入学者について

2020年度入学試験は、2019年11月2日（土）に静岡大学を会場に実施されました。合格発表は11月15日（金）に行い、10名（愛教大籍4名、静大籍6名）の合格者をだすことができました。

なお、2021年度入学試験は2020年10月31日（土）、合格発表は11月16日（月）を予定しています。

2. 2019年度合同ガイダンスについて

本年度は、2019年4月7日（日）に浜松市のアクトシティ浜松内にある、（財）浜松市文化振興財団 研究交流センターにて開催されました。1年生は午前10時30分から、2年生以上は午後1時からガイダンスを実施しました。午前と午後あわせて、学生は37名、共同教科開発学専攻専任教員は32名が出席しました。事務手続き処理や履修方法を説明する目的以外にも、同じ目的に向かって努力していくという動機づけを高めること、そしてお互いに親睦を深めることも目的です。これまで両大学の間地点である浜松市で合同ガイダンスを行っていましたが、今後は、両大学を交互に会場とし、2020年度は愛知教育大学が会場となります。

3. 2019年度教科開発学研究会および教科開発学セミナーⅠ、Ⅱ、Ⅲについて

教科開発学研究会は、2019年8月24日（土）に愛知教育大学で開催されました。研究発表4件、講演会、修了予定者による発表を含む有意義な場となりました。

教科開発学セミナーⅠ、Ⅱは2020年2月15、16日（土・日）の2日間にわたって、静岡大学で開催されました。セミナーⅠは1年生が、セミナーⅡは2年生が対象で、それまでに自身が研究してきた成果を報告します。1、2年生や全教員が参加して、朝から夕方まで各報告に対して活発な議論が展開されます。初日の夜は院生や教員が集い、夕食をともにしながら交流を深めます。セミナーⅢは、2019年8月25日（日）に愛知教育大学で開催しました。これは、博士論文の概要の準備ができ、提出が目前の3年生が対象で、その報告をもとに、全教員が参加し議論や助言を行い、博士論文提出に向けた最終準備を行う場でもあります。他の学生や今後提出する予定の学生も多数聴講に来ます。

4. 共同教科開発学専攻連絡協議会等

基本的に、毎月1回、全教員が集まり専攻連絡協議会が開催されます。この会議は愛教大と静大の全教員による会議のため、テレビ会議システムを使用して実施されています。この会議のために、各大学では専攻会議というものを開催し、連絡協議会で審議する議題について、それぞれの大学の意見を集約します。

5. 共同教科開発学専攻指導体制

それぞれの大学に在籍する学生に対し、主指導教員1名の他に、複数名の副指導教員、指導補佐教員が指導にあたります。そして、副指導教員の中には、必ず他方の大学の教員が少なくとも1名加わることで、院生が近視眼的思考に陥らないように努めています。このような指導体制は本専攻の特色の一つでもあります。

6. その他

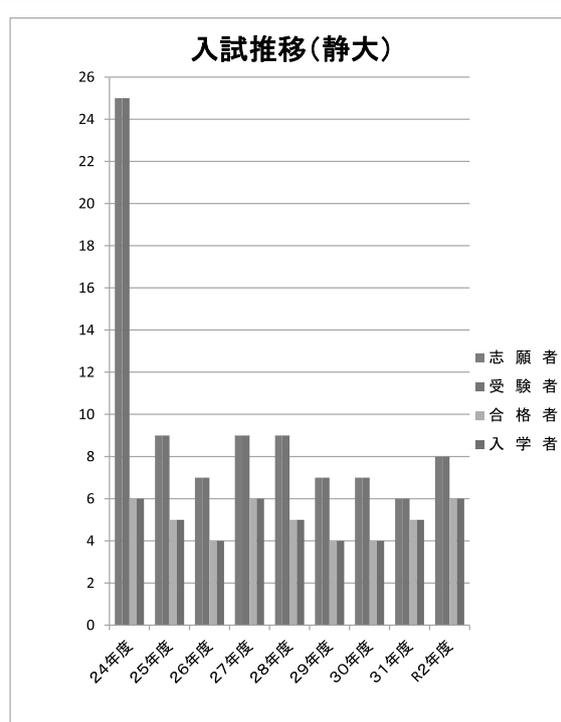
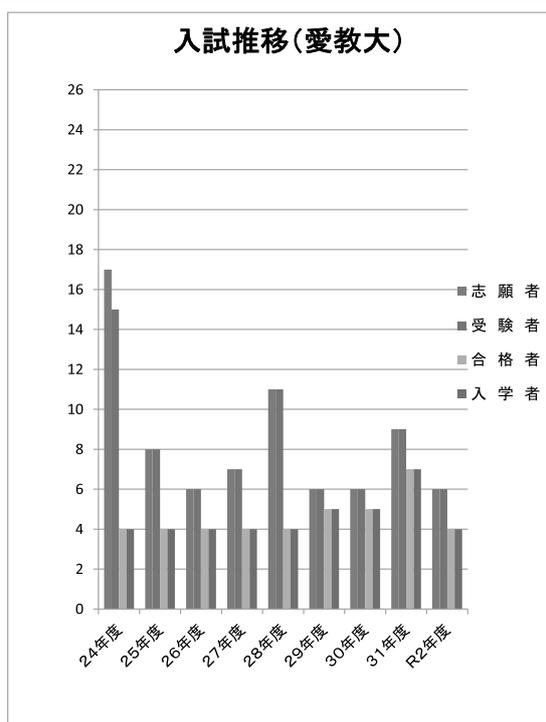
論文審査会（最終試験）が2019年7月15日（月）（於：静岡大学）と2020年1月26日（日）（於：愛知教育大学）で行われました。審査会は公開で実施され、それぞれ1名ずつが臨み、博士論文に対して忌憚のない問に対し、明確な回答が行われました。この審査会はテレビ会議システムでもう一方の大学にも同時に配信されました。その結果、今年度は計2名の合格が連絡協議会で認められました。

入学試験実施状況

愛知教育大学															
年度	区分	定員	志願者			受験者			合格者			入学者			合格率
			男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	
24年度		4	8	9	17	7	8	15	1	3	4	1	3	4	26.67%
25年度		4	4	4	8	4	4	8	1	3	4	1	3	4	50.00%
26年度		4	3	3	6	3	3	6	3	1	4	3	1	4	66.67%
27年度		4	3	4	7	3	4	7	1	3	4	1	3	4	57.14%
28年度		4	5	6	11	5	6	11	3	1	4	3	1	4	36.36%
29年度		4	3	3	6	3	3	6	3	2	5	3	2	5	83.33%
30年度		4	5	1	6	5	1	6	5	0	5	5	0	5	83.33%
31年度		4	5	4	9	5	4	9	4	3	7	4	3	7	77.78%
R2年度		4	6	0	6	6	0	6	4	0	4	4	0	4	66.67%

静岡大学															
年度	区分	定員	志願者			受験者			合格者			入学者			合格率
			男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	
24年度		4	21	4	25	21	4	25	5	1	6	5	1	6	24.00%
25年度		4	8	1	9	8	1	9	4	1	5	4	1	5	55.56%
26年度		4	5	2	7	5	2	7	3	1	4	3	1	4	57.14%
27年度		4	5	4	9	5	4	9	4	2	6	4	2	6	66.67%
28年度		4	5	4	9	5	4	9	2	3	5	2	3	5	55.56%
29年度		4	4	3	7	4	3	7	3	1	4	3	1	4	57.14%
30年度		4	4	3	7	4	3	7	3	1	4	3	1	4	57.14%
31年度		4	5	1	6	5	1	6	4	1	5	4	1	5	83.33%
R2年度		4	5	3	8	5	3	8	3	3	6	3	3	6	75.00%

合計															
年度	区分	定員	志願者			受験者			合格者			入学者			合格率
			男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	
24年度		8	29	13	42	28	12	40	6	4	10	6	4	10	25.00%
25年度		8	12	5	17	12	5	17	5	4	9	5	4	9	52.94%
26年度		8	8	5	13	8	5	13	6	2	8	6	2	8	61.54%
27年度		8	8	8	16	8	8	16	5	5	10	5	5	10	62.50%
28年度		8	10	10	20	10	10	20	5	4	9	5	4	9	45.00%
29年度		8	7	6	13	7	6	13	6	3	9	6	3	9	69.23%
30年度		8	9	4	13	9	4	13	8	1	9	8	1	9	69.23%
31年度		8	10	5	15	10	5	15	8	4	12	8	4	12	80.00%
R2年度		8	11	3	14	11	3	14	7	3	10	7	3	10	71.43%



愛知教育大学大学院・静岡大学大学院 共同教科開発学専攻
2019年度 合同ガイダンス

日 時： 2019年4月7日（日） 10時30分～16時30分（予定）
場 所：（財）浜松市文化振興財団 研修交流センター6F 62研修交流室
（浜松市中区板屋町111番地の1）＜JR浜松駅前＞

◎午前の部（新入生向け）10時30分～12時00分

出席者：共同教科開発学専攻連絡協議会 正副議長，学務委員長（静岡大学）
2019年度新入学生 12名
両大学事務職員 4名

[プログラム]

- 1 挨拶（正副議長 伊藤教員，岩山教員）
- 2 出席者紹介 ※所属・氏名等のみ
- 3 専攻の概要（議長 伊藤教員）
- 4 教育方法について（学務委員長 小川教員）
- 5 副指導教員の申請について（学務委員長 小川教員）
- 6 研究紀要について（議長 伊藤教員）
- 7 履修登録，各大学での手続，学生生活および図書館利用等について（事務職員）

◎午後の部（全学生対象）13時00分～16時30分

出席予定者：共同専攻専任教員（愛教大，静大とも）
2019年度在学予定学生
両大学事務職員 4名

[プログラム]

司会進行：学務委員長

- 1 挨拶（共同専攻連絡協議会議長 伊藤教員）
- 2 出席者紹介（教員・学生） ※所属・氏名等のみ
- 3 年間スケジュールと時間割（学務委員長 小川教員）
 - ・教科開発学セミナーⅢ
（日程：2019年8月25日（日），場所：愛知教育大学）
 - ・教科開発学セミナーⅠ及びⅡ
（日程：2020年2月15日（土）・16日（日），場所：静岡大学）
 - ・教科開発学研究会
（日程：2020年3月1日（日），場所：愛知教育大学）
 - ・2020年度 合同ガイダンス
（日程：2020年4月上旬（4月最初の日曜日（予定）），場所：アクトシティ浜松）
- 4 研究計画と学位取得について（学位審査委員長 黒川教員）
 - ・学位提出までのスケジュールの確認
 - ・提出書類，手続きの確認，審査日程等
- 5 研究紀要について（紀要編集委員長 村上教員）
- 6 教科開発学研究会について（議長 伊藤教員）
- 7 ハラスメントについて（静岡大学 小川教員）
- 8 休憩及び履修相談等

- ・副指導教員の決定（新入学生）
- ・籍を置かない大学側の副指導教員との面談（2～3年生）
- ・履修・研究・博士論文執筆・学生生活等の相談（全学年）

9 分野別ガイダンス

教育環境学，人文社会系教科学，自然系教科学の方はこの室内で分野別に分かれてください。
創造系教科学の方はこの階の61研修交流室に移動してください。

※打ち合わせ終了後は自由解散となります。

●全体ガイダンスでの配付資料：

- 1 学生便覧
- 2 学生生活に関する冊子（新入生分のみ）
- 3 時間割表（カレンダー）
- 4 学生名簿
- 5 教員名簿（全教員の名簿と連絡先一覧）
- 6 指導教員一覧（2年生・3年生の指導教員，副指導教員等の一覧）
- 7 履修登録票（1年生から3年生へ配布）
- 8 学位提出までのスケジュール表
- 9 ガイダンス式次第（本資料）

●1年生ガイダンスでの配付資料：

- 1 副指導教員等申請書
- 2 学生証等
- 3 授業シラバス
- 4 その他，関係書類

※会場は午前中から使用できます。

午前中に相談・指導なさるご予定の先生は，事前に学務委員に申し出てください。

※全ての打ち合わせは，17時までに終わるようお願いします。

**愛知教育大学大学院・静岡大学大学院共同教科開発学専攻
2019年度教科開発学セミナーⅢ（合同セミナーⅢ）開催要項**

日 時：2019年8月25日（日） 午前10時00分～
場 所：愛知教育大学 教育未来館3C（予定）
出席予定者：2019年度3年生5名（静大3名，愛教大2名）
共同専攻専任教員
発表者以外の当専攻学生（聴講のみ全学年対象）

○教科開発学セミナー（Ⅰ，Ⅱ，Ⅲ）の概要

本教科開発学セミナーは、院生が教科開発学とは何かを問いながら、それまでに研究してきた成果を、他の院生ならびに全教員の前で口頭発表する場である。他分野の教員も加わり、異なる専門性の観点から研究成果について論評する授業形態は、本専攻の特色の1つである。このセミナーでの研究発表の積み重ねが、博士論文となって実を結ぶことが期待される。さらに、「教科開発学という学問領域とは何か」について、全員で議論することにより、教員と院生の共通理解を深めて行く。

○教科開発学セミナーⅢの概要（シラバスより）

博士論文の目次構成を確定し、博士論文の草稿を基に、その内容を発表する。

※3年生対象の選択科目であるが、学位論文を提出する年度に履修することが望ましい。

○セミナーⅢの前後の研究指導

セミナーⅢは、事前および事後の研究指導の時間を含めて、1科目2単位として認定している。

学生は、事前に主指導教員や他の指導教員による個別の研究指導を受けて、発表内容を検討しておくとともに、事後はセミナーⅢの参加者の意見や議論を踏まえて、指導教員の指導の下に博士論文完成に向けて検討することが必要である。

○発表の概要

- ・1演題，発表25分，質疑応答25分の計50分とする。
- ・1会場で実施する
- ・座長は、副指導教員のうち学生が籍を置かない側の教員が担当する。

○当日のスケジュール 進行：学務委員

- 1 開会の挨拶 共同専攻連絡協議会 議長（10時00分～9時05分）
- 2 発表5本（10時05分～15時25分）
- 3 全体の講評 共同専攻連絡協議会 副議長（15時25分～15時30分）

○自由発表時間

15時35分～17時00分を、セミナーⅢの単位を既修得の院生が再度発表できる時間枠（自由発表時間）とする。自由発表時間については、学務委員会は会場及び設備を提供するが、運営には関与しないので、発表を希望する院生とその指導教員で連携して実施すること。

なお、聴講については、院生，教員とも任意とする。

令和元年度 教科開発学セミナーⅢ スケジュール

【セミナーⅢ】

会場 愛知教育大学 教育未来館3C

開催日 令和元年8月25日(日)

日程

10:00 ~ 10:05 開会挨拶(共同教科開発学専攻連絡協議会議長)

10:05 ~ 15:25 セミナーⅢ発表

自	至	分野	学籍番号	氏名	主指導教員 (主査)	副指導教員 (副査)	副指導教員 (副査)	副指導教員 (副査)	指導補佐 教員	研究主題
10:05	10:55	創造系教科学	217D005	田中 滉至	古田 真司	倉本 哲男	小川 裕子			単元「健康の社会的決定要因」の開発に関する研究
11:00	11:50	人文社会系教科学	30740002	下田 実	黒川みどり	新保 淳	丹藤 博文		坂口 京子	「個」を「場」に導く指導に関する研究
12:45	13:35	創造系教科学	30740003	西ヶ谷浩史	紅林 秀治	新保 淳	飯島 康之	小川 裕子		設計を中心にした授業過程の研究
13:40	14:30	創造系教科学	30840007	百瀬 容美子	新保 淳	村越 真	野地 恒有			視覚障害児童・生徒の運動学習に寄与するイメージ生成指導法の開発
14:35	15:25	自然系教科学	214D001	大西 英夫	稲毛 正彦	古田 真司	村山 功		飯島 康之	聴覚障害児の内包量概念発達における特徴的な理解についての基礎的な研究

15:25 ~ 15:30 全体の講評(共同教科開発学専攻連絡協議会副議長)

愛知教育大学大学院・静岡大学大学院共同教科開発学専攻
令和元年度教科開発学セミナーⅠ・Ⅱ（合同セミナーⅠ・Ⅱ）開催要項

日 時：令和2年2月15日（土）12時30分～17時50分 セミナーⅡ

令和2年2月16日（日）10時00分～13時35分 セミナーⅠ

場 所：静岡大学教育学部G棟201,202

出席予定者：セミナーⅠ受講生13名（愛教大5名，静大8名）

セミナーⅡ受講生11名（愛教大6名，静大5名）

共同専攻専任教員，発表者以外の当専攻学生（聴講のみ全学年対象）

○教科開発学セミナー（Ⅰ，Ⅱ，Ⅲ）の概要

本教科開発学セミナーは，院生が教科開発学とは何かを問いながら，それまでに研究してきた成果を，他の院生ならびに全教員の前で口頭発表する場である。他分野の教員も加わり，異なる専門性の観点から研究成果について論評する授業形態は，本専攻の特色の1つである。このセミナーでの研究発表の積み重ねが，博士論文となって実を結ぶことが期待される。さらに，「教科開発学という学問領域とは何か」について，全員で議論することにより，教員と院生の共通理解を深めて行く。

○教科開発学セミナーⅠ・Ⅱの位置付け

セミナーⅠは博士論文の構想発表会，セミナーⅡは博士論文の中間発表会と位置付けられている。

○発表の概要

- ・1 演題につき，以下のとおりとする。

セミナーⅠ：発表15分，質疑応答15分 計30分

セミナーⅡ：発表20分，質疑応答20分 計40分

- ・2 会場で実施する。

- ・座長は，副指導教員のうち学生が籍を置かない側の教員が担当する。

○当日のスケジュール 進行：学務委員

【2/15（土） セミナーⅡ】

- 1 開会の挨拶 共同専攻連絡協議会 議長（12時30分～12時35分）
- 2 発表（12時35分～17時45分）
- 3 講評 共同専攻連絡協議会 副議長（17時45分～17時50分）
- 4 懇親会（19時00分～21時00分）

【2/16（日） セミナーⅠ】

- 1 挨拶 共同専攻連絡協議会 副議長（10時00分～10時05分）
- 2 発表（10時05分～14時25分）
- 3 全体の講評 共同専攻連絡協議会 議長（14時25分～14時30分）

令和元年度 教科開発学セミナーⅠ・Ⅱ スケジュール

会場 静岡大学 教育学部G棟201, 202

開催日 令和2年2月15日(土)・令和2年2月16日(日)

日程

【2/15(土) セミナーⅡ】

12:30 ~ 12:35 開会挨拶(共同教科開発学専攻連絡協議会議長)

12:35 ~ 17:05 セミナーⅡ発表(40分:発表20分, 質疑応答20分)

G201

自	至	分野	学籍番号	氏名	主指導教員 (主査)	司会
12:35	13:15	人文社会系教科学	218D003	檜垣 栄慈	野地 恒有	白畑 知彦
13:20	14:00	人文社会系教科学	217D002	市川 裕理	稲葉みどり	白畑 知彦
14:05	14:45	人文社会系教科学	218D002	加藤 智	中野 真志	小川 裕子
14:50	15:30	人文社会系教科学	30840003	児玉 恵太	白畑 知彦	野地 恒有
15:35	16:15	人文社会系教科学	30840005	中山 敬司	黒川みどり	野地 恒有

G202

自	至	分野	学籍番号	氏名	主指導教員 (主査)	司会
12:35	13:15	創造系教科学	30840002	河合 紳和	新保 淳	伊藤 貴啓
13:20	14:00	創造系教科学	30840004	谷川 ゆり	杉山 康司	野地 恒有
14:05	14:45	創造系教科学	30840007	百瀬 容美子	新保 淳	野地 恒有
14:50	15:30	自然系教科学	30840001	荒谷 航平	郡司 賀透	岩山 勉
15:35	16:15	自然系教科学	218D004	新鶴田 道也	岩山 勉	熊倉 啓之
16:20	17:00	自然系教科学	218D005	マムチャンセン	岩山 勉	小南 陽亮

17:00 ~ 17:05 講評(共同教科開発学専攻連絡協議会副議長)

【2/16(日) セミナー I】

10:00 ~ 10:05 挨拶(共同教科開発学専攻連絡協議会副議長)

10:05 ~ 13:00 セミナー I 発表(30分:発表15分, 質疑応答15分)

G201

自	至	分野	学籍番号	氏名	主指導教員 (主査)	司会
10:05	10:35	人文社会系教科学	219D004	中村 仁志	中野 真志	白畑 知彦
10:40	11:10	人文社会系教科学	30940004	島崎 治子	白畑 知彦	野地 恒有
11:15	11:45	創造系教科学	219D007	武市 裕子	古田 真司	村越 真
11:50	12:20	創造系教科学	219D006	澤田 育子	古田 真司	紅林 秀治
12:25	12:55	創造系教科学	30940001	青木 麟太郎	紅林 秀治	飯島 康之

G202

自	至	分野	学籍番号	氏名	主指導教員 (主査)	司会
10:05	10:35	自然系教科学	30940003	塩澤 友樹	熊倉 啓之	飯島 康之
10:40	11:10	自然系教科学	219D005	大久保 博和	岩山 勉	郡司 賀透
11:15	11:45	教育環境学	219D001	片岡 佑衣	石川 恭	新保 淳
11:50	12:20	教育環境学	30940005	望月 大	村越 真	伊藤 貴啓
12:25	12:55	教育環境学	219D002	杉山 立	倉本 哲男	村越 真

12:55 ~ 13:00 全体の講評(共同教科開発学専攻連絡協議会議長)

2019年度共同教科開発学専攻 連絡協議会等 開催日

	専攻会議(静大) 【教授会後～】 G103	専攻会議(愛教大)17:00～ 未来館3A講義室	合同連絡協議会 【16:45～】
4月	4/11(木)	4/15(月)	4/17(水)
5月	5/9(木)	5/20(月)	5/23(木)
6月	6/13(木)	6/17(月)	6/19(水)
7月	7/11(木)	7/22(月)	7/25(木)
8月	/	/	/
9月	9/12(木)	9/17(火)	9/19(木)
10月	10/10(木)	10/21(月)	10/17(木)
11月	11/14(木)	11/18(月)	11/21(木)
12月	12/12(木)	12/16(月)	12/19(木)
1月	1/16(木)	1/20(月)	1/23(木)
2月	2/13(木)	2/17(月)	2/19(水)
3月	3/13(金) 10:30～	3/16(月)	3/18(水)

令和元年度愛知教育大学・静岡大学共同教科開発学専攻 各委員会委員名簿

委員会名	静岡大学			愛知教育大学		
	分野	R1	氏名	分野	R1	氏名
運営委員会	教育環境学		村越 真	自然系教科学	○	岩山 勉
	教育環境学	◎	村山 功	人文社会系教科学		野地 恒有
	人文社会系教科学		白畑 知彦	教育環境学		野平 慎二
	人文社会系教科学		黒川 みどり	人文社会系教科学		稲葉 みどり
	自然系教科学		熊倉 啓之	教育環境学		倉本 哲男
	自然系教科学		小南 陽亮	自然系教科学		稲毛 正彦
	自然系教科学		郡司 賀透	自然系教科学		飯島 康之
	創造系教科学		新保 淳			
	創造系教科学		小川 裕子			
	創造系教科学		杉山 康司			
	創造系教科学		紅林 秀治			
学務委員会	教育環境学		村山 功	教育環境学	○	野平 慎二
	自然系教科学		熊倉 啓之	教育環境学		石田 靖彦
	創造系教科学	◎	小川 裕子	創造系教科学		古田 真司
	教育環境学		吉田 和人			
	人文社会系教科学		坂口 京子			
入試委員会	人文社会系教科学		白畑 知彦	教育環境学	○	倉本 哲男
	創造系教科学	◎	新保 淳	自然系教科学		岩山 勉
	教育環境学		鎌塚 優子	人文社会系教科学		伊藤 貴啓
	人文社会系教科学		黒川 みどり			
	自然系教科学		郡司 賀透			
	教育環境学		塩田 真吾			
学位審査委員会	人文社会系教科学	◎	黒川 みどり	人文社会系教科学	○	稲葉 みどり
	創造系教科学		杉山 康司	人文社会系教科学		中野 真志
	創造系教科学		紅林 秀治	人文社会系教科学		丹藤 博文
紀要編集委員会	教育環境学		村越 真	自然系教科学	○	稲毛 正彦
	創造系教科学	◎	村上 陽子	人文社会系教科学		高橋 美由紀
				教育環境学		石川 恭
教員人事委員会	教育環境学		村越 真	自然系教科学	○	飯島 康之
	教育環境学		村山 功	自然系教科学		岩山 勉
	人文社会系教科学		白畑 知彦	人文社会系教科学		野地 恒有
	人文社会系教科学		黒川 みどり			
	自然系教科学	◎	熊倉 啓之			
	自然系教科学		小南 陽亮			
	自然系教科学		郡司 賀透			
	創造系教科学		新保 淳			
	創造系教科学		小川 裕子			
	創造系教科学		杉山 康司			
創造系教科学		紅林 秀治				

* ◎は委員長, ○は副委員長

* 将来構想, カリキュラム改革等の対応は, 運営委員会が行う。

平成24年度入学生 共同教科開発学専攻 指導体制

(愛知教育大学に籍を置く学生)

分野	学籍番号	氏名	ふりがな	主指導教員 (主査)	副指導教員 (副査)	副指導教員 (副査)	副指導教員 (副査)	指導補佐教員	指導補佐教員	研究主題
人文社会系教科学	212D001	大島 光代	おおしま みつよ	稲葉みどり	古田 真司	村越 真				発達障害児の国語科指導に効果的な教材開発の研究
自然系教科学	212D002	大西 俊弘	おおにし としひろ	岩山 勉	稲毛 正彦	熊倉 啓之	飯島 康之	丹沢 哲郎		テクノロジー利用を前提とした高等学校数学科のカリキュラム開発

平成25年度入学生 共同教科開発学専攻 指導体制

(静岡大学に籍を置く学生)

分野	学籍番号	氏名	ふりがな	主指導教員 (主査)	副指導教員 (副査)	副指導教員 (副査)	副指導教員 (副査)	指導補佐教員	研究主題
創造系教科学	30340004	齋藤 昇	さいとう のぼる	新保 淳	村越 真	野地 恒有			「言葉と音楽とのつながり」に着目した、声による表現学習の研究

(愛知教育大学に籍を置く学生)

分野	学籍番号	氏名	ふりがな	主指導教員 (主査)	副指導教員 (副査)	副指導教員 (副査)	副指導教員 (副査)	指導補佐教員	研究主題
創造系教科学	213D002	名倉 一美	なぐら かずみ	古田 真司	石川 恭	村越 真			幼稚園の「人間関係」領域における発達障害児の支援に関する研究

平成26年度入学生 共同教科開発学専攻 指導体制

(静岡大学に籍を置く学生)

分野	学籍番号	氏名	ふりがな	主指導教員 (主査)	副指導教員 (副査)	副指導教員 (副査)	副指導教員 (副査)	副指導教員 (副査)	指導補佐教員	研究主題
人文社会科学	30440001	石川 芳恵	いしかわ よしえ	白畑 知彦	村越 真	稲葉みどり	野地 恒有			英語学習における語彙の指導方法
創造系教科学	30440003	大村 基将	おおむら もとまさ	紅林 秀治	小南 陽亮	岩山 勉		松永 泰弘		プログラミング初学者に対し、プロダクトウェア設計要素および開発プロセスの検討・評価

(愛知教育大学に籍を置く学生)

分野	学籍番号	氏名	ふりがな	主指導教員 (主査)	副指導教員 (副査)	副指導教員 (副査)	副指導教員 (副査)	指導補佐教員	研究主題
自然系教科学	214D001	大西 英夫	おおにし ひでお	稲毛 正彦	古田 真司	村山 功	飯島 康之		聴覚障害児の化学概念修得プログラムの開発とその効果に関する研究(仮)
自然系教科学	214D004	小池 嘉志	こいけ よしゆき	稲毛 正彦	岩山 勉	熊倉 啓之	飯島 康之		算数科における創造性を育てる指導法の研究

平成27年度入学生 共同教科開発学専攻 指導体制

(静岡大学に籍を置く学生)

分野	学籍番号	氏名	ふりがな	主指導教員 (主査)	副指導教員 (副査)	副指導教員 (副査)	副指導教員 (副査)	副指導教員 (副査)	指導補佐教員	研究主題
自然系教科学	30540003	佐藤 一	さとう はじめ	熊倉 啓之	小南 陽亮	岩山 勉			飯島 康之	高等学校数学科における「経済数学」リテラシー
教育環境学	30540004	杉山 元洋	すぎやま もとひろ	村山 功	村越 真	中野 真志				科学的概念の理解における学習者の問いの意義
人文社会系教科学	30540005	田村 知子	たむら ともこ	白畑 知彦	新保 淳	黒川みどり	野地 恒有	倉本 哲男		日本語を母語とする学習者のための語彙指導と習得
教育環境学	30540006	二見 隆亮	ふたみ たかあき	村越 真	新保 淳	野地 恒有				生き方教育としての走教育の研究

(愛知教育大学に籍を置く学生)

分野	学籍番号	氏名	ふりがな	主指導教員 (主査)	副指導教員 (副査)	副指導教員 (副査)	副指導教員 (副査)	指導補佐教員	研究主題
人文社会系教科学	215D002	小原亜紀子	おはら あきこ	稲葉みどり	伊藤 貴啓	小川 裕子			日本語教師養成プログラムにおけるティーチングポータルオリオオの有効性の検証
創造系教科学	215D003	内田 智子	うちだ ともこ	野地 恒有	石川 恭	新保 淳			幼児期における体力・運動能力向上につながる運動指導に関する研究

平成28年度入学生 共同教科開発学専攻 指導体制

(静岡大学に籍を置く学生)

分野	学籍番号	氏名	ふりがな	主指導教員 (主査)	副指導教員 (副査)	副指導教員 (副査)	指導補佐教員	指導補佐教員	研究主題
人文社会科学	30640002	大西 洋	おおにし ひろし	黒川みどり	白畑 知彦	野地 恒有	伊藤 貴啓		旧徳川幕府から明治政府への条約改正に関する継承性—社会科学教材開発における単元の核の社会的事象設定についての— 考察—
創造系教科学	30640003	室 雅子	むろ まさこ	小川 裕子	村山 功	石川 恭			生活力育成のための家庭科のあり方
人文社会科学	30640004	渡邊 明彦	わたなべ あきひこ	黒川みどり	白畑 知彦	野地 恒有			日本近現代における歴史教育の成立と教員養成に関する研究
教育環境学	30640005	渡邊 千佳	わたなべ ちかか	村山 功	村越 真	倉本 哲男			「楽しい授業、わかる授業」の実現をめざす校内研修フアシリテーターの育成

(愛知教育大学に籍を置く学生)

分野	学籍番号	氏名	ふりがな	主指導教員 (主査)	副指導教員 (副査)	副指導教員 (副査)	指導補佐教員	指導補佐教員	研究主題
人文社会科学	216D001	中川 右也	なかがわ ゆうや	稲葉みどり	野地 恒有	村越 真			句動詞修得における認知言語学的アプローチ
人文社会科学	216D002	渡辺 芳朗	わたなべ よしろう	稲葉みどり	伊藤 貴啓	村越 真			新たな英語教育の実現のための教師養成支援システムの構築
教育環境学	216D003	久米 泰輔	くめ たいすけ	石川 恭	古田 真司	村越 真	石田 靖彦		父親の子育てと家庭関与が児童の心理、学習行動そして学校適応度に及ぼす影響
創造系教科学	216D004	森 慶恵	もり よしえ	古田 真司	石川 恭	小川 裕子			学校における健康情報リテラシー育成の理論と方法に関する研究

平成29年度入学生 共同教科開発学専攻 指導体制

(静岡大学に籍を置く学生)

分野	学籍番号	氏名	ふりがな	主指導教員 (主査)	副指導教員 (副査)	副指導教員 (副査)	副指導教員 (副査)	副指導教員 (副査)	指導補佐教員	研究主題
教育環境学	30740001	磯崎 雄三	いそざき ゆうぞう	村越 真	村山 功	伊藤 貴啓				社会科学地理的分野における読図を通しての思考力育成の手立て
人文社会系教科学	30740002	下田 実	しもだみのる	黒川みどり	新保 淳	丹藤 博文		坂口 京子		「個」に導く指導に関する研究
創造系教科学	30740003	西ヶ谷浩史	にしがや ひろふみ	紅林 秀治	新保 淳	飯島 康之	小川 裕子			設計を中心にした授業過程の研究
人文社会系教科学	30740004	箱崎 雄子	はこざき ゆうこ	白畑 知彦	村越 真	伊藤 貴啓	村山 功	新保 淳		小学校英語教育における音声指導—超文節素的音声現象の習得を目指して—

(愛知教育大学に籍を置く学生)

分野	学籍番号	氏名	ふりがな	主指導教員 (主査)	副指導教員 (副査)	副指導教員 (副査)	副指導教員 (副査)	副指導教員 (副査)	指導補佐教員	研究主題
教育環境学	217D001	馬場 洸志	ばば たけし	倉本 哲男	中野 真志	村山 功			石田 靖彦	サービス・ラーニングによる大学生の価値観の変容(仮)
人文社会系教科学	217D002	市川 裕理	いちかわ ゆり	稲葉みどり	倉本 哲男	白畑 知彦				英語授業におけるLearning Communityの構築に関する研究
人文社会系教科学	217D003	神谷 裕子	かみや ひろこ	中野 真志	野地 恒有	小川 裕子				幼保小接続期カリキュラムに関する研究
人文社会系教科学	217D004	永井 弘人	ながい ひろひと	野地 恒有	伊藤 貴啓	黒川みどり				民俗学(民芸・工芸)を中心とした特別支援教育における教材開発
創造系教科学	217D005	田中 滉至	たなか こうじ	古田 真司	倉本 哲男	小川 裕子				単元「健康の社会的決定要因」の開発に関する研究

平成30年度入学生 共同教科開発学専攻 指導体制

(静岡大学に籍を置く学生)

分野	学籍番号	氏名	ふりがな	主指導教員 (主査)	副指導教員 (副査)	副指導教員 (副査)	指導補佐教員	指導補佐教員	研究主題
自然系教科学	30840001	荒谷 航平	あらかや こうへい	小南 陽亮	丹沢 哲郎	岩山 勉	郡司 賀透		米国の科学カリキュラムにおける科学技術社会論的内容の変遷—物理学分野に着目して—
創造系教科学	30840002	河合 紳和	かわい のぶかず	新保 淳	紅林 秀治	伊藤 貴啓			音楽表現の補助装置としての身体運動音楽的ニュアンスを伝達する指揮のメカニズムについて
人文社会科学教科学	30840003	児玉 恵太	こだま けいた	白畑 知彦	黒川みどり	野地 恒有			文学教材の読解を通しての語い指導
創造系教科学	30840004	谷川 ゆり	たにがわ ゆり	新保 淳	紅林 秀治	野地 恒有	杉山 康司		運動習慣や生まれ月による体力差および性差を考慮した体育授業についての研究
人文社会科学教科学	30840005	中山 敬司	なかやま けいじ	黒川みどり	白畑 知彦	野地 恒有	伊藤 貴啓		静岡県小笠地域における被差別部落の研究—井上良一を事例に—
教育環境学	30840006	満下 健太	みつした けんた	村越 真	村山 功	古田 真司	鎌塚 優子		学校のリスク認知から見る学校の安全の在り方の研究
創造系教科学	30840007	百瀬 容美子	ももせ ゆみこ	新保 淳	村越 真	野地 恒有			視覚障害児童・生徒の運動学習に寄与するイメージ生成指導法の開発

(愛知教育大学に籍を置く学生)

分野	学籍番号	氏名	ふりがな	主指導教員 (主査)	副指導教員 (副査)	副指導教員 (副査)	指導補佐教員	指導補佐教員	研究主題
創造系教科学	218D001	酒井 達哉	さかい たつや	石川 恭	古田 真司	村越 真			体育授業場面においての教示「勇気づけ」に関する研究
人文社会科学教科学	218D002	加藤 智	かとう さとし	中野 真志	倉本 哲男	小川 裕子	坂口 京子		米国におけるサーブ・サービス・ラーニングの理論と実践に関する研究
人文社会科学教科学	218D003	檜垣 栄慈	ひがき えいじ	野地 恒有	稲葉みどり	白畑 知彦			聴覚障害児の作文力に関する言語発達心理学的研究
自然系教科学	218D004	新鶴田道也	しんつるた みちや	岩山 勉	稲毛 正彦	熊倉 啓之			先端科学技術を活用した授業の開発—電子黒板による次代の理科授業を創造する—
自然系教科学	218D005	マム チャンセン	まむ ちゃんせん	岩山 勉	稲毛 正彦	小南 陽亮			カンボジアの生物教育における物理的アプローチによる新規教材の開発

平成31年度入学生 共同教科開発学専攻 指導体制

(静岡大学に籍を置く学生)

分野	学籍番号	氏名	ふりがな	主指導教員 (主査)	副指導教員 (副査)	副指導教員 (副査)	指導補佐教員	指導補佐教員	研究主題
創造系教科学	30940001	青木 麟太郎	あおき りんたろう	紅林 秀治	飯島 康之	飯島 康之	郡司 賀透		簡易趣旨動作分析システムを用いた手指の巧緻性に関する研究
創造系教科学	30940002	黒須 雅弘	くろす まさひろ	新保 淳	石川 恭				学校体育の短距離走における指導方法の開発に関する研究
自然系教科学	30940003	塩澤 友樹	しおさわ ゆうき	熊倉 啓之	村山 功	飯島 康之			学校数学における標本抽出の概念形成の促進に関する研究
人文社会科学系教科学	30940004	島崎 治子	しまざき はるこ	白畑 知彦	野地 恒有	村山 功			大学英語リーディング授業において読解力を高める指導方法の検証
教育環境学	30940005	望月 大	もちつき だい	村越 真	伊藤 貴啓		杉山 康司		社会科地理的分野の豪雨災害に関する防災授業の開発

(愛知教育大学に籍を置く学生)

分野	学籍番号	氏名	ふりがな	主指導教員 (主査)	副指導教員 (副査)	副指導教員 (副査)	指導補佐教員	指導補佐教員	研究主題
教育環境学	219D001	片岡 佑衣	かたおか ゆい	石川 恭	倉本 哲男	新保 淳			幼児期における調整力の発達と体力向上に向けた運動遊びプログラムの開発
教育環境学	219D002	杉山 立	すぎやま りゅう	倉本 哲男	高橋 美由紀	村越 真			教育目標の共有に関する研究 MBB論を用いたカリキュラムマネジメント論の構想と実践
人文社会科学系教科学	219D004	中村 仁志	なかむら ひとし	中野 真志	野地 恒有	白畑 知彦			デュニー実験学校の歴史科教育論の構造とその形成基盤に関する研究
自然系教科学	219D005	大久保 博和	おおくぼ ひろかず	岩山 勉	稲毛 正彦	郡司 賀透			カンボジアの教科書との比較から探る科学的思考力を高める実験教材の開発 —物理学分野を中心として—
創造系教科学	219D006	澤田 育子	さわだ いくこ	古田 真司	飯島 康之	紅林 秀治			少人数の合唱で、遠くまで響く声を生み出す方法
創造系教科学	219D007	武市 裕子	たけいち ゆうこ	古田 真司	野平 慎二	村越 真			子どもの心身の変化を視覚化する養護教諭のアセスメントツールの開発

Ⅲ. 教科開発学研究会

愛知教育大学大学院・静岡大学大学院 共同教科開発学専攻 第10回教科開発学研究会

日時：令和元年8月24日（土） 13時30分～17時10分

場所：愛知教育大学教育未来館 3階3C及び2階2A

日程：1 開会の挨拶（3C）

13：30～13：40 議長：伊藤 文彦（静岡大学）

2 研究発表

【第1室】 司会：野地 恒有（愛知教育大学）

（3C）

13：50～14：20 発表者：新保 淳、山崎 朱音、鎌塚 優子（静岡大学）

題目：実技教科における「思考・判断・表現」の評価方法の研究

14：20～14：50 発表者：百瀬 容美子（静岡大学）

題目：先天全盲児童に対する運動イメージ生成指導法の適用



【第2室】 司会：稲毛 正彦（愛知教育大学）

（2A）

13：50～14：20 発表者：渡辺 芳朗（愛知教育大学）、満下 健太（静岡大学）

題目：学習適性に注目したデジタル教科書活用に関する検討

14：20～14：50 発表者：新鶴田 道也、大久保 博和、岩山 勉（愛知教育大学）

題目：カーボンペーパーを用いた新規教材の開発



3 講演（3C）

15：00～16：30

進行：（教員）（静岡大学）

講師：長谷川 哲也（岐阜大学教育学部）

（講演題目）「これからの教員養成は「誰」が担うのか

－教員養成政策と教師教育者研究の動向に注目して」



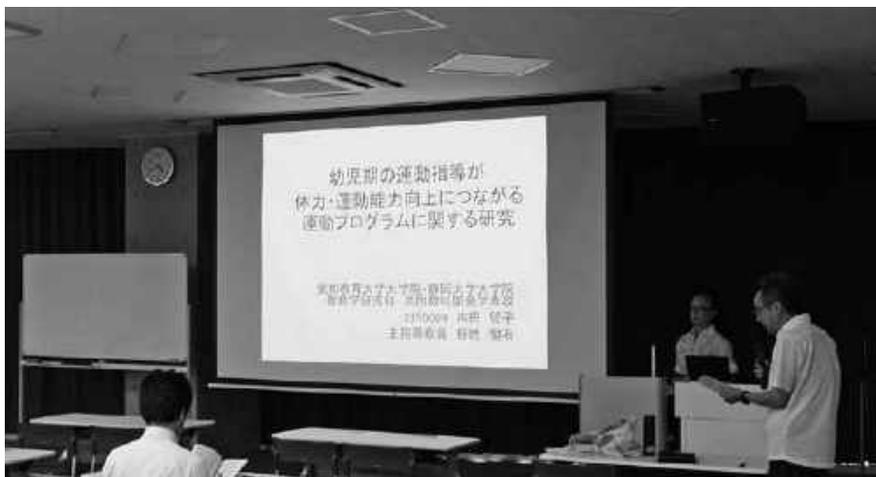
4 修了予定者による発表（3C）

司会：野地 恒有（愛知教育大学）

16：30～17：00

発表者：内田 智子（愛知教育大学）

題目：幼児期の運動指導が体力・運動能力向上につながる
運動プログラムに関する研究



5 閉会の挨拶（3C）

17：00～17：10

副議長：岩山 勉（愛知教育大学）

IV. 学生の研究活動

片岡佑衣

(学籍：愛知教育大学)

○研究テーマ

幼児期における調整力の発達と体力向上に向けた運動遊びプログラムの開発

○研究ポイント

脳・神経系の発達が著しい幼児期は、平衡性、巧緻性、敏捷性などと表現される調整力の向上に深く関わっている。そのため、調整力に焦点をあてた運動遊びのプログラムを考案し、子どもたちの体力や運動能力を高めることにつなげたい。

○キーワード

調整力、幼児期、運動遊び、体力・運動能力の向上

1 博士論文の計画

(1) 研究の目的

本研究では、幼児期における調整力の発達について調査し、調整力の向上のための運動遊びプログラムの作成とその運動効果を検証することを目的とする。

(2) 研究の背景

近年では、外遊びができる環境や時間が減り、幼児が活発に身体を動かす機会が減ってきているため、多様な動きの獲得の遅れや体力、運動能力の低下が指摘されている（幼児期運動指針，2012）。1985年と2007年の幼児を対象に7種類の基本的動作の習得状況を比較したところ、動作発達得点の比較から2007年の年長児の基本的動作の習得状況が、1985年の年少児と同様であることが示されている（中村ほか，2011）。さらに、2001年から2015年にかけて、身長は有意に伸びているものの、立ち幅跳びの記録は有意に低下していたことから基本的動作の習得が未熟になっている可能性が示唆されている（片岡ほか，2019）。

幼児を対象とした運動に関する先行研究では、身体活動量（歩数）が、幼児期に顕著な発達を示す調整力の発達に影響を与えていること（清水ら，2006）、幼児期の動的遊びの実施が単純反応時間の速さを高め、全身的な動作（反復横跳び）の敏捷性を高める効果があること（宮口・出村，2012）、様々なステップ動作を含むラダー運動は、特に全身反応時間の影響が強いこと（宮口ほか，2015）などが報告されている。幼児期は、スキヤモンの発育曲線からも脳・神経系の発達が著しく、平衡性、巧緻性、敏捷性などと表現される調整力の向上に深く関わっている。調整力に焦点をあてた運動遊びを通して、様々な動作の獲得や発達を促すことが重要であると考えられる。以上のことから、幼児期の発育発達の理論的背景に基づいた運動遊びプログラムを作成することは、子どもたちの体力・運動能力の向上の手立てとなる可能性がある。

2 本年度の研究活動

【投稿論文】

片岡佑衣・寺本圭輔・村松愛梨奈（2020年5月掲載予定）「幼児期における全身反応時間の年齢差の検討および脚伸展筋力との関係」、発育発達研究。

杉 山 立

(学籍：愛知教育大学)

1 博士論文の計画

(1) 論文テーマ

教育目標の共有に関する研究

～MBB論を用いたカリキュラムマネジメント論の構想と実践

(2) 研究の目的

協働を手掛かりに学校組織のビジョンと目標の共有のプロセスを明らかにする。そして、学校改善に資するビジョンと目標の共有のシステム論の構築を目指すとともに、そのシステム論を用いた実践をし、効果の検証を行う。

(3) 調査

- ・調査1：三河地区における問題解決学習の授業づくりが教育ビジョンに与える影響に関する要因の研究

目 的：三河地区で伝統的に取り組まれている問題解決学習の授業づくりが教師やカリキュラムマネジメント、指導観にどの程度浸透しているのか量的に明らかにする。

三河地区とそれ以外の地区、校種、教科にコードをつけ、因子分析をする。

- ・調査2：教育ビジョンの共有プロセスの導入が校内研修に与える効果の検討

目 的：授業研究の内の授業構想の際に授業実践のビジョンをチームで共有する場を設けた授業研究をデザインする。これによって、授業研究に参加する教師たちの語り合いを分析し、教師の力量形成の要因となる暗黙知を形式知に変換するプロセスに与える影響を検証する。

2 本年度の研究活動

(1) 調査1について

アンケート調査をもとに論文を執筆。学校改善学会への投稿を予定している。

(2) 調査2について

博士論文の構想の見直しから行う。それに伴って、調査2はリサーチクエスからの見直しをする。

(3) 学会発表

日本カリキュラム学会でカリキュラムマネジメント論に関する先行研究の総括を発表する。

中村仁志

(学籍：愛知教育大学)

○研究テーマ

「デューイ実験学校の歴史科教育の理論と実践に関する研究」

○研究ポイント

米国の教育学者・哲学者ジョン・デューイ (John Dewey) は、シカゴ大学付属小学校、通称「デューイ実験学校 (Dewey's Laboratory School)」の開設・運営に携わったことで知られている。デューイ実験学校における諸教科の中でも、歴史科は理科とともにカリキュラム統合の基盤となった教科であり、子どもの興味や知的発達に配慮され、子どもの生活や他教科との「相関」が図られた。

本研究では、デューイ実験学校の歴史科教師の歴史科教育論を主たる分析対象とし、その理論と実践の内実がどのようなものであったのか、それらがどのように形成されたのかを明らかにすることを目的とする。

○キーワード

ジョン・デューイ、デューイ実験学校、歴史教育

1 博士論文の計画

本研究では、上記の研究目的を達成するために、次の4点の作業課題を設定し、研究を進めてゆく。第一に、20世紀への転換期米国における初等歴史科教育論の展開とその課題の分析、第二に、デューイ実験学校の歴史科教育論形成の基盤となった教育界および歴史学界における所論の分析、第三に、デューイ実験学校の歴史科教育論の構造と実践の具体の分析、第四に、デューイ実験学校における歴史科と他教科等の「相関」の論理と教師の協働の分析である。

博士課程1年次である本年度は、研究主題に関連する学会において、合計3本の研究発表を行った。また、日本デューイ学会の学会誌に投稿した論文が掲載されるとなった。

博士課程2年次である来年度は、研究主題に関連する学会の学会誌への論文投稿を目指し、論文執筆を中心に取り組む予定である。

2 本年度の研究活動

(1) 論文

中村仁志 (2019) 「デューイ実験学校の教師はいかに子どもを理解したのか：カリキュラム開発における『社会的等価物への翻訳』の含意」日本デューイ学会『日本デューイ学会紀要』第60号, pp.11-20.

(2) 学会発表

中村仁志 (2019) 「生活科・総合的学習教育史研究はいかに実践に寄与するか」日本生活科・総合的学習教育学会第28回全国大会大分 (佐伯) 大会.

中村仁志 (2019) 「ジェンダーの観点によるデューイ実験学校の初等歴史科カリキュラム論の再解釈」日本カリキュラム学会第30回大会.

中村仁志 (2019) 「デューイによる形式段階論の解釈とデューイ実験学校における歴史科の教授・学習過程論の展開」日本教育方法学会第55回大会.

大久保 博 和

(学籍：愛知教育大学大学)

○研究テーマ

カンボジアの教科書との比較から探る科学的思考力を高める実験教材の開発
—物理力学分野を中心として—

○研究ポイント

「誤概念を活用した認知的葛藤場面を設定した実験教材を開発し、この実験教材が学習者の探究方法や論理的思考力を高め、結果として誤概念の克服に効果があることを明らかにすること。

○キーワード

誤概念、認知的葛藤場面、科学的思考力、教材開発

1 博士論文の計画

開発する教材の内容は、小学校3年生理科の「風の力」から高等学校物理基礎の「力学的エネルギー」までで取り扱っている力学に関するものを対象とし、以下の課題を設定し研究を進める。

- ・課題1 「つまずき」「素朴概念」「誤概念」をキーワードに先行研究から力学分野の内容を抽出し、分類する。
- ・課題2 分類した内容を、日本とカンボジアの教科書で比較し、研究目的に適した内容を決定する。
- ・課題3 認知的葛藤場面を設定できる実験教材として開発する。
- ・課題4 日本とカンボジアで実践し、効果と課題を検討する。

2 本年度の研究活動

- ・課題1：以下の7項目に分類した。

①重さと質量 ②てこ、滑車、力のモーメント ③力の矢印の記入方法 ④力のつり合いと作用・反作用 ⑤圧力と浮力 ⑥運動と力 ⑦力学的エネルギー保存と保存力

・課題2：認知的葛藤場面を設定することができるか、実験教材の開発ができるかを教材決定の要因として検討し、⑥運動と力の中の「ニュートンの運動の第2法則」に決定した。

- ・課題3：研究目的が実現できる下記の4項目に沿った実験教材を開発した。

①誤概念が含まれている ②授業時間内で実施でき、結果から疑問が発見できる ③実験方法が容易に変更でき短時間で再実験が実施できる ④開発途上国で実践可能である

・課題4は、「学習者の探究スキル、論理的思考力の向上、誤概念の克服度をどのような指標で測定するのか」を中心に検討し、今後、実践・検証を行う。

- ・学会発表

カーボン・ペーパーを用いた新規教材の開発－高等学校物理「電気と電流」単元での活用－ 日本理科学教育学会全国大会 (2019)

澤田育子

(学籍：愛知教育大学)

○研究テーマ

少人数の合唱で、遠くまで響く声を生み出す方法に関する研究

○研究ポイント

シンガーズ・フォルマントを増強させるための指導方法の検討

○キーワード

Choral singing(合唱歌唱)、Solo singing(ソロ歌唱、独唱歌唱)、Voices that echo far away(遠くに響く声)、Singer's formant (シンガーズ・フォルマント)

1 博士論文の計画

高等学校の芸術(音楽)の学習領域は、「A表現」及び「B鑑賞」があり、「A表現」の内容に(1)歌唱、(2)器楽、(3)創作がある。歌唱は必ず行う学習内容であるが、歌唱法に関するノウハウ(指導法)については各教師によって異なっている。そこで、本論文では歌唱の指導法について、文献研究、アンケート調査、実験研究を行う。

美しい声の条件に「遠くに響く声」がある。遠くに響く声を科学的に分析すると、シンガーズ・フォルマントと呼ばれる音響特徴がみられる。多くの研究者がこのシンガーズ・フォルマントについての解明や実験・分析を行っているが、どのように具体的指導をすればシンガーズ・フォルマントが増強されるか、いまだ明確になっていない。そこで、本論文では、日本語を日常的に話す人に向けた歌唱法で、シンガーズ・フォルマントが増強される方法を探求するために研究を行う。

論文の構成は以下のとおりである。

序章 本研究の目的及び論文構成

第1章 合唱で遠くまで響く声を生み出す方法の文献的考察

第2章 現場の教師のアンケート調査と考察

第3章 ソロ歌唱で遠くに響く声にするための実験研究

第4章 合唱歌唱で遠くに響く声にするための実験研究

第5章 総合考察

2 本年度の研究活動

(1) 第1章を論文投稿

澤田育子「合唱で遠くに響く声に関する文献的考察」、『声楽発声研究』No.11, 2020.5 掲載予定(査読あり)

(2) 第2章のアンケート調査と分析

アンケートを、県内の高等学校64校72名の音楽教師に発送(2020.1.18)し、締切(2020.2.18)までに47名から回答(回答率65%)を得た。現在、アンケートの分析、第2章執筆中。

武市裕子

(学籍：愛知教育大学)

○研究テーマ

子どもの心身の変化を視覚化するアセスメントツールの開発

○研究ポイント

本研究では、子どもの変化を捉えるツールとして養護教諭が成長曲線を用いることの有効性を測る。さらに、子どもの変化を見取ることができるアセスメントシートを作成し、成長曲線と併用することで、学級担任が行う教育相談の支援となるのか、教員と子ども双方からの効果を測定する。

○キーワード

成長曲線、養護教諭のアセスメント、教育相談

1 博士論文の計画

いじめ自殺が社会問題化し、事故が起こるたびに「学校は気付いていたのか」という議論が持ち上がる。早期発見のためには、訴えだけでなく身体化・行動化される「子どものサイン」を見逃さないことが大切とされる。そこで、私は成長曲線に着目した。小児医療の臨床現場では成長曲線をもとにした心因性疾患や虐待の早期発見について報告されており、不登校などの心の健康問題や小児慢性疲労症候群と成長曲線の関連についても事例から検証され、その有用性が確立されている。折しも、学校保健安全法施行規則の改訂に伴い、定期健康診断において、成長曲線を積極的に活用することが重要となった。よって、学校現場においても子どもたちの心の問題の早期発見に成長曲線を活用できる可能性が高いと考えられる。成長曲線の変動から子どもの心身の変化を捉えることは、客観的な資料から子どもを注意深く観察するための手掛かりとなり得る。成長曲線と日常的な観察等による「養護教諭のアセスメント」を教育相談に活用する本研究によって、教員が子どもの変化に早期に気付くきっかけを得ることが可能となり、組織的な早期対応につながると考える。その結果、子どもの学校適応感が上がり、不登校傾向や頻回来室などの不適応行動に対する予防的介入となるかを検証したい。

研究1では、養護教諭が子どもを観察する視点を検討する。先行文献及び経験豊富な養護教諭への聞き取りを分析し、日常的にどのような視点から子どもの状態を捉えているのかを明らかにする。その上で、児童生徒理解に必要なアセスメントの視点を挙げ、整理する。研究2では、成長曲線の変動が見られる要因について検討する。成長曲線の変動の分類と事例の分析を行うことによって、成長曲線の変動から子どもの変化が見取れるかを明らかにし、養護教諭が成長曲線の変動を抽出する基準を示す。それらを踏まえ、研究3として、アセスメントシートを開発し、介入研究を行う。子どもの変化を見取る視点を生かしたアセスメントシートを作成し、教育相談に活用することで教員と子ども双方に効果があるか検証する。

2 本年度の研究活動

- 武市裕子：学校における子どもの心身の変化を捉えるツールとしての成長曲線の活用，日本成長学会第30回学術集会（東京・女子栄養大学），シンポジウム口頭発表（シンポジスト），2019
- 武市裕子・古田真司：学校健診での「子供の健康管理プログラム」，による成長曲線の異常判定に関する一考察，東海学校保健研究，43（1），131-140，2019
- 武市裕子：学校において子どもの心身の変化を捉えるツールとしての成長曲線の活用に関する研究，教育医学（名古屋），59，31-36，2020

望 月 大

(学籍：静岡大学)

1 博士論文の計画

(1) 研究テーマ

「社会科地理的分野の豪雨災害に関する防災授業の開発」

(2) 研究の概要

本研究の目的は、中学校社会科地理的分野において、災害と地形という視点から地理的見方・考え方を育成する活動を行うことで、リスク認知、防災に対する自己効力感を高め、結果として『避難意図』を促進できるような防災の授業開発である。

現在、多くの地方自治体でハザードマップが整備され、台風接近や大雨による気象警報などの技術やインターネットの普及による伝達手段も整備されてきている。豪雨災害は、地震などと異なり災害の発生を予測できるため、避難行動により高い確率で生命の安全を確保することができる。しかし、風水害による犠牲者の9割が避難行動をとっていないことが明らかになっている。避難行動を促すと考えられる「避難意図」を高める社会科の授業はどんな授業であるのかを明らかにしていきたい。

災害に対する避難行動の心理的なプロセスのモデルでは、『リスク認知』と『自己効力感』の両方が高まることで、避難行動が促進されると考えられている。本研究では、豪雨時に発生する洪水、崖崩れ、土石流、地すべりがどんな災害であるかを知り、自分や同級生が居住する地域の地形図から、これらの災害の素因を読み取る力を身につけることで『リスク認知』の力を高めることができると仮定している。

また、気象庁や地方自治体が発する災害情報について知識を身につけ、自分の居住する地域では、台風の接近や大雨等どのような誘因の働きかけが起こったときに、どのような行動をとるべきかを考える活動を通して自分自身が災害に対応できるという『自己効力感』を高めることができると仮定している。

この二つの要因を高める授業を構築し、この二つの要因、そして構築した授業が『避難意図』を促進しているか検証していきたい。

中学校社会科で、防災にかける事ができる時間は限られている。しかし、限られた時間の中でも地理的な見方・考え方を働かせる授業を構築していきたい。具体的には、ハザードマップだけではなく、地形図からも豪雨災害の素因となるような地形を読み取る力を身につけ、気象情報に応じて、どのような行動をとるべきかシュミレーションする活動を行うことで、自分の命を自らの判断力で守ることができる力を育てていきたい。防災に関する授業は数多く実践されている。しかし、その授業が『避難意図』を促進しているかどうかを検証した実践については限定される。本研究では、『避難意図』を測る尺度の妥当性も検討しながら、授業の効果も『避難意図』という視点から検証していきたい。

そして、豪雨災害の危険性が高い地域で汎用的に行えるような授業を提案し、授業を受けることで命を守る判断ができるような市民を育て、豪雨災害による被災者を減らすことを目指していきたい。

2 本年度の研究活動

今年度は、開発した授業を中学2年生2クラス（50名）に対して行った。授業の効果を検証するために、「授業の前」、「授業の後」、「遅延条件」と調査票による調査を行った。「遅延条件」については開発した授業をおこなっていない中学2年生2クラス（48名）にも同様の調査を行い、比較対象とした。

また10月に襲来した台風19号の際に、緊急でどのような行動をとったかを問う調査を、授業実施校全学年と、授業を行っていない中学校の3年生に行った。授業の効果の検証を進めている。

塩澤友樹

(学籍：静岡大学)

○研究テーマ

学校数学における標本データに基づく統計的推論力の育成に関する研究：variationの認識に着目して

○研究の意図、目的

平成29年、30年告示学習指導要領では、小中高を通じて統計内容が充実した。しかし、日本の算数・数学カリキュラムの中で、標本調査の位置づけは統計教育先進国に比べ同学年あるいは遅く、課題があることが示唆される。そこで、本研究では、variationの認識に着目し、標本データに基づく統計的推論力を捉える枠組みを構築しその実態について明らかにすることで、算数・数学カリキュラムにおける標本調査の位置づけの改善に向けた示唆を得るとともに、統計的推論力を促進するための指導への方策を導出することを目的とする。

○キーワード

算数・数学、カリキュラム、標本調査、統計的推論力、variation

1 博士論文の計画

1年次は、統計教育先進国の国家カリキュラムにおける標本調査の位置づけを文献により調査し、日本の算数・数学カリキュラムにおける標本調査内容の位置づけ方の特徴について明らかにする。2年次は、標本データに基づく統計的推論力及びvariationに関わる先行研究について整理し、調査問題を開発・実施する。3年次は、調査結果を踏まえ、算数・数学カリキュラム及び指導への方策を導出する予定である。

2019年度は、統計教育先進国であるニュージーランド・オーストラリア・アメリカの国家カリキュラムについて調査し、その成果を教科開発学論集への投稿論文としてまとめた。また、標本調査を踏まえた高等学校段階での推測統計学の扱いに関わり、仮説検定や外れ値、データサイエンスを志向した条件付き確率の扱いについて整理した。次年度は、さらに先行研究を精査し、調査問題を開発・実施する予定である。

2 本年度の研究活動

- 1) 塩澤友樹 (2020). 学校数学における標本調査の位置づけに関する一考察—ニュージーランド・オーストラリア・アメリカの国家カリキュラムに着目して—. 教科開発学論集 8, 61-71.
- 2) 塩澤友樹 (2020). データサイエンスを志向した条件付き確率の学習指導に関する一考察—ベイズ推測に着目して—. 岐阜聖徳学園大学教育実践科学研究センター紀要19, 191-198.
- 3) 塩澤友樹 (2020). 高等学校数学科における新内容「仮説検定の考え方」の扱いと今後の展望. 第17回統計教育の方法論ワークショップ, 102-105. (誌上発表)
- 4) 塩澤友樹 (2019). 高等学校数学科における外れ値の学習指導に関する一考察—外れ値を批判的に検討する場面に着目して—. 基盤研究 (C) 初等中等教育における批判的思考を志向した統計指導プログラムの開発中間報告書 (研究代表者裕元新一郎), 117-122.
- 5) 塩澤友樹 (2019). 高等学校数学科における仮説検定の学習指導の系統性に関する一考察—「棄却域の見方」と「仮説棄却の方法」に着目して—. 日本科学教育学会第43回年会論文集, 586-589. (口頭発表)

青木 麟太郎

(学籍：静岡大学)

○研究テーマ

簡易手指動作分析システムを活用した手先の器用さと手指動作との関係に関する研究

○研究ポイント

非接触で手指動作の位置データを計測できるシステムの活用

○キーワード

Leap Motion、簡易手指動作分析システム、手指動作、ドライバ操作

1 博士論文の計画

本研究の目的は、簡易手指動作分析システムを用い、作業時における手指動作の違いを分析し、手先の器用さを手指の位置や形、動かし方から明らかにすることである。また明らかにした結果を基に、実技指導を行うとともに、実技指導に生かすための指導書を作りたいと考えている。

これまでの研究ではモーションキャプチャにより手指動作を計測し、データを分析するシステム（以後、簡易手指動作分析システム）を開発し、開発した内容を「青木麟太郎、紅林秀治：簡易手指動作分析システムの開発，日本産業技術教育学会誌，第59巻，第1号，pp.19-28(2017)」に掲載した。本年次、中学校において簡易手指動作分析システムを活用した結果を教科開発学論集に投稿した。活用した結果を基に改良した簡易手指動作分析システムを用い、中学生と大学生を対象に、ドライバ操作時の手指動作を計測した。今後、ドライバ操作時の計測データをもとに、手先の器用さによる手指動作の違いを考察していく。

2 本年度の研究活動

(1) 論文

- ・青木麟太郎，紅林秀治：簡易手指動作分析システムの教育的活用に関する検討，教科開発学論集，第8巻，pp.83-92（2020）

(2) 学会発表

- ・青木麟太郎，紅林秀治：簡易手指動作分析システムを活用した授業の試み，日本産業技術教育学会第62回全国大会（静岡）講演要旨集，p.145（2019）
- ・青木麟太郎，紅林秀治：簡易手指動作分析システムの改良，第37回日本産業技術教育学会東海支部大会講演論文集，pp.67-68（2019）
- ・青木麟太郎：中学校における鑄造の学習を取り入れた実践，日本産業技術教育学会第25回技術教育分科会（兵庫）講演要旨集，pp.13-14（2019）

(3) 講演

- ・青木麟太郎：『国際バカロレアプログラムにおける展開板を活用したLEDランタン製作の試み』，『OPPシートと電化製品の事故事例を活用した「C エネルギー変換の技術」の授業』，『状態遷移図，状態遷移表，プログラミング言語試行を取り入れたプログラミング学習』，技術教育研究会第52回全国大会宇都宮大会（栃木大会）

加藤 智

(学籍：愛知教育大学)

○研究テーマ

非認知的スキルの育成に資する「サービス・ラーニング型」総合的な学習の時間に関する研究

○研究ポイント

近年国際的に注目を集めている「非認知的スキル (non-cognitive skills)」の育成に資する総合的な学習の時間の在り方について、理論的かつ実証的に明らかにし、総合的な学習の一層の充実と発展につなげる。

○キーワード

非認知的スキル、総合的な学習の時間、サービス・ラーニング

1 博士論文の計画

2019年度は、非認知的スキルの育成が実証されているサービス・ラーニング (SL) に着目し、非認知的スキルの育成が期待されるサービス・ラーニング型総合的な学習の時間 (SL型総合的な学習) の枠組みを検討した。現在、総合的な学習を実施している全国の小学校を対象としたアンケート調査を実施し、SL型総合的な学習の要素が個々の非認知的スキルの育成にどのように寄与しているのか、また、児童の実態 (具体的には、教科学習に対する不安感や苦手意識の有無) と非認知的スキルの増進との関係性について明らかにする予定である。事前調査を2019年6月～7月に実施した (1,300件程度)。事後調査を2020年2月～3月で実施する予定であったが、事後調査については、感染症拡大の影響で実施率が大幅に下がる見通しである。2020年度には再調査を実施しながら、アクション・リサーチによる介入的研究を実施したい。

2 本年度の研究活動

(1) 論文

加藤智 (2020) 「非認知的スキルの育成に資する総合的な学習の時間に関する基礎的研究」愛知教育大学大学院教育学研究科・静岡大学大学院教育学研究科共同教科開発学専攻『教科開発学論集』第8号

加藤智 (2020) 「小学生の非認知的スキルの測定に関する基礎的研究」愛知淑徳大学教育学会『学び舎 - 教職課程研究 -』第15号

加藤智 (2020) 「教職課程における生活科関連科目の現状と課題：『総合的な学習の時間の指導法』への示唆」愛知淑徳大学文学部『愛知淑徳大学論集 - 文学部篇 -』第45号

加藤智・内田裕斗 (2020) 「中学校の総合的な学習の時間が育成する資質・能力と効果的な学習指導の検討」日本生活科・総合的な学習教育学会『せいかつか&そうごう』第27号

(2) 学会発表

加藤智 (2019) 「総合的な学習の時間における非認知的スキルの育成に関する一考察」日本生活科・総合的な学習教育学会第28回全国大会

加藤智 (2019) 「『サービス・ラーニング型』総合的な学習の時間に関する一考察」日本教科教育学会第45回全国大会 (紙面発表)

(3) その他

加藤智 (2019) 「実社会の本質に迫る総合的な学習の時間」生活科教育研究会『生活科の探究』秋季号 No.118

檜垣 栄 慈

(学籍：愛知教育大学)

○研究テーマ

聴覚障害児を対象とした書き言葉の明確化を促すための指導方法に関する研究

○研究ポイント

教科開発学の研究として、本研究に関連する学問分野・領域（特別支援教育、教育心理学、言語心理学、国語科教育）の知見から聾学校小学部に在籍する聴覚障害児の書き言葉の明確化を促すための視覚的情報を活用した指導方法を開発し、指導の効果を明らかにする。

○キーワード

聴覚障害 描画活動 書き言葉 指導方法

1 博士論文の計画

博士論文は、次の7章から構成される。1章では、教科開発学としての研究の意義や本研究に関連する学問分野・領域における先行研究をまとめる。2章では、本研究における問題と目的、方法、全体構成を示し、研究の全体像を明らかにする。3章では、学齢期における話し言葉から書き言葉の発達過程の規則性について述べる。さらに、聴覚障害児の言語発達における特徴と諸問題を指摘する。4章では、聴覚障害児を対象とした話し言葉の実践研究を取り上げる。ここでは、修士論文とこれまでの投稿論文の内容を書き直す予定である。5章では、書き言葉における発達過程の規則性と聴覚障害児の書き言葉の特徴と諸問題を明らかにする。さらに、聴覚障害児を対象とした作文の指導に関する研究の動向からみえる作文指導の実際と課題を明らかにする。この内容の一部は、教科開発学論集第7号に掲載した。6章では、通常の小学校と聾学校に在籍する児童を対象として、作文前に出来事の複数場面を絵に描かせることによる作文指導の効果を述べる。さらに、聴覚障害児の言語発達には個人差が大きいことから、その効果がある学習者の条件についても述べる。7章では、本研究における結果のまとめと総合考察、結論を述べる。最後に、教科開発学への寄与について述べる。

2 本年度の研究活動

檜垣栄慈（2019）聴覚障害児を対象とした作文指導研究序論：その研究動向と視覚的情報活用の提起。
教科開発学論集，7，11-18. [投稿論文]

檜垣栄慈（2019）聴覚障害児を対象とした作文前の出来事の4コマ描画が作文内容に及ぼす影響に関する研究：状況絵を出来事とした場合. 日本特殊教育学会第56回大会発表論文集. [ポスター発表]

檜垣栄慈（2019）言葉に遅れがある幼児への支援について：幼児が話したいと思えるよりよい関わり方を
目指した教育相談を通して. (印刷中) [愛知県総合教育センター教育相談長期研修]

新鶴田 道 也

(学籍：愛知教育大学)

○研究テーマ

理科物理分野における電気に関する教材と指導法の開発

○研究ポイント

カーボン・ペーパーを用いた視覚的理解が可能な新規教材開発とその応用

○キーワード

教材開発、電気抵抗、カーボン・ペーパー、中学校理科、高等学校物理、理数探究

1 博士論文の計画

理科物理分野において、電気に関する教材と指導法の開発を行っている。具体的には、カーボン・ペーパーを用いた視覚的理解が可能な新規教材開発とその応用可能性の検討である。

カーボン・ペーパーは形状加工が容易で、形状変化の視覚的理解が可能である。電気抵抗の学習において教材化することで、抵抗値の形状依存性を視覚的に理解させる実験が、授業時間内で実現可能となる。本年度はカーボン・ペーパーを活用した新しい指導法を開発し、公立中学校、高等学校において試行した。

中学校理科「電流とその利用」単元においては、発展的内容として扱われている「電気抵抗の形状依存性」を、実験的に理解させることで、「電気抵抗とは電流の流れにくさである」という基本的な概念の形成を促すことが示唆された。また、合成抵抗の指導における活用では、電気抵抗の形状依存性に基づいて理解することが可能となり、合成抵抗の理解度や納得度を高めることができた。

高等学校物理基礎「電気」単元においては、電気抵抗の長さや幅による依存性に加えて、厚さによる依存性を実験において確認することで、抵抗値が断面積に反比例することに対する理解を高めることができた。また、理数探究では、取り扱いが容易で、応用性が高いことから、探究的な学習の教材として多様な活用が期待される。

今後は、カーボン・ペーパーの更なる応用可能性の検討や、追実践における検証を行う。

2 本年度の研究活動

(1) 論文

・「電気抵抗の視覚的理解が可能な新規教材開発 —中学校理科・高等学校物理・理数探究における活用—」教科開発学論集, 8, 73-82.

(2) 学会発表

・「カーボン・ペーパーを用いた新規教材の開発 —中学校理科「電流とその利用」単元での活用—」日本理科教育学会第69回全国大会 (2019).

・「中学校理科『電流とその利用』単元における電気抵抗の概念形成に有効な新規教材の開発」第3回日本科学教育学会研究会(若手活性化委員会) (2019).

・「カーボン・ペーパーを用いた新規教材の開発」第10回教科開発学研究会 (2019).

マム チャンセン

(学籍：愛知教育大学)

○研究テーマ

Development of Teaching Materials through Integration of Physical Approach for Biology Education in Cambodia

○研究ポイント

Teaching Material Development

○キーワード

LED-attached apparatus, seed germination, genetic study, school education

1 博士論文の計画 (Doctoral dissertation plan)

Experimental apparatus development with attachment of Light Emitting Diode (LED) and experimental methods applicable for biology education at high school level are the main objectives in the doctoral researches. Five articles are planning to be published in the doctoral dissertation including (1) School Performance Evaluation through Systemic School Inspection in Cambodia, (2) Methods for Teaching Light Wavelength Dependencies on Seed Germination and Seedling Elongation Applicable for High School Experimental Class in Developing Countries, (3) Development of LED-attached Box for Phytochrome Response Experiment on Lettuce Seed Germination in Senior High School Biology, (4) The Use of Dwarf Tomato Cultivar for Genetic and Physiology Study Applicable for School Education, and (5) The Use of Photoblastic Lettuce Cultivar for Genetic Heredity Study Applicable for School Education.

Article (1) aims to find out the situation of science class in Cambodia and to look for the appropriate methods to improve biology lesson in this country. Article (2) introduces the methods to produce LED-attached box and the methods to teach biology experiment related to the effect of different light wavelengths on seed germination and seedling elongation. Article (3) describes the methods to develop LED-attached box and experimental methods for conducting the experiment on phytochrome response on lettuce seed germination applicable for biology experimental class. Article (4) introduces the experimental methods to study the effect of plant hormone 'Gibberelic Acid (GA)' on dwarf and normal tomato stem elongation, and the genetic study by using these tomato cultivars. And article (5) focuses on the use of lettuce cultivars, especially photoblastic lettuce cultivar, for genetic study applicable for school education.

2 本年度の研究活動 (Research progress in previous years)

Article (1) was accepted for publication in the Journal of Modern Education Review. This article is scheduled to be published in April 2020.

Article (2) was published in university bulletin on Studies in Subject Development N.8 (2020).

Article (3) is being reviewed, for second time, by Asian Journal of Biology Education. It is scheduled to be published in the middle of 2020 if it is accepted.

Article (4) was published in International Journal of Biology Education, Vol. 2(1) pp. 015-021, March 2020.

Article (5), manuscript is being written for publishing in International Journal of Biology Education.

河合 紳 和

(学籍：静岡大学)

○研究テーマ

学校音楽教育における指揮学習の必要性と方法に関する研究

○研究ポイント

本研究では、学校音楽教育における「表現」の学習の一環として行われる合唱や合奏での児童生徒の学びの質を高める上で、指揮（指揮者）の存在が不可欠であること、そして、学習活動がより効果的に行われるためには、児童生徒が基礎的な指揮技能を習得することが必要であることを明らかにする。また、指揮技能の習得が、テンポ感、拍感（拍子感）、リズム感などの音楽表現の諸技能を向上させるとともに、「音楽を形づくっている要素」の知覚とその働きの感受を促し、「鑑賞」の学習においても学びの質を高めることを実証する。

○キーワード

指揮、指揮技能、テンポ感、拍子感、リズム感、主体的な音楽表現、指揮的表現

1 本年度の研究成果

高校1年生の「音楽I」選択者のうち、中学校で指揮者を務めた経験のある生徒9人に調査への協力を依頼し、同意を得られた7人の生徒について、指揮動作における右手各部位の動揺と拍間の不均一との相関を明らかにする研究を行った。数値によって検出されたテンポの不均一を、指揮軌道を示す座標グラフと照合させたところ、①右手首や右肘の動揺は、指揮図形の変形を生じさせる要因となること。②指揮図形の変形は、拍間時間の不均一を生じさせる要因となること、③4拍子の指揮において、右手首や右肘の動揺は、第3拍及び第4拍で発生しやすいこと、④4拍子の指揮において、4つの拍点を指揮図形の中心に集まることで、右手首や右肘の動揺が生じにくくなり、指揮図形の変形が改善されること、などが明らかとなった。さらに、指揮図形の4つの拍点をすべて指揮図形の中心に集めることによって大きく改善されることや、指揮図形の修正がテンポ不均一の改善にも一定の効果があることが確認できた。

(1) 著書

齋藤忠彦・菅裕（編著）「新版 中学校・高等学校教員養成課程 音楽科教育法」令和元年10月（教育芸術社）pp.77-79

(2) 教科書等

小原光一ほか「MOUSA 1 指導書（研究資料編・楽譜資料編）」平成31年3月（教育芸術社）

(3) 研究論文

河合紳和「指揮動作に見られる右腕の動揺と拍間隔の不均一との相関—モーションキャプチャシステムによる測定と分析の結果から—」令和2年3月 愛知教育大学大学院・静岡大学大学院教科開発学論集第8号, pp.93-103

(4) 実践報告等

河合紳和「言語化によってイメージの質的向上を図る鑑賞の授業」（「中等教育資料2019年11月号」令和元年11月（学事出版）pp.30-33

(5) 講演

河合紳和「主体的に学ぶ創作指導」（富山県高等学校教育研究会音楽部会講演会）令和元年10月2日、富山市民芸術創造センター

2 今後の研究計画

中学校学習指導要領（平成29年告示）の解説に述べられている「指揮をするための基本的な技能」が何を指すのか、そして「指揮法の専門的な技術を習得するような活動にならないよう留意しなければならない」という指摘によって、どのような制限が生じるのかを具体的に示すとともに、それらを両立させる指揮技能の指導の在り方について検討する。

また、指揮の基本的技能を習得することによって、テンポ感、拍感や拍子感、リズム感などの音楽表現の諸技能が向上することを、歩行やタッピングなどに着目した先行研究と照合しながら実証する。

さらに、指揮技能の向上によって「指揮的表現」の質的向上を図ることができることを、主に鑑賞の授業実践を通して明らかにする。

また、音楽指導者の指揮法習得に関する実態調査を行う。アンケート調査やヒアリングなどによって、指揮に対する苦手意識の所在を明確にするとともに、生徒の表現意図を効率よく引き出し、その質を高めていく指揮法習得メソッドについて考察する。

見玉恵太

(学籍：静岡大学)

1 博士論文の計画

(1) 論文テーマ

リーディング活動を通じた効果的な英単語学習法の検証

(2) 研究の目的

本論文の目的は日本語を母語とする大学生が、英語のリーディング授業を通じて語彙力を身につけるより有効な方法を見つけ出すことである。本研究では、3つの異なる学習法を継続的に実施し、その効果を検証した。本研究では1) テキストの読解を通じた暗示的語彙学習法、2) テキストの読解とclozeタスクによる明示的語彙学習、3) テキストの読解と単語テストを実施した実験群と、加えて統制群を用い語彙量の伸びについて比較検証を行い、異なる学習法を行った被験者間で、どの程度習得に差異が見られるか調べる。

(3) 研究の経過

上記で述べた実験については2019年度中に全て実施し、結果の分析も終了した。本研究の被験者は、国内の大学で英語を学ぶ日本語を母語とする大学生（テキストの読解を通じた暗示的語彙学習を行ったグループ、以下、Group Aは20名、テキストの読解をとclozeタスクによる明示的語彙学習を行ったグループ、Group Bは24名、テキストの読解と単語テストを実施したグループ、以下、Group Cは23名、統制群、以下、CGは26名）である。

本研究の調査では、リーディングの授業で課題テキストを用いて、3つのグループに、それぞれ異なる方法で英単語学習活動を行い、グループ間の間における学習法の違いによる目標語彙の語彙習熟を調べた。

テストは110語の目標英単語の日本語訳出形式問題とし、事前・直後事後テスト・遅延事後テストによるデータ収集を行った。事前テストは1週間目、直後事後テストは6回の指導を行った1週間後（第9週間目）、遅延事後テストは直後事後テストから6週間後（第14週間目）に実施した。

検証の結果、実験群（Group A, Group B, Group C）全てに伸びは見られたが、グループ間ではGroup Cが、最も目標語彙の定着率が高く、この結果から、単語テストを用いた学習法は日本人大学生にとって効果的な方法であることが分かった。

(4) 今後の展開

今後引き継ぐ課題としては、本実験で得られた学習法の違いによる語彙習熟度の差異について、第二言語習得論の観点から語彙習得理論に基づき要因を明らかにし、より説明力のある結論を導くことである。本博士論文に関する全ての実験はすでに終了しており、3年目は調査結果を論文として仕上げ、学位論文執筆の取りまとめを行う予定である。

2 本年度の研究活動

Kodama, K., & Shirahata, T. (2020). Optimizing Second Language Vocabulary Learning with English Word Tests. *Studies in subject development*, 8, 29-38.

橋 詰 ゆ り

(学籍：静岡大学)

○研究テーマ

GPS情報と心拍数からみる体育科教材としての鬼ごっこの導入

○研究ポイント

子供の体力課題に対し、学校の担う役割が大きくなっている一方、教育現場では働き方改革が強く求められている。体育授業の中で、一定の活動量を確保することは、子供の体力向上および健康の保持増進の視点において、非常に価値がある。本研究では、GPSを用いた位置情報と心拍メモリー計で得られた強度変化を基準とした、体育科教材としての鬼ごっこ導入について検討するとともにGPSを活用した授業の取組についてその可能性について探求し、子供の体力課題と教職員の教材研究の新たな指針および提言を得る。

○キーワード

GPS情報、心拍数、鬼ごっこ、体育科教材、授業開発

1 博士論文の計画

1) 1 HzGPS活用可能性の検討（教科開発学論集第7号，日本コーチング学会第30回学会大会，2019）

子供の複雑な運動の測定/評価に1 HzGPS が活用できるのではないかと考え、子供の総力や方向転換スキルを考慮した動きのシミュレーションを1 HzGPSとHRメモリー計を装着した成人で行った。得られた移動距離、移動速度および運動強度を、小学生の総速度、体力テストにおける反復横跳びの記録および運動適正テストにおける時間往復層の得点からみる方向転換スキルと比較、検討した。その結果、低学年児童および低体力児童の運動は1 HzGPSでも十分補足可能と示された。

2) 公立小学校 おける鬼ごっこの実態調査（セミナーⅡで途中経過報告 2020.2.）

公立小学校の小学校4年生に対し、体育授業における鬼ごっこのデータ測定を行った。GPS情報と心拍数から低体力児と高体力児の運動を比較、検討した。

今後さらに詳細にデータ分析を行うとともに、測定対象を増やし比較検討すること、異学年との比較、検討など追調査および測定を実施する。

3) 体育科教材としての鬼ごっこの提案

子供の体力向上に向けた体育科教材として鬼ごっこを整理し、提言していく。

4) 公立小学校での導入

教材化した鬼ごっこを公立小学校で導入し、アンケート調査等効果測定をしていく。また、GPSを保健体育授業に導入した新たな保健体育教授法について具体的な方法と今後の指針について言及する。

2 本年度の研究活動

公立小学校へ協力依頼をし、体育授業での測定を実施し、得られた結果をセミナーⅡで報告した。今後は、さらにデータ数を集積するとともに鬼ごっこの種類と単元との関連性から授業導入についての方法について明らかにする予定である。

中山 敬 司

(学籍：静岡大学)

○研究テーマ

静岡県小笠地域における融和運動家井上良一の行動と思想

○研究ポイント

井上家所蔵資料の活用

○キーワード

井上良一 被差別部落 小笠地域 融和運動

1 博士論文の計画

小笠地域に生きた融和運動家井上良一の活動を通して静岡県の部落史を明らかにする。

本論文で研究対象とする静岡県では被差別部落は50地区余り存在し、水平運動が展開されたがそれは大衆的基盤を持ち得なかったため融和運動が一定の影響を持った。戦後も差別事象はあったわけだが、同和教育や運動が活発でないため水面下での問題になりやすい。そのため静岡県部落史や水平運動史・融和運動史の研究をさらに深める必要がある。井上良一の研究については、1990年代の小林丈広による研究以降、深化していない。井上の戦前から戦後の活動をみたときに、彼は静岡県の部落解放運動や農民運動に大きな役割を残したといえ、井上の業績は研究対象として掘り下げるべきである。井上の活動は融和運動にとどまらず、戦後の農地改革など小作など弱者側で行動している。こうした活動も研究対象として検討したい。また、教科開発学の視点では井上をどう授業化していくかを検討していきたい。

2 本年度の研究活動

井上良一の残した井上家の所蔵文書を確認し、その史料を読みこむことが大きな柱となっている。また、旧小笠町所蔵（現菊川市）史料として旧小笠町（現菊川市）南山村作成の『融和会関係書類』、『同和奉公会関係綴』、『社会関係書類』を併せて検討している。上記文書と全国や静岡県に残る水平運動及び融和運動史料を整合し、従来の研究史を整理している。本年度は1920年代以降本格化する井上良一の融和運動の検討を行った。中央融和事業協会の嘱託であった山本正男と共通する点も多く、両者の行動と思想を検討した。また、井上の小笠地域における影響力や、小笠地域の経済更生運動を明らかにした。小笠地域において、部落経済更生運動は中堅人物養成や、協同組合設立へと進むわけであるが、それを牽引したのが井上であることを地域史料や井上家の史料等で論証した。その際に井上のムラであるA区の経済状況がかなり貧困であって、次年度の課題として井上と満州移民について考察していきたい。また、満州移民送出が全国的にも推進されていく中で被差別部落民もその対象として積極的に渡満させていくことになる。静岡県の被差別部落民の中でも、井上1人が資源調整指導員として資源調整指導員錬成講習会に参加し、移民送出に期待されている。井上が残した史料から小笠郡や静岡県の被差別部落にとっての満州移民を検討したい。

授業構想においては昨年度と本年度、高校1年生を対象に県内出身の被差別部落出身者を招き、ゲストスピーカーとして被差別体験を語っていただく（オーラル・ヒストリー活用授業）ことができ、生徒の授業後の変容を図ることができた。今後はこうした授業の成果と、井上良一の動きをどう関連づけて教材化できるかを検討したい。さらに授業プランを考えて可能な範囲で授業化することを計画している。

満下健太

(学籍：静岡大学)

○研究テーマ

教育的意義の認知が教員のリスク認知過程に及ぼす影響の研究

○研究ポイント

学校における負傷疾病事故の発生実態は殆ど改善されていない。その要因として、近年、教育的意義によるリスクの見逃しが注目されるようになった。しかし、実際に教育的意義の認知が教員のリスク認知に影響を及ぼすかは明らかにされていない。こうした問題意識の下、本研究では教育的意義とリスク認知の関係を検証することで、教育活動という特殊性が学校のリスクマネジメントをどう特殊化させているかを明らかにし、学校の日常的活動における事故発生の要因を心理学的観点から解明する。

○キーワード

学校安全、リスク認知、教育的意義、体育的活動

1 博士論文の計画

博士論文は全三部で構成する。第一部では、先行研究の整理から、これまでの学校における事故発生の現状を整理する（序論）。次に、これまでの学校事故研究を整理し、現状と課題を指摘することで本研究の位置付けを明確にする（研究1, in preparation）。そして、問題を解決する方法の測定の枠組みを考案する（研究2, submitted）。第二部では、これまでの学校事故研究からは指摘されてこなかったリスクと教育的意義の関わりを検討する。まず、リスク認知研究の課題を指摘し、それを修正した枠組みにおいて大学生を対象にリスク認知と教育的意義の関わりについて基礎的検討を行った（研究3, 満下・村越, 2018）。また、その傾向が教員にも見られるか及び大学生と比較した教員の傾向を明らかにした（研究4, 満下・村越, 2020）。これらの知見から、教育的意義が事故発生に関わる・関わらない活動場面を焦点化し、質的検討によってその関わりを具体化する（研究5）。第三部では、総合考察として、学校における安全文化の醸成に向けた課題を議論する。

2 本年度の研究活動

2.1. 論文等

満下健太・村越真（2020）リスクに見出される教育的意義：3相因子分析法による小学校の体育的活動に対するリスク認知と教育的意義の関連の検討. 体育学研究, 65, 19-33.

村越真・満下健太（2020）過酷な自然環境における実践知:南極観測フィールドアシスタントのリスクマネジメントの分析. 認知科学, 27 (1), 23-43.

2.2. 学会発表等

Murakoshi, S. and Mitsushita, K. Usability problems and literacy of online maps. International Cartographic Conference, Tokyo, Japan, July 2019.

満下健太・村越真（2019）実践経験による山岳リスクイメージの精緻化:三相因子分析による検討. 日本認知科学会第36回大会.

Mitsushita, K., Sakai, K., Nishio, N., and Shiota, S. Risk evaluation of the severity and frequency of social networking problems among school age children. International Conference on Advances in Education and Information Technology, Phuket, Thailand, January 2020.

百瀬 容美子

(学籍：静岡大学)

○研究テーマ

先天全盲児童・生徒の運動イメージ生成指導法と評価に関する研究

○研究の独創性、希少性および挑戦性

国内外初の取り組みであったこと、指導現場からの要請が高いが難題であったこと、先天全盲の数が極めて僅かなこと、研究上の限界に挑戦し研究手法を駆使したこと。

○キーワード

先天全盲、視覚特別支援教育、体育科教育、運動イメージ、イメージトレーニング

1 博士論文の進捗報告

本研究の目的は、先天全盲児童・生徒の運動学習に寄与する運動イメージ生成指導法と評価法を開発し、視覚特別支援学校に実践導入することであった。そのためのプロセスとして、第一段階で日本トップ水準の先天全盲選手の運動イメージ生成スキルとイメージ生成方略の実態を質問紙と面接により調査した上で評価尺度の項目を作成した。第二段階では、実態調査結果に基づいた運動イメージ生成評価尺度の信頼性と妥当性、実用性の検証をした。第三段階では、作成した運動イメージ生成評価尺度を活用した運動イメージ生成指導法を考案して、視覚特別支援学校の先天全盲児童・生徒を対象に事例実践しその効果を検証した。一連の研究結果から、課題は残るものの、概ね事例的な奏功と新たな知見が確認された。このように、博士論文を構成する一連の研究が完成された。

2 本年度の研究活動

本年度には、論文掲載3件、学会・研究会発表2件を行った。具体的には、以下の通りである。

[論文]

百瀬容美子 (2020) ブラインドサッカー初学児童に対する1回の運動イメージ生成指導の影響に関する事例研究 - 先天性視覚障害児童のボールキック動作スキルと運動イメージ生成スキルの変化に着目して - . 教科開発学論集, 8, 127-134. (査読有)

百瀬容美子・小畑昭仁・伊藤宏 (2019b) 日本プロサッカー選手の運動イメージ生成構造に関する事例報告. 常葉大学教育学部紀要, (39), 405-417.

百瀬容美子・伊藤宏 (2019a) ブラインドサッカー選手に対する運動イメージ生成指導法の実践. スポーツパフォーマンス研究, 11, 320-338. (査読有)

[発表]

Momose, Y., Koakutsu, A., and Fuziiki, A. (2020) Comparing Characteristics of Movement Imagery in Soccer Players with Congenital and Acquired Blindness: Focused ESMI-BS Score and Imagery Structure. Pacific Rim International conference 35th Annual Conference. Conventional poster-presentation. (Peer reviewed publications)

百瀬容美子 (2019) 視覚特別支援学校小学部の体育授業における運動イメージ生成指導法の実践 - KH Coderを用いた効果検証 - . 第10回教科開発学研究会発表.

市川裕理

(学籍：愛知教育大学)

1 博士論文の計画

(1) 論文テーマ

英語授業における協働学習のプロセス分析

(2) 研究の目的

本研究は英語授業に協働学習 (Collaborative learning) を取り入れた際の、学習プロセスを質的に分析し、新しい学びのあり方を、実践事例を通して提案するものである。ここでいう「新しい学び」とは、授業を知識教授の場としてだけでなく、協働を核にした知識創出の場とすることを指す。

その上で、2つの観点から考察する。まず、協働学習を成功させるためには「場」の構築が必要であることを先行研究からまとめ、本実践においてどのように実現されているかを質的に分析する。2つめは、英語学習に協働学習を取り入れる意義についてである。学習のプロセスに着目し、協働で行うランゲージングについて、談話分析を行う。ランゲージングの質を明らかにした上で、それが英語学習においてどのような意味を持つのか、可能性を探る。

2 研究活動

(1) 協働学習で形成される学習集団

協働学習に必要な「場」の構築として、英語劇を行った際に、どのような学習集団が形成されているかについて、学習者に対するアンケート (自由記述) から得られた文字データについてテキストマイニングを行い、ジョンソンら (2010) の基本原則に照らし合わせ、帰納的手法で分析を試みた。自由記述は統計的に処理しづらく、客観的な評価が困難とされるが、学習者が活動をどのように理解しているのか質的な解釈を行う (Croker, 2012) ことを目的として分析の対象とした。

(2) 英語劇活動におけるランゲージングの検証

英語学習に協働学習を取り入れる意義について、英語劇作成プロセスに注目し、原稿を作成する際のランゲージングを分析対象とした。協働対話型のランゲージングにおいて、対話分析を行い、何を話しているのか (語彙、文法、意味) について、また学習者自身がどのように理解を深めているのかを考察した。さらに、アンケートを行い、学習者がどのように認識していたのかを調査した。

神谷裕子

(学籍：愛知教育大学)

○研究テーマ

幼児教育から小学校教育への学びの接続-スタートカリキュラムの開発と検証-

○研究ポイント

幼児期の学びの芽生えから小学校での学びの自覚化について生活科を中心としたスタートカリキュラムの研究開発を通して明らかにしていく。また、同時に生活科における児童の非認知能力の向上についても授業や評価指標の開発を行い、明らかにしたいと考える。

○キーワード

スタートカリキュラム、生活科、非認知能力

1 博士論文の計画

H28年度から本研究に取り組んでおり、すでに刈谷市の幼保小学校での調査活動やスタートカリキュラムの構築・実践・検証は行っている。博士論文の構成としては主に以下のように考えている。

①はじめに

- ・研究の背景
- ・研究の目的と方法

②小1 プロブレム

- ・小1 プロブレムの予防とスタートカリキュラム (H22新保真紀子)
- ・刈谷市小学校アンケート調査 (H28, 29)

③幼保小連携

- ・生活科の始まりと幼児教育のかかわり
- ・幼小連携・保幼小連携の理論と実践
- ・刈谷市の現状と課題 (H28アンケート調査)

④接続期カリキュラム【H29・30】

- ・アプローチカリキュラムの理論と実践
- ・スタートカリキュラムの理論と実践
- ・刈谷市リンクカリキュラムの構築と実践

⑤学びの芽生えから自覚的な学びへ—スタートカリキュラムの検証—【R1】

- ・幼児期の遊びから小学校での学びの理論と実践
- ・刈谷市リンクカリキュラムによる実践と検証
- ・刈谷市立平成小学校1年生児童と担任への調査 (入学前後の行動観察記録分析・アンケート、インタビュー、ノート等ポートフォリオ)

⑥生活科による非認知能力の育成に関する研究

2 本年度の研究活動

本年度は⑥の生活科による非認知能力の育成に関する研究を行い、低学年児童の非認知能力を伸ばす生活科の授業とその評価のあり方を追究したいと考える。

磯崎雄三

(学籍：静岡大学)

○研究テーマ

中学校社会科地理的分野における思考力育成について

○研究ポイント

思考力とは何かを考察すること 地理的見方・考え方と思考力の関係性の考察 地理情報システムの活用と思考力育成について

○キーワード

思考力・表現力 地理的見方・考え方 地理情報システム (GIS)

1 博士論文の計画

テーマ「中学校社会科地理的分野における主題図を活用した思考力の育成について」

新しい学習指導要領が平成29年3月に定められ中学校では、2021年度より完全実施となる。この学習指導要領では「資質・能力の育成」が目標とされ、そのための方法として「主体的、対話的な深い学び」がうたわれている。この目標と方法論を現場での実践の中で活かしていく手立てを考えていくことが研究の目的である。

研究は、学習指導要領に関するもの、実践する地理情報システムに関するもの、授業デザインに関するもの、実践から得られた結果に関するものに分類される。本研究は以上の部分を研究することにより最終的に博士論文としてまとめる計画である。

2 本年度の研究活動

本研究の仮説として、思考力を使った課題に関して十分な指導が行われていないというものがある。しかし、この仮説は筆書の主観によるところが大きいとの指摘を得た。そこで、他の分野と比較して思考力に関する課題が劣っている、つまり指導が不十分であるという実態が正しいかの検証を行った。

検証の対象として「静岡県学力調査」を取り上げた。この検査は、静岡県の全中学校が受検するものであり、抽出ではあるものの正答率や無答率なども公表される。また、問題毎に評価の観点も定められている。問題については、知識技能だけで解答できる問題と知識技能を一般化してから活用しなくてはならない問題(筆者はこれを思考力と考えている)を分類し、集計された正答率等と比較を行った。

比較の結果、後者の正答率が低いことが見て取れた。しかし、統計的な処理は行っていないため、今後の課題としたい。また、問題の分析について思考がどれだけ深まっているかという点について客観性が低いとの指摘を受けているので思考についての尺度というようなものをつくる必要があることに気づいた。

思考については、どのように捉えるべきか難しい問題があるが筆者は、既存の知識や技能を汎化し、それを活用して課題を解決するプロセスであると考え、このような視点で今後の研究を進めていきたい。

下 田 実

(学籍：静岡大学)

○研究テーマ

「個」を「場」に導く指導に関する研究

○研究ポイント

本研究は、国語科教育の授業実践力の向上に向け、学習者を学習の「場」に導く指導のありようと構想の視点を見出していくことを目的としている。この目的に迫るための以下の課題を設定し、学習者研究を中核に据えて明らかにしていく。

- (1) 「個」と「場」の関係に目を向けた学習者研究の枠組。
- (2) 「場」における相互作用とその導き方。
- (3) 「場」における関係の聯合とその導き方。
- (4) 「『個』を『場』に導く指導」における実践上の課題と解決の方向。

○キーワード

ことばの学びの生成過程教師研究と学習者研究の構造化内面的主体性

1 博士論文の計画 ※ 序章と結章を除く。章題は仮題。

第1章研究の方法と枠組み

「場」との関わりに目を向けた学習者研究の構築に向けて、特別な配慮を要する「個」への指導過程を取り上げ、実践主体である当事者が「物語る」研究手法の必要性和枠組みについて考察する。

第2章相互作用が生じる「場」

2人の指導過程の相違から、相互作用を生み出す場のありようと指導の視点について考察する。

第3章より深い学びが成立する「場」

劇の単元を取り上げ、互いが影響し合うことで、創造的な学びが生じていく過程について考察する。

第4章自己肯定感を導く「場」

「批評文を書く」単元を取り上げ、学習の深まりを通して自己肯定感が導き出される過程を考察する。

第5章「『個』を『場』に導く指導」の検証

特別な配慮を要する「個」に注目することで見出された方略を他の集団に当てはめ、その学習過程と成果を比較検討する。比較対象として第3章で詳述した劇の単元を取り上げる。

2 本年度の研究活動

【発表】

- 1) 「『場』の拡張が胚胎する指導—小学校6年生への国語科乗り入れ授業の効果—」全国大学国語教育学会第136回茨城大会（茨城大学）2019年5月

西ヶ谷 浩 史

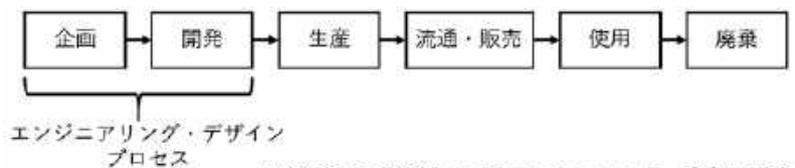
(学籍：静岡大学)

○研究テーマ

設計を中心にした授業過程の研究

○研究ポイント

中学校技術・家庭科(技術分野)(以降、技術科と呼ぶ)において、設計を中心にした授業過程を研究している。技術科の授業は、工業製品のライフサイクル(図1)の「生産」の段階に相当するものづくりに偏る傾向があるという課題を設定し、工学設計の手法を取り入れた授業過程を考案し授業実践をすることで「企画・開発」を行うエンジニアの視点を身につけさせることを目的とし、その効果を検証する。



別府俊幸：工学教育におけるエンジニアリング・デザイン教育、
工学教育 59(4), p73(2011)

図1 工業製品のライフサイクル

○キーワード

中学校・技術家庭科(技術分野) 工学設計 エンジニア テクニシャン

1 博士論文の計画

博士論文の構成は、次の通りである。序章では、研究の目的、問題の所在と課題設定、研究の方法について説明する。第1章では、中学校技術・家庭科学習指導要領の変遷から設計の取り扱いについて整理する。第2章では、過去の学習指導要領の変遷から、設計教育が製図に関わる知識と技能に偏った教育がされてきたという問題点を明らかにし、図1の「企画・開発」の段階で行われる新たなものや価値を生み出すための設計、すなわち工学設計に着目し、授業に導入する手法を検討した。第3章では、工学設計を行うエンジニアの視点を明らかにするために、テクニシャンとの比較を行った。第4章では、中学生のものづくりの傾向がテクニシャン寄りではないかという仮説のもとアンケート調査を行った。その結果、テクニシャン寄りの視点を明らかにした。第5章では、テクニシャン寄りの傾向を示した視点をエンジニア寄りにするための教材開発と授業に取り入れた工学設計の手法の効果を検討した。終章は、研究の成果と課題を述べる予定である。

2 本年度の研究活動

本年度の研究活動の中心は、博士論文の執筆である。研究発表は、2019年8月24日、25日に行われた日本産業技術教育学会第62回全国大会(静岡)において、「工学設計を重視した授業の効果」を発表した。

中川 右也

(学籍：愛知教育大学)

○研究テーマ

認知言語学を援用した句動詞習得方法

○研究ポイント

動詞と不変化詞（前置詞/副詞）で構成される句動詞を効果的に学習する新たな方法を提案する研究

○キーワード

イメージ・スキーマ、句動詞、語彙習得、意味的動機付け、認知言語学

1 博士論文の計画

本研究は、理論言語学の1つである、認知言語学の知見を援用し、動詞と不変化詞（前置詞/副詞）で構成される句動詞を効果的に学習する新たな方法を提案するものである。認知言語学は、人間の経験主義的立場を重視し、身体運動や文化・社会環境などを通しての相互作用によって得られた経験が言語に反映されるという考え方を重視するパラダイムであることから、特に意味を伴う語彙学習に対して、意味の有縁性に着目した方法を提示するなど、その示唆が期待できる。なお、研究方法については以下の2つの観点から行う。1つ目は教授法の観点から、句動詞の種類と提示方法の組み合わせの違いによって効果が異なるという仮説を基に、提示方法の精緻化を行う。2つ目として学習法の観点から、教育現場において浸透しつつあるアクティブラーニングを取り入れた帰納的句動詞学習法を新たに提案する。

2 本年度の研究活動

本年度行った研究は、①学力を操作的に定義した上で、学力と句動詞習得の相関を明らかにし②提案する学習法を教師が理解し教えられるか（teachability）、また学習者が理解可能であるか（learnability）という観点から考察を行った。

（書籍）

・句動詞習得におけるteachabilityとlearnabilityの検証（共著）『第二言語習得研究モノグラフ第3巻』くろしお出版 2019・TOEIC L&R TESTのための基礎演習（共著）三修社 2020・文部科学省検定済教科書中学校外国語科用Here We Go! ENGLISH COURSE（共著編）光村図書出版 2020

（論文）

・関係代名詞の明示的指導におけるアニメーションの効果－自学自習を支援する教材を目指して（共著）『中部地区英語教育学会紀要』49（pp.87-94）2020・英語の音声指導における明瞭性の成績の伸びと児童の内省の特徴－自由記述回答に基づく計量テキスト分析－（共著）『教科開発学論集』第8号（pp.39-48）2020・小学校児童を対象とした超分節的特徴の指導における調査－アンケートに基づいた計量テキスト分析－（共著）『英語授業研究学会紀要』第28号（pp.34-49）2020

（口頭発表）

・英語学の知見はどのように英語教育に役立つのか？～認知言語学的観点から～（単独）英語授業研究学会 関西支部 第270回例会 2019・チャンツ指導における明瞭性の向上と児童の内省の特徴－質問紙調査における自由記述回答に基づく計量テキスト分析－（共同）第19回 小学校英語教育学会 北海道大会 2019・Large class spoken assessment: Retell, recite, review（共同）FLEAT 7 International Conference on Foreign Language Education & Technology 2019・Planet English: a doorway to global citizenship（共同）The 58th JACET International Convention 2019

渡 辺 芳 朗

(学籍：愛知教育大学)

1 博士論文の計画

(1) 論文テーマ

中学校英語科における学習適性タイプに対する指導者用デジタル教科書の有効性の検証

(2) 研究の目的

本研究の目的は、指導者用デジタル教科書を活用した授業の効果が生徒の学習適性とどのような関連があるのかを明らかにした上で、それぞれのタイプの中学生に応じた英語学習モデルを探ることである。

(3) 研究の経過

指導用デジタル教科書の活用が体験を好む学習適性タイプの生徒に有効であると考え、2016年7月から10月にかけて中学校の1年生(N=190)を対象に実験を行った。その結果、指導用デジタル教科書は「抽象言語タイプ」「バランスタイプ」「感覚運動タイプ」のどの学習適性タイプの生徒にも有効であり、特に、感覚運動タイプにはその効果が顕著であることが分かった。さらに、2019年2月下旬から3月上旬にかけて、8つの公立中学1年(N=1,503)と英語科教員(N=31)を対象に、①学習適性、②英語学習、③デジタル教科書の機能、④英語技能達成、に関する調査を行った。調査結果を基に、学習適性と英語学習、学習適性と指導者用デジタル教科書の機能、学習適性と英語技能達成、に関する相関分析を行った。それとともに、2019年1月から2か月間、学校現場で中学1年生の指導を通して、学習適性タイプ別の学習成績のデータを収集した。

(4) 今後の展開

これまでの取り組みから、以下の課題が明らかになってきた。

1. 外国の先行研究にあたり、根拠となる学際論を明確にする。
2. 学習適性やICT活用をふまえた中学校英語科(2年)の「学習モデル」を作成する。
3. 調査結果を科学的に分析するために、SPSSやテキスト・マイニングなどの分析を行う。

これらの問題解決のために、2020年4月から、中学校英語科教員と協力し、「学習モデル」を作成し、授業実践する。得られた結果を分析し、その有効性を検証する。

2 研究活動

2016	12.20	中部地区外国語メディア学会 (鈴鹿大学) 口頭発表	「デジタル教科書の活用」
2018	8.19	日本デジタル教科書学会 (富山大) 口頭発表	「学習適性に注目した英語指導に関する検証」
	12.16	外国語教育学会 (東京外国語大) 口頭発表	「学習適性とデジタル教科書活用に関する検討」
2019	5.25	中部地区外国語メディア学会 (名古屋学院大学) 口頭発表	「指導者用デジタル教科書の活用実態に関する検討」
	8.8	外国語教育メディア学会 (早稲田大学) 口頭発表	「学習適性に注目した英語学習支援に関する検証」
	8.17	全国英語教育学会 (弘前大学) 口頭発表	「中学生の英語の躰きと英語技能の達成度に関する検討」
	9.7	日本教育工学会 (名古屋国際会議場) 口頭発表	「学習適性タイプと英語学習方略に関する検討」

大 西 洋

(学籍：静岡大学)

○研究テーマ

明治維新时期・明治期の条約締結・改正研究と小学校社会科

○研究ポイント

歴史学研究を基盤とし理論的研究と方法論的・実証的研究を通じた教育実践研究の推進

○キーワード

不平等条約締結・改正及び交渉史研究、歴史教育、教科専門と教科教育、持続可能な社会

1 博士論文の計画

(1) 研究の概要

近世末・明治期の不平等条約締結・改正及び交渉史の先行研究を、現在の到達点まで、外交史、政治史、自由民権運動史、思想史、軍事史など多面的・レビュー的に検討する。そして、それが明治維新时期・明治前期の喫緊の課題の中心的な位置付けにあったことを検証する。また、本研究を教科専門とし、小学校社会科教育の歴史単元（第6学年）において、効果的な単元構想・授業展開を提案する。

(2) 研究の経過

①明治維新・明治期の条約締結・改正やその交渉過程の研究

徳川幕府の日米和親条約・日米修好通商条約の締結過程、陸奥宗光を中心に明治期の各外務大臣による条約改正交渉の研究を整理、分析を進め、イギリス外交文書Confidential Print : Japan (F.O.410) など海外史料の確認を通して補完する。

②小学校社会科歴史単元の構想・授業展開

「条約締結」「条約改正」を「単元の核」に設定・指導案作成・授業実践・授業後の児童のアンケート集計・本授業実践ではない前年度のアンケート集計までは終了している。今後、集計結果を分析し、その効果を検討し、新学習指導要領に準拠した学習目標・評価規準を加え修正した指導案を作成・提案する。

2 本年度の研究活動

- ・大西洋「聞く個が活動する，板書を活用した汎用的な小学校社会科授業スタイルの構築－OODAループと社会的事象の見方・考え方，“安心・安全・安定”の概念，板書計画を繋ぎ，深い学びの充実へ－」，静岡教職員組合秋の静岡教研，静岡県コンベンションアーツセンター，口頭発表（2019.9.20）／静岡県教職員組合第69次教育研究静岡県集会，御殿場市立御殿場小学校，口頭発表（2020.10.27）／日本教職員組合第69次教育研究全国集会，広島国際会議場，口頭発表（2020.1.26）／『日教組第69次教育研究全国集会報告書 社会科教育（B 現状認識）』（pp.83-94，日本教職員組合，2020）／『第69次県教研 静岡教組リポート～私たちの身近な教育実践～』（pp.11-35，静岡教職員組合，2020.2）
- ・『目からウロコ!? おもしろ静岡歴史ゼミナールⅡ』（pp.73-76，pp.93-96，静岡市社会科学学習会，2019.12.21）
- ・実践授業研究発表「小学4年生社会科 国際交流に取り組む浜松市のまちづくり（わたしたちの県のまちづくり）」，静岡市立安東小学校令和元年度拡大校内研究会，授業実践・事後研究協議会（2020.1.30）
- ・大西洋「慣例的学習方法をOODAループ理論に当てはめた汎用的社会科授業展開スタイル－授業者と学習者が自ら動く，4つの目に見える化した板書と併せる－」，社会系教科教育学会第31回研究発表大会，岡山理科大学，口頭発表（2020.2.22）
- ・静岡県出版文化会編『わたしたちの静岡県』（執筆・改訂pp.8-9，pp.32-33，pp.42-47，pp.63-65，静岡教育出版社，2020.3）／同前掲書「教師用指導書」（2020.3）
- ・静岡市小学校社会科副読本『しずおかだいすき』（執筆・改訂pp.65-72，pp.158-160，pp.173-190，静岡市教育委員会，2020.4.1）

室 雅 子

(学籍：静岡大学)

○研究テーマ

教員養成課程における家庭科教員に求められる力の育成 - 保育学における保育実習について -

○研究ポイント

大学の教員養成課程における保育実習の検討

○キーワード

家庭科教育 教員養成 保育学 保育実習

1 博士論文の計画

本研究では、家庭科という教科の持つ特徴をふまえた家庭科教員に求められる力や姿から、その力の育成に関わる問題点と課題を明らかにすることを目的としている。家庭科は社会背景の影響を強く受ける内容を多く含み、日常生活とも密接である。この密接さゆえに学校による家庭科教育のみならず、職業人としての家庭科教員にも影響を与えていると考えられる。本来は教員の生活体験と指導内容は直接の影響はなく指導できるはずと考えられるが、実際は教員の体験が指導内容や指導への自信に影響しやすいことが先行研究で示されている。また、家庭科履修者を対象とした共同研究から、学習した内容を自己認識で理解できていると自認しているが理由までは正確に説明できない者が少なくないことが明らかとなっており、実践的な力をつけるには学習内容の正確なイメージができる素地が必要であると考えられる。本研究では家庭科の内容の中でも、日常経験が少ない者がいる内容として保育を取り上げ、子どもに接する機会が少ない現代の教員養成課程生の保育実習のありかたを検討する。これまで中高での保育実習の生徒への効果は数多く研究されてきているが、教える側の実習のあり方に決められた方針はなく効果研究も少ない。研究計画として、教員養成課程生の実力調査および実習実態を確認し、先行研究および教育学的知見から中高で保育を教えらるる力を付けるための教職課程履修生用の保育実習プログラムを立案し効果を検討する。

2 本年度の研究活動

本年度は、前年度行った調査の活字化、および教職課程履修者を対象に行った保育学習のプログラムのプレ実験（実習）の参与観察とインタビューの分析を行った。さらに、国立大1校、私立大1校の保育学内保育実習の見学（参与観察）を行った。これらのプレ実験と見学をふまえて本調査の計画を立案し、2月に本実習を実施予定であったが延期となったため、次年度秋に実施予定である。

室雅子「家庭科教職課程履修生の家族・保育内容の指導に対する課題」椋山女学園大学研究論集 第51号（社会科学篇）2020.3

室雅子，吉本敏子，星野洋美，小川裕子，吉岡良江，安場規子，吉原崇恵「衣生活の学習による能力の育成－生活場面で実践できる力の実態と課題－」日本家庭科教育学会2019年度例会口頭発表，東京学芸大学，2019.12

小川裕子，吉原崇恵，星野洋美，室雅子，安場規子，吉岡良江，吉本敏子「生活場面で実践できる力の実態と課題－住生活の学習に関する能力の育成－」日本家庭科教育学会第62回大会口頭発表，金城学院大学，2019.6

日本家庭科教育学会課題研究2-1B「家庭科教員養成に関する調査・実証研究・教員養成—家庭科教員養成の目的・方法・内容」参加

渡 邊 明 彦

(学籍：静岡大学)

○研究テーマ

「南北朝正閏問題」前後の史学論～田中義成と喜田貞吉～

○研究ポイント

歴史家の喜田貞吉に注目し、戦前の実証主義史学が目指した歴史学の射程を明らかにする。

○キーワード

歴史 歴史教育 田中義成 喜田貞吉 南北朝正閏問題

1 博士論文の計画

本論文は、日本近代史学が成立した明治後期から大正時代の歴史理論を分析することを通じて、日本近代史学の成果と課題を明らかにすることを目的とする。具体的には、歴史学と歴史教育の理論が完全に分断されたとされる1911（明治44）年の「南北朝正閏問題」の前と後で発表された「史論」や「歴史教育論」（以下、史学論）がどのように変化していったのかを、喜田貞吉に注目して分析する。「南北朝正閏問題」で問題とされた国定教科書を執筆した喜田貞吉は、問題化する前年に『国史之教育』（1910）を出版して歴史教育のあり方を世に示した。喜田は同事件により文部省を休職処分となった後も、積極的に論考を執筆し、歴史学者のあるべき姿を示し続けてきた。喜田の活動を通じて、明治末期から大正期にかけての史学論の一端を明らかにする。同時に、同時代に東京帝国大学で教鞭を執り、史料編纂所を中心に活動し「実証主義歴史学」の典型例とされる田中義成と比較し、明治後期から大正時代にかけての「実証主義歴史学」における史学論の変遷を検証し、皇国史観が主流となる前史を明らかにすることで、歴史理論と歴史教育論のあるべき姿を追求する。

2 本年度の研究活動

本年度は以下2本の論文及び研究ノートに取り組む。

①「田中義成の歴史学～近代実証主義歴史学の射程～」(仮称)

「南北朝正閏問題」後、「学問の独立」を守った「実証主義」の歴史家として評価される田中義成（1860-1919）に着目し、明治後期から大正時代にかけての日本の実証主義歴史学の内実の一端を明らかにする。田中義成は「南北朝正閏問題」翌年の1912年の史学会大会で「史学の活用」と題した講演を行った。その講演を含めた田中義成『日本武士』及び『国史の片影』を分析する。「実証主義歴史学」の実践者であった田中義成は狭い意味での「実証」のみに拘泥せず、広く時事問題に歴史的観点から意見する「史学の活用」を問いた。その「史学の活用」を求めらる中でかつて否定したはずの大義名分論な歴史像に絡め取られていく過程を明らかにしたい。

②「喜田貞吉の歴史教育論～『国史の教育』と「南北朝正閏論」の分析を通して～」

「南北朝正閏問題」の当事者である喜田貞吉が事件の前年に著した『国史の教育』と、事件の最中に執筆し未発表で終わった（著作集で始めて公表された）「南北朝正閏論」の両者を分析し、第二期国定教科書の執筆に際して喜田が目指していた歴史学と歴史教育のあり方を明らかにする。そして「南北朝正閏問題」が、喜田の歴史認識にどのような影響を与えたのかを考察する。

杉山元洋

(学籍：静岡大学)

1 博士論文の計画

(1) 論文テーマ

理科（科学）固有の「学ぶために読むこと」の指導法の開発

(2) 計画

本研究では、理科（科学）固有の学ぶために読むことの指導の必要性を示し、その指導のために必要な要件を明らかにする。要件を実験研究で検証した上で科学領域固有の指導法を開発する。

①理科（科学）固有の学ぶために読むことの指導はなぜ必要か：科学的テキストを読むことによって理科を学ぶことにおける汎用的ストラテジー指導の限界を明らかにする。

杉山元洋. (2018). 理科（科学）固有の「学ぶために読むこと（read to learn）」の指導はなぜ必要かーテキスト理解（text comprehension）研究に基づいて. *科学教育研究*, 42 (3), 242-254.

②理科（科学）固有の学ぶために読むことの指導の開発に向けて：上記1の限界を克服すべく、理科教育分野における指導法や理科固有の読むことの研究をレビューした上で、歴史分野で先行する領域固有リテラシー指導がどのように上記の限界を克服しているか明らかにする。（実施中）

③理科（科学）固有の学ぶために読むことの指導法のフレームワークとして、指導原理としてのアプローチと授業のアウトラインを開発して、提案する。

④実験

目的：③の指導フレームワークに基づいた授業を計画、実施してその効果を検証する。

方法：小学校高学年向けの科学テキストに、国語の読解指導を付けたものと科学者の読むことのアプローチによる理科的な教科指導を付けたものを読むクラスを各々設定し、読解後にテキストベースと状況モデルの課題に答えてもらう。

仮説：国語指導のクラスはテキストベース課題には答えられるが状況モデル課題には困難を示す。理科指導のクラスは、両方の課題に答えられる。

2 本年度の研究活動

杉山元洋. (投稿後修正中). 歴史教育分野における学ぶために読むことの指導法ー理科（科学）固有の学ぶために読むことの指導法の開発に向けてー. *科学教育研究*.

以上

田村 知子

(学籍：静岡大学)

○研究テーマ

Japanese Speakers' L2 Acquisition and Explicit Instruction on English Derivational Affixes
(日本語の母語話者における英語の派生接辞の第二言語習得と明示的指導)

○研究ポイント

- 1) 日本語話者における英語の派生接辞の習得困難度順序と明示的指導の効果の解明
- 2) 日本語話者のための、英語の派生接辞の段階別指導法の提案

○キーワード

第二言語習得、語彙習得、習得困難度順序、明示的指導、派生接辞、段階別指導案

1 博士論文の計画

本論文の目的は、日本語を母語とし教室環境で英語を学ぶ大学生（以下JLEs）による、英語の派生接辞（例：un-, pre-, -ment, -ness）の習得の仕組みと、その指導効果を明らかにすることである。また、その結果得られた知見に基づいて、JLEsに適した、教室での派生接辞の段階別指導の方法を提案する。

本論文の研究・クエスチョン（RQ）は以下の通りである。1) JLEsは、派生語を形成する接頭辞（例：un-, pre-）や接尾辞（例：-ness, -ment）を、受容面においてどの程度習得しているか。2) 派生語の構造と派生接辞についての知識を教師が明示的に与えることは、受容面においてどのような効果をもたらすか。3) 接辞によって習得の度合いや指導効果に差があるならば、それはなぜなのか。

2015年度から2016年度にかけては、派生接辞の習得困難度順序を調査し、実験で得られた接頭辞と接尾辞の順序を明らかにするとともに、それぞれの順序を決定する要因を考察した（←RQ (1) と (3)）。2016年度から2018年度にかけては、派生接辞の明示的指導の効果を調べ、接辞間の効果の差を生む要因を考察した（←RQ (2) と (3)）。また、2018年度は研究成果の教育現場への応用として、中・高・大の各段階において英語の派生接辞をどのような順序でどのように指導していけばよいか、言語理論と困難度順序に基づく試案を作成した。

2 本年度の研究活動

本年度はまず、2018年度の研究テーマであった「日本語を母語とする学習者のための英語の派生接辞の指導案」について、作成した段階別指導案を修正し、学会発表を行った。また、その内容を基に、出版原稿の執筆をおこなった。さらに、これまでの研究成果を総括した博士論文草稿の執筆を完了し、年度末に提出して審査申請をおこなった。

田村知子. (印刷中). 「派生接辞の特徴とその指導」. 白畑知彦 (編著). 『言語・認知・学習理論を基盤とした英語指導の新しい展開』. 東京：くろしお出版.

田村知子 (2019年6月). 「言語学と第二言語習得の知見に基づく英語の語彙指導：派生接辞の指導について考える」. 今井隆夫 (代表) 『CELESプロジェクト (課題別)：言語・認知・学習理論を基盤とした英語指導の新しい展開』. 中部地区英語教育学会第49回石川大会 (北陸大学太陽が丘キャンパス).

二見隆亮

(学籍：静岡大学)

○研究テーマ

「自己の探究を目的としたランニング学習に関する論考と試行」(仮)

○研究ポイント

体力の向上とは異なる目的によるランニング学習の意義を明らかにする。

○キーワード

探究、ウォーキング、ランニング、持久走、長距離走、総合学習

1 博士論文の計画

(1) 研究の経過

2019年度は研究テーマを再構成する期間となった。受講した文化資源活用論、教育評価実証方法論ではいずれも博士論文の在り方・進め方を重々ご講義頂いた。また、研究の事例や方法、評価に関する他の受講生との議論が自身の研究を見つめ直す機会となった。併せて2018年度に始めたインタビューの続きを3回行った。インタビューのテキスト化と分析は未完了である。その理由の1つが予定していなかったテーマによる論文投稿への着手だった。ランニングを取り上げる理由を際立たせるためにウォーキングをみてみると良いというアドバイスを頂き、「ウォーキングとランニングの研究動向比較緒論(1)」という題目で日本ウォーキング学会に論文投稿を行った。実質的にこの第1報と第2報(執筆中)を併せてレビュー論文となる。2つの運動を比較することでランニングを取り上げる理由をよりクリアにしたい。

(2) 今後の展開

上記の第2報が完了すれば自身の研究のどこにオリジナリティがあるのか、また教科開発学における意義があるのかが見えてくると思う。第2報の初稿を4月中に完了し、5月以降はアウトラインを整えながら8月セミナーⅢに向けての準備期間に充てたい。昨年からの「主体的・内省的なランニングが個人固有の人生課題に及ぼす影響」は博士論文における1部に過ぎない。今年度の後期に中学校総合的な学習の時間での実践機会を頂けることになったため、大きなタイトルを「自己の探究を目的としたランニング学習に関する論考と試行」と置き直してみた。総合学習の時間であれば体育とは異なる目的で実施することができ、ウォーキングとランニングの比較やインタビュー調査の分析結果も大いに生かせると考えている。

2 本年度の研究活動

(1) 社会活動

1. 走生塾(ランナーを対象とした勉強会) 2019年4月~2020年3月
2. 『明日の学び舎』音声化 音読を通じて観点を再確認した。小学校での実践は難しいことがわかった。

(2) 学会活動

第5回日本人間教育学会聴講 2019年12月

第32回ランニング学会口頭発表『ウォーキングとランニングを研究動向比較緒論』2020年3月※中止

(3) 競技活動

6/29(土) 中部陸協記録会 400m60"25

7/14(日) 野沢温泉トレイル 14km73'17

7/20(土) 山梨800m 2'10"50

8/4(日) 鉢盛山登山マラソン 32km2:30:43

9/22(日) 秋田チャレンジマラソン 50km3:28:48

11/25(日) 東海大記録会10000m35'31"31

各地、各種目のランニングイベントから参加者、運営者の気質や考え方を主観的に汲みとることができた。

石川 芳 恵

(学籍：静岡大学)

○研究テーマ

高校生の語彙学習と教師の長期的語彙指導法の考察

○研究ポイント

語彙学習における文脈が果たす役割、単語の受容的知識と産出的知識の獲得、母語と音声果たす役割について実証的な調査・研究を行う。

○キーワード

語彙学習、明示的指導、長期的研究、受容的知識、産出的知識、文脈使用、チャンク学習

1 博士論文の計画

英語学習における語彙の効果的な指導法について実験を行い、その結果について考察する。また、高校生の語彙の学習法及び教師の指導法の実態を調査し、そこから明らかになる課題について考察する。以上の調査研究結果を基に、高等学校における英語語彙指導の現状においてどのような指導法を用いるべきかを提案し、指導改善に資することを目的とする。そのために、特に次のような要因を考慮する。

① 文脈が果たす役割

文章を読んだり聞いたりする中で暗示的に語彙を学習する方法と、文脈から切り離して単独で意図的に学習する方法の効果について調査し、考察する。

② 受容的知識と産出的知識

英語の語彙知識の習得は、「受容的知識」の習得と「産出的知識」の習得に区別されるが、特に習得が困難な「産出的知識」について、どのような意図的語彙学習方法が効果的であるかを調査する。

③ 単語の音声果たす役割

語彙を学習する際、言語情報は必ず音韻化され、情報の処理・記憶システムに保存されるという研究が報告されている。実際に、タスクにおいて音声の利用はどの程度効果的であるかを検証する。

④ 母語が果たす役割

母語が確立した後にL2を学ぶ学習者の場合、L2習得に際しての母語の仲介の有効性を主張する研究が報告されている。英語の授業で日本語を取り入れて行う語彙学習の効果を検討する。

2 本年度の研究活動

日本語を母語とする高校生を対象として、英単語をチャンクで覚える方法と単独で覚える方法のどちらがより効果的であるかを検証する実験を実施した。英語の授業で3週間それぞれの方法で単語学習を行い、3回の事後テスト（学習直後、8週間後、18週間後）を実施し、20語の目標語の日本語訳をどの程度覚えているか調査した。事後テストにおいては、目標語の日本語訳を書くことを求めた。その結果、二つの指導法ともに学習効果が認められ、同様に効果的であることが判明した。しかしながら、それぞれの学習法において、覚えにくい単語や忘れやすい単語が存在することも明らかになった。このことから、高等学校の英語の授業で、チャンク学習と単語単独学習をどのように実施すべきかを考察した。以上の内容を、「高校生を対象とした英単語のチャンク学習と単独学習の比較研究」として論文にまとめた。

V. 修了生の論文要旨及び 執筆体験談

学位論文要旨

Summary of Doctoral Thesis

専攻： 共同教科開発学専攻 氏名：内田 智子

論文題目： 幼児期の運動指導が体力・運動能力向上につながる運動プログラムに関する研究

論文要旨：

幼児期の子どもの体力・運動能力に関する時代推移については、1973年以降から近年に至るまで、行動を持続する能力を示す体支持持続時間が大きく低下している。子どもの体力・運動能力低下については幼児期から始まっていることは明らかである。

降園後の子どもたちの遊びは家中心になっていることが指摘されている。また、降園後の時間の使い方については、習い事をしている幼児については半数以上であり、年齢が高くなるにつれて増加している。運動系の習い事では、「スイミング(15.4%)」「体操(体操教室)(10.5%)」「バレエ・リトミック(5.5%)」「サッカー(4.2%)」「音遊び・リズム遊び(3.4%)」「ダンス(1.8%)」「武道・武術(1.6%)」などに参加しており、保護者が習い事によって子どもの体力・運動能力向上を期待しているといえる。

幼稚園における保育時間内の運動指導の実施について、幼児期では運動指導を多く行っている園よりも行っていない園の体力・運動能力が高い。その理由として、1つ目は、保育の一環として行われている活動には体操、水泳、サッカー等の特定の種目が挙げられていることが多く、種目に限定された活動が行われていることによる偏った経験しかしていない可能性がある。2つ目には、画一的な体育指導場面にあるような整列にはじまり、準備運動、説明、順番待ちなどの指導者主体の指導形態がなされている可能性がある。これら従来の報告は、全国的に実施された体力・運動能力測定と各園から得られたアンケート調査によって示されたものであり、実際に一定期間実施された運動指導と自由遊びによって体力・運動能力発達に与える影響を比較された報告はなされていない。

乳幼児期の運動は遊びとしての活動が中心となり、その行為が子ども自身の動機づけによるべきであり、内発的に動機づけられた活動こそが遊びであるとしている。内発的に動機づけられている時の行動に内在する報酬は「自己決定と有能さの認知」であるとしている。幼児期の子どもは、自己決定による運動遊びが成立することによって十分に体力・運動能力が発揮されるといえる。幼児期の運動指導者は子どもの主体的で自己決定による身体活動ができるように遊べる環境づくりを工夫することが重要である。

そこで本研究の目的は、幼児期における課外運動指導における一斉指導型でありながらも子どもの主体性を尊重できる運動指導方法を開発するために、子どもらしい運動遊びのプログラムに注目し、内発的動機づけを重視した多様な課題を経験させる運動指導であれば、指導者が関与しない自由遊びよりも体力・運動能力を高めることができるのかを明らかにすることであった。

各研究の目的は以下の通りであった。

研究[1]は、画一的な運動指導による幼児向けの子どもらしい運動遊びを用いた運動プログラムと運動プログラムはない自由遊びと比較し、体力・運動能力に与える影響を検証した。研究[2]は、一斉指導型による内発的動機づけを意識した指導による子どもらしい運動遊びを用いた運動プログラムを実施し、何も指導しない自由遊びと運動能力を比較し、内発的動機づけを意識した運動プログラムの有効性を検討した。研究[3]は、指導者が関与せず子ども自身が好きな遊びを選択して遊ぶ自由遊びの方が、いかなる運動指導よりも体力・運動能力を高めるのか、それとも、一斉指導型による内発的動機づけを重視した運動指導において多様な課題を経験させる運動指導であれば、指導者が関与しない自由遊びよりも体力・運動能力を高めることができるのか、を検討した。具体的には、多様な

運動課題が提供できるサーキット遊び、ラダーを用いた運動遊びと、指導者が関与しない自由遊びが体力・運動能力に及ぼす影響を比較した。

体力・運動能力テストは、25m 走、立ち幅跳び、テニスボール投げ、両足連続跳び越し、体支持持続時間、捕球、跳び越しくぐり、握力、長座体前屈であった。

これらの研究によって得られた結果は以下の通りであった。

- 1) 画一的な運動指導では何もしていない自由遊び群のとの差はなく、体力・運動能力の発達を促進させていない。
- 2) 内発的動機づけを意識した指導では、体支持持続時間 1 種目のみではあるが、体力・運動能力を促進させることが示唆された。
- 3) 内発的動機づけを意識した指導におけるサーキット遊び及びラダーを用いた運動遊びは、25m 走において自由遊び群よりもラダー群およびサーキット群の方が早く走れるようになった。
- 4) 内発的動機づけを意識した指導におけるサーキット遊び及びラダーを用いた運動遊びは、立ち幅跳びにおいて、自由遊び群よりもラダー群及びサーキット群の方が遠くに跳ぶようになった。
- 5) 内発的動機づけを意識した指導におけるサーキット遊び及びラダーを用いた運動遊びは、捕球においてサーキット群よりもラダー群の方が多く捕球できるようになった。
- 6) 内発的動機づけを意識した指導におけるサーキット遊び及びラダー遊びは、跳び越しくぐりにおいて、男児では自由遊び群よりもラダー群の方が速くなったが、女児ではサーキット群よりも自由遊び群とラダー群の方が速くなった。

本研究では、一斉指導型の課外運動クラブにおいて、画一的な運動指導であり、子どもの運動遊びを用いた運動プログラムでは、従来の報告と同様に自由遊びと体力・運動能力の発達に差がみられなかった。しかし、一斉指導型でありながら子どもの運動遊びを用いた運動プログラムを実施し、内発的動機づけを意識した運動指導にでは、体支持持続時間 1 種目のみではあるが、体力・運動能力の発達を促進させた。さらに、一斉指導型でありながら運動コントロール能力を高めるための運動遊びを中心に運動プログラムを設定し、内発的な動機づけを意識した運動指導において、25m 走、立ち幅跳び、跳び越しくぐりといった「体を移動する動き」と、捕球の「用具を操作する動き」に発達を促進させた。

幼児期の子どもの運動指導において、自由遊びではない一斉指導型であったとしても、スポーツ種目ではなく子どもの運動遊び種目を用いた運動プログラムを実施しても、内発的動機づけを意識した指導であれば、体力・運動能力を高めることが可能であることが明らかになった。また、幼児期の運動能力の臨界期を考慮し運動プログラムを検討するならば調整力を高める運動遊びを多く含めるべきであることが示唆された。今後は、調整力向上につながる運動遊びの内容や質、量について検討することが今後の課題である。

博士論文執筆体験談

(内田 智子 学籍：愛知教育大学)

1. 博士論文のテーマ

博士論文のテーマは「幼児期の運動指導が体力・運動能力向上につながる運動プログラムに関する研究」です。幼児を対象とした運動やスポーツに関する習い事をさせることは、保護者が子どもの健康づくりや体力・運動能力の向上を期待しているといえます。しかし、全国で実施された体力・運動能力測定とアンケート調査において、運動指導は幼児の体力・運動能力を高められていないことが複数報告されてきました。

幼児期における課外運動指導における一斉指導型でありながらも子どもの主体性を尊重できる運動指導方法を開発するために、子どもらしい運動遊びのプログラムに注目し、内発的動機づけを重視した多様な課題を経験させる運動指導であれば、指導者が関与しない自由遊びよりも体力・運動能力を高めることができるのかを明らかにすることでした。

2. データ収集・分析について

本研究は、幼稚園における課外運動クラブにおける実際の運動指導において指導方法や条件設定し、3つの研究で構成しました。研究1として、画一的な指導方法と自由に遊ばせる方法との体力・運動能力の比較、研究2では画一的でありながら内発的動機づけを意識した指導方法と自由に遊ばせる方法との体力・運動能力の比較、研究3としては内発的動機づけを意識した指導方法でありながらラダーを用いた遊び、いろんな動作を含んだサーキット遊び、自由に遊ばせる方法との3条件の体力・運動能力の比較を行いました。

事前に園長に対し研究目的、指導計画案、データ収集の方法などを説明し、承諾を得ました。対象の子どもたちには、研究による保育の質を低下させることがないように十分配慮し運動指導を実施しました。

3. 今後について

博士論文を受理していただきましたが、今回の研究では幼児期の子どもを対象にした研究であることから、トレーニング実験として試行条件を厳密に設定し実施することは不可能でした。しかし、本研究では幼児の運動指導においても、一部の体力・運動能力を向上させることが明らかにすることができました。実践的な運動指導場面において指導方法の条件や運動プログラム設定をする研究方法は、体力・運動能力向上への影響について一部明らかにすることができましたが、子どもの体力・運動能力を高める運動プログラムづくりを検討するためには、研究を継続することが必要であると考えています。

最後に、博士論文執筆に際しては、暖かいご指導くださいました多くの先生方に感謝申し上げます。また、事務手続きでは教務課の方々には大変お世話になり、有難うございました。

学位論文要旨

Summary of Doctoral Thesis

専攻： 共同教科開発学専攻 氏名： 大島 光代

論文題目： 発達障害幼児の音韻意識及び語彙の獲得を目的とした言語指導プログラム開発に関する研究

論文要旨：

本研究の目的は、「就学後に必要となる『読み』の力の基礎となる年長児の文字認知、音韻意識及び語彙の獲得状況を把握した上で、保育園や幼稚園等の幼児教育施設の言語環境が音韻意識・語彙の獲得にどのような影響を与えるかを踏まえて、発達性読み書き障害を含む就学前の発達障害幼児への指導・支援のための言語指導プログラムを開発し、その有効性を確認すること」である。この言語指導プログラムの活用によって、日本語の発達性読み書き障害幼児の効果的な指導・支援方法の確立に向けた知見につなげる。プログラム開発における目的としては、海外で有効性が確認された発達性読み書き障害児向けの言語指導プログラムのコンセプトに基づき、聴覚障害児教育の幼児向け言語指導における日本語の音韻意識の指導スキルを融合すること、日本に現存する音韻意識の獲得から言語指導を行うプログラムの長所を活用し、音韻の視覚化教材を新たに制作し、著者が開発した聴覚障害児向けの言語指導プログラムをベースに改編を行うこととする。

第1章では、これまで国内外で報告されている発達性読み書き障害に関する研究を、歴史や定義、その要因から測定、指導方法、幼児への介入などの点から整理し、特にわが国の幼児教育施設の3法令（幼稚園教育要領・保育所保育指針・幼保連携型認定こども園教育・保育要領）の改訂における早期支援の位置づけ、さらにLDの困難性（読み書き障害）にかかる文字の位置づけを障害予防の視点から分析した。これらの分析より、①日本では幼小接続期にある年長児の「読み」の力につながる基礎的な力である音韻意識の獲得及び語彙の獲得状況の概観をつかむ基礎研究が少ないこと、②幼児の音韻意識の獲得や語彙の獲得は、保育環境のうちの保育者の言葉がけや言語環境によって差異が生じると思われるが、日本における言語にかかわる保育環境の研究も少ないこと、③発達性読み書き障害研究においては、早期介入に関する研究も十分には行われておらず、就学前の幼児向けの指導・支援方法の研究は数少ないという課題を挙げた。

第2章では、第1章の①を解決するために、幼児の音韻意識及び語彙の獲得、文字認知に関する基礎研究を行った。具体的には、音韻意識及び語彙の獲得状況を把握する為、日本語の音韻のほとんどを網羅した絵カード教材184枚を作成し、この教材を活用して、「清音」「濁音・半濁音」「撥音」「促音」「拗音」「拗長音」別に、障害児と健常児の音韻意識及び語彙の獲得状況の比較を行った。また、第1章の②を解決するために、調査対象のクラスごとに音韻意識及び語彙の獲得状況を比較し、保育者の言葉がけや言語環境との関連性を分析した。さらに標準化された言語力テストを用いて「読み」の力につながる基礎的な力の獲得状況（語の理解・図形の弁別・音節の分解・音節の抽出・文字認知・文の理解）調査により、認知能力が低くないにもかかわらず音韻意識の獲得や文字認知がすすまない幼児の存在を確認した。発達性読み書き障害を疑う幼児である。

第3章では、第1章の③を解決するために、幼児への早期介入プログラムの開発に関する予備的な研究を行った。ここでは、第1章の海外の先行研究で有効性が高いとされた Hatcher(2006)の The Reading with Phonology Program(R+P プログラム)「読みの指導と音韻意識の指導 (R+P)」のコンセプトには、日本の聴覚障害児教育のスキルと共通するものがあること、日本に現存する音韻意識の獲得から指導する言語指導プログラムには、それぞれ独自の音韻の視覚化教材が存在することを明らかにし、この2つの知見を基に聴覚障害児教育のスキルを融合し、新たな視覚化教材「音韻シート」をプログラムに組み込み、幼児向け言語指導プログラムを制作した。

第4章では、言語力テストにより判明した発達性読み書き障害が疑われる幼児3名に対し、言語指導プログラムを試用し効果を検証するための実践的な研究を行った。その結果、遊びを通じた音韻分解課題や、文字提示や文字活用、文字と発音を結び付ける「音韻一視覚の対連合学習」により文字認知が促進されることが明らかとなった。聴覚障害児教育の指導スキルである発音誘導・発音指導が、音韻意識の獲得にも有効であった。幼児3名は、指導前には文を読み内容を理解することが困難な状況から、指導後には文を読み内容を理解することが可能な状況に至ったことから、発達障害幼児向け言語指導プログラムが、症状が異なる発達性読み書き障害幼児の音韻意識の獲得や文字認知を促進することを確認した。

今後は、本研究により得られた知見を活かし、日本語の発達性読み書き障害幼児の効果的な指導・支援方法を確立するとともに、「言葉領域のアプローチカリキュラム」に発達性読み書き障害幼児を含めた「読み」につながる基礎的な力の育成の方法を組み込む研究に発展させたいと考える。

VI. 教員の教育・研究活動

石川 恭

所属 愛知教育大学教育学部保健体育講座
職位・学位 教授 博士（教育学）
博士課程分野 教育環境学
担当科目 教科開発学原論、遊び文化環境論、教科開発学セミナーⅠ・Ⅱ・Ⅲ
研究テーマ 遊び文化論、教育社会論、余暇教育論



1. これまでの教育研究について

愛知教育大学に着任して以来、オランダ社会の近代化とヨハン・ホイジンガの遊び文化論の関係について研究してきました。特に、オランダ社会の近代化が、どのように人々の社会生活に影響を与え、変化をもたらしたかについて具体的に明らかにしてきました。研究の中で一貫している視点は、社会生活における遊びの要素です。近代化が進むにつれて、社会生活における遊びの要素や内容はどのように変化したのか、それがホイジンガの遊び文化論形成にどのような影響を与えたのかを追求してきました。

教育面では、生涯スポーツ論、体育社会学などの授業を通して、人生100年時代の自由時間の過ごし方について、遊びと文化、余暇と生きがいといった観点から講義・演習を行ってきました。

2. 博士課程における教育研究について

博士課程においては、教育環境学と教科学を統合した教科開発学の視点から研究を行っています。具体的には、遊びをキーワードに、遊びと文化の融合や、現代社会における子どもの問題を、遊びによって解決する可能性を探ること、教科への伝承遊びの導入とその効果についてなど、理論的に構築し、その後、調査などを行い立証していく予定です。

3. 担当講義について

【教科開発学原論】

教育環境学と教科学を統合した学問として構築する背景と目的について理解を深めます。教育環境学は、学校環境だけでなく、地域・社会・文化を含んだ幅広い視点からの教育環境の発展を目指すものです。本講義では、子どもの遊びという視点から社会化との関わりについて説明しています。その上で、教科学への応用がどのような観点で可能かについて議論を行います。また、遊びと文化を機軸にして、特に、創造系と人文社会系の教科の現状と課題を捉えなおし、新たな教科観の開発・創造への可能性について検討します。

【遊び文化環境論】

現代社会における子どもの遊びは、昔と比べてかなり変化しています。この状況は、遊びそのものの変化に留まらず、様々な影響を子どもに与えています。講義では、現代に生きる子どもの問題を遊びとの関わりから考察します。また、遊びによって身につく社会を生き抜く力が、教育とどのような関わりをもつかについて、議論を交わします。その上で、遊びがもつ可能性について、グローバルな視点から文化の創造との関わりを考えます。

4. 主要な研究業績（2011.4～）

- 1) 教科学を創る，第2集，愛知教育大学出版会，2016，分担執筆.
- 2) 教科学を創る，第1集，愛知教育大学出版会，2014，分担執筆.
- 3) 遊びと文化の融合，愛知教育大学研究報告第62輯，愛知教育大学，2013.3.
- 4) 子どもの問題に対する遊びの効果を取り入れた表現運動，教科開発学論集第1号，愛知教育大学大学院・静岡大学大学院教育学研究科，2013.3.
- 5) 教科開発学を創る，第2集，愛知教育大学出版会，2018，分担執筆

5. 主要な社会活動業績

- 1) スポーツ指導者養成講習会「生涯スポーツ論」安城市（2019.8）
- 2) 愛知教育大学公開講座講師「生きがいと余暇の活用」豊明市（2015.12）
- 3) スポーツ指導員養成講座「スポーツと生きがい」小牧市（2017.2）

倉本 哲男

所属 愛知教育大学 教職大学院
職位・学位 教授・博士（教育学）
博士課程分野 教育環境学
博士課程担当科目 教育経営臨床論研究・教科開発学セミナーⅠ・Ⅱ・Ⅲ
研究テーマ 教師教育学（Action Research/EdD）
アメリカ教育学（Curriculum Management/Service-Learning）
教育方法・経営学（Knowledge Management/Lesson Study）



1. これまでの教育・研究について

これまでの研究活動は、博士論文の刊行書「アメリカにおけるカリキュラムマネジメントの研究 - Service-Learningの視点から - pp.1-345, 2008年」に集約されている（日本教育経営学会・学会賞）。本著は、USAのカリキュラムマネジメント論を研究対象、及びService-Learningを分析視点に設定し、その一断面を論じた。また、教育活動では、前任校（佐賀大学工学研究科/社会システム・博士後期課程）において、以下の博士学位・取得者の主指導教員の役割を担った。

- (1) 千々岩峰子「中学校における学校保健活動のカリキュラムマネジメントに関する研究 - 養護教諭の保健室経営機能に焦点をあてて -」2014年。
- (2) Bruce W. Lander, (2015) The influence of Blended Learning technology on contemporary society.

2. 博士課程における教育・研究について

現在（ポストD論）は、海外から評価される我が国の教育実践を念頭に置き、我が国の学校マネジメント、及び教師実践を「輸出する」研究スタイルを重視している。以上に鑑み、英文出版（和文補論）で業績化（愛教大SS）した。

Tetsuo Kuramoto & Associates, Lesson Study and Curriculum Management in Japan, -Focusing on Action Research- Fukuro Publisher, pp.1-221, 2014.

3. 担当講義について

(1) 実践軸：

帰納的指導と演繹的指導があるが、帰納的指導とは、実践者のこれまでの振り返りに同伴し、その意味付けを理論的に確立する指導である。一方、演繹的指導とは、一定の理論や幅広い情報を提供し、実践の方針の確立を援助することである。

(2) 学術軸：

先行研究に関する「理論研究」、及び質的・量的な「実証的研究」に対応したい。Action Research/Ed.D.において、教育実践が第一義的であることは必然であるが、同時に高度な学術性・理論性を保証することも重要である。

(3) 国際軸：

我が国の教育実践は、テーマによっては国際的に高い評価を受けている。我が国の教育実践者としての誇り（学的関心）を高め、可能であれば国際学会発表などを経験させ、教育の国際化（輸出的活動）においても視野を広げさせたい。

4. 主要な研究業績（2017.4～）

- (1) 『アメリカにおけるカリキュラムマネジメントの研究 - Service-Learningの視点から -』 pp.1-345, 2018年（第二版）。
- (2) 『教育課程論 - カリキュラムマネジメント -』 大学図書出版 第8・10・12・14・15章（全15章）2018年。
- (3) 「アメリカにおけるEd.D.カリキュラムの研究 - University of HawaiiのEd.D.指導論を事例に」『アメリカ教育研究 29号』 アメリカ教育学会編 pp.29-43, 2019年。
- (4) 基盤C「アクションリサーチからの博士課程Ed.D.カリキュラム・指導方法の開発的研究（2016-2018）」
- (5) 【基調講演 Invitation key speaker】 “International Post Graduate Research Forum (Ed.D.)” @Hong Kong University of Education (2017).
- (6) 【基調講演 Invitation key speaker】 “Teacher Education (Ed.D. & PCK) and Training in Japan, Expert meeting on teacher education” @ Farhangian Teacher Education University, Bahonar teacher education University, The Ministry of Education, Iran (2018).

5. 主要な社会活動業績

- 2016-2017, 文部科学省・大学設置/学校法人審議会大学設置分科会専門委員（設置審・教職大学院部門）
- 日本カリキュラム学会/理事 ○アメリカ教育学会/理事 ○日本学校改善学会/副会長
- World Association for the Lesson Studies (conference committee 2017) ○教育方法学会・教育経営学会/会員

石田 靖彦

所属 愛知教育大学教育学部学校教育講座
職位・学位 准教授 博士（心理学）
博士課程分野 教育環境学分野
担当科目 教育評価実証方法論、学校適応論研究、教科開発学セミナーⅠ・Ⅱ・Ⅲ
研究テーマ 児童生徒の学校への適応過程、学級内の人間関係が児童生徒に及ぼす影響



1. これまでの教育研究について

中学校新入生や大学新入生を対象として、児童生徒が新たな環境である学校に適応していく過程、及びそれに影響する個人差について研究してきました。また学級という環境は、児童生徒にとって学習する空間というだけでなく、1年を同じ児童生徒と生活をともにする生活空間でもあります。このような学級内の人間関係が、児童生徒の規範意識や授業態度、学習意欲などに及ぼす影響についても研究しています。

2. 博士課程における教育研究について

本博士課程では教育評価実証方法論、学校適応論研究ほかを担当しています。専門分野は、教育・社会心理学ですので、特定の教科に直接があるわけではありませんが、学生の皆さんの研究を聞かせていただきながら、教科開発学にどのような貢献ができるかを探っていきたいと思っています。

3. 担当講義について

【教育評価実証方法論（分担）】

この授業では、心理学におけるデータの収集法、相関的研究と実験的研究法、心理測定の必須としての尺度の信頼性と妥当性、因子分析などについて概説します。

【学校適応論研究】

学校への適応について、特に児童生徒の動機づけという観点から概観します。具体的には、「やる気を引き出す教師—学習動機づけの心理学（プロフィ著，中谷訳，金子書房）」を講読し、児童生徒の動機づけに関する理論や関連する要因、教育への応用について理解を深めたいと思います。

4. 主要な研究業績（2015.4～）

- 1) 教育社会心理学に関する研究の動向と展望 教育心理学年報, 58, 47-62. 2019年
- 2) 級友からの受容と教師からの受容に関連する性格特性—小学校と中学校の比較 愛知教育大学教育臨床総合センター紀要, 8, 18-25. 2019年（共著）
- 3) 教職志望の大学生が重視する児童の特徴—大学生の性格特性と児童の性格特性の重視度との関連 愛知教育大学研究報告（教育科学編）, 67, 33-38. 2018年
- 4) 各学校段階におけるスクールカーストの認識とその要因—大学生を対象にした回想法による検討 愛知教育大学教育臨床総合センター紀要, 7, 17-23. 2017年
- 5) 級友との関係が協同的・個別的学習動機づけに及ぼす影響—小学生を対象とした検討 愛知教育大学研究報告（教育科学編）, 66, 85-90. 2017年
- 6) 級友との関係が協同的・個別的学習動機づけに及ぼす影響—親和的な関係と競争的な関係に着目して— 愛知教育大学研究報告（教育科学編）, 65, 109-116. 2016年

5. 主要な社会活動業績（2016.4～）

- 1) 日本学校心理士会愛知支部支部長・中部甲信越地区幹事（2011.9-現在）
- 2) 愛知県教育職員免許法認定講習講師（2017.8, 2019.8）
- 3) 教員免許状更新講習講師「教育の最新事情（必修）」（2016.8, 2018.8, 2019.8）

野 平 慎 二

所属 愛知教育大学教育学部学校教育講座
職位・学位 教授 博士（教育学）
博士課程分野 教育環境学
担当科目 教科開発学原論、教育哲学・思想論研究、教科開発学セミナーⅠ・Ⅱ・Ⅲ
研究テーマ ドイツ教育哲学・教育思想史の研究、物語論的人間形成論、美的人間形成論



1. これまでの教育研究について

ドイツ教育哲学・教育思想史を主たるフィールドとしつつ、異質な他者といかに共存できるのか／共存できる主体を形成できるのか、をテーマとして研究を進めてきました。具体的には、人間形成における「美的なもの／崇高なもの」の意義に関する教育思想史的研究、コミュニケーション倫理学(J.ハーバーマス)に依拠した教育の公共性論や道德教育論などの研究を行ってきました。

2. 博士課程における教育研究について

物語論の知見に依拠しながら、伝統的な人間形成論(Bildungstheorie)と現代の経験的な人間形成研究(Bildungsforschung)をどのように媒介できるのかについて探究しています。特に、アイデンティティ形成や能力形成に還元されない人間形成の様相をいかに描き出せるか、主体と環境との相互作用としての人間形成の過程において、他者や共同体、構想力はどのような機能を果たすのかについて理論的、経験的に検討しています。

3. 担当講義について

【教科開発学原論】

教育哲学・教育思想史の観点から、教科指導と教科開発の考え方、ならびに人間形成にとって環境がもつ意義について検討します。教科を介した指導や、主体と環境との相互作用としての人間形成という考え方が成立した思想史的背景について考察し、同時に学校教育を取り巻く現代的な諸条件も勘案しながら、現代における人間形成のあり方をどのように描き出すことができるのかを探ります。

【教育哲学・思想論研究】

主としてドイツ教育哲学・教育思想史に依拠しながら、教育に対する現代的な考え方の歴史的、社会的な制約を問い直し、教育をめぐる倫理的に公正で公共的な語り方を探究することを目指します。特に近代の二元論的な世界観とそこから導かれる子どもに対する対象操作としての教育観を批判的に捉え直した上で、他者論や物語論の知見を踏まえながら、対象操作的でも弁証法的でもない人間形成の描き方を探ります。

4. 主要な研究業績

- 1) 野平慎二 (2007) 『ハーバーマスと教育』 世織書房.
- 2) Shinji NOBIRA (2016) : Probleme der politischen Bildung im Zeitalter unübersichtlicher Wissenschaft und Technik. In : Gutjahr-Löser, P. / Schulz, D. (Hrsg.) : Der Egoismus unserer Tage. (Theodor Litt Jahrbuch 2016), Leipzig (Leipziger Universitätsverlag), S.123-134.
- 3) 野平慎二 (2018) 「非弁証法的な人間形成形態の再構成の試みーある大学生のバイオグラフィ・インタビューの人間形成論的読解」, 『愛知教育大学研究報告』 67 (1), 9～16頁.
- 4) 野平慎二 (2019) 「共存在と教育的関係 - J.L.ナンシーの共同体論にもとづく検討」, 坂越正樹 (監修) 『教育的関係の解釈学』 東信堂, 113～125頁.

5. 主要な社会活動業績

- 1) 教育哲学会 理事 (2016.9.～現在)
- 2) 教育思想史学会 理事 (2009.10.～現在)
- 3) 一般社団法人 NGOインドネシア教育振興会 理事 (2002.4.～現在)
- 4) 愛知県教育委員会生涯学習課 家庭教育企画委員会 委員長 (2016.4.～現在)

竹川 慎 哉

所属 愛知教育大学教育学部学校教育講座
職位・学位 准教授 博士（教育学）
博士課程分野 教育環境学
担当科目 教科開発学実践論、教育方法・内容論研究
教科開発学セミナーⅠ・Ⅱ・Ⅲ
研究テーマ 教育方法学、教育課程論（特に、カリキュラムの政治学的研究、批判的リテラシー教育、授業づくり）



1. これまでの教育研究について

国内外の授業実践、理論を対象にしながら、学習者が自己と他者、社会との関係を（再）構築していく学びを保障するための授業づくりについて研究しています。特にアメリカ、オーストラリア、カナダで実践されている批判的リテラシー教育に注目しています。批判的＝異なる見方、別の見方を探り出す教授＝学習をどう創り出すかに関心があります。

2. 博士課程における教育研究について

教科内容研究、および教材・発問づくりへのポリティカルな視点の可能性と課題を検討しています。特定のアイデンティティに回収されない共同体への参加としての学びはどのように可能なのか、それを実現するカリキュラムを編成するための基本原理は従来とどのように変わるのか、などについて探っていきたいと思います。

3. 担当講義について

【教科開発学実践論】

教育方法学、教育課程論の観点から、教科内容開発、および教材・発問づくりへの批判的アプローチの理論と実践事例を検討していきます。

【教育方法・内容論研究】

教育実践におけるマクロとミクロのポリティクスを捉える理論枠組みを理解していく。いわゆる「カリキュラム政治学」と呼ばれる研究群およびそれらの思想的基盤を形成している哲学、言語学、社会学の諸理論を取り上げ、検討していく。その上で、授業における政治性の編み直し＝公正・平等な授業構造について、実践記録などをもとに検討を進める。

4. 主要な研究業績

- 1) 木村裕・竹川慎哉編著（2019）『子どもの幸せを実現する学力と学校』学事出版。
- 2) 竹川慎哉（2019）「教育課程とカリキュラム」, 吉田武男監修・根津朋実編著『MINERVAはじめて学ぶ教職10 教育課程』, ミネルヴァ書房。
- 3) 竹川慎哉（2019）「授業研究と教師の力量形成」, 子安潤編『教科と総合の教育方法・技術』, 学文社。
- 4) Shinya Takekawa (2015). Effects of Globalized Assessment on Local Curricular: What Japanese Teachers Face and How They Challenge it. In D. Wyse, L Hayward & J. Pandya (Eds.). *The SAGE Handbook of Curriculum, Pedagogy and Assessment* (pp. 946-964). London: SAGE Publisher.
- 5) 竹川慎哉（2010）『批判的リテラシーの教育—オーストラリア・アメリカにおける現実と課題—』明石書店。

5. 主要な社会活動業績

- 1) 2015-2018 The Curriculum Journal, Editorial Board member
- 2) 2015-2018 中部教育学会 理事
- 3) 2018-2019 日本教育大学協会企画・調査研究委員会「国立大学教員養成の将来像検討グループ～教員免許の国家資格化」ワーキング委員
- 4) 2018- 名古屋市立向陽高校 スーパー・サイエンス・スクール 運営指導委員

野 地 恒 有

所属 愛知教育大学教育学部社会科教育講座
職位・学位 教授 博士（文学）
博士課程分野 人文社会系教科学
博士課程担当科目 文化資源活用論、民俗学教材論研究、セミナーⅠ～Ⅲ
研究テーマ 日本民俗文化論、歴史民俗博物館論



1. これまでの教育・研究について

日本の文化や歴史を民俗学という分野から研究しています。主なテーマは日本の海洋文化論・都市文化論です。具体的には、近代以降に開拓・形成された集落（移住開拓島）の生活体系に関する研究や、金魚、菊、朝顔など都市で形成された観賞用動植物の飼育栽培文化に関する研究を進めています。

2. 博士課程における教育・研究について

教科開発学とは、基礎科学の成果を基軸としてその成果を社会的に還元させるための開発を図る応用科学の一つであり、基礎研究の成果を学校教育へ応用化するための開発を研究対象としてその体系化や理論化をめざすものである、と私は考えています。そして、基礎研究として民俗学の成果をふまえて、学校教育（とくに社会科歴史的分野）の場面に応用化を図るために開発する教材あるいは教材論の領域を「同時代生活誌」という形で提示することをめざしています。同時代生活誌は、現在の地域社会に内在する歴史や伝統を描き出すことにより地域の生活や生活に根ざした文化をとらえ、地域社会の未来を構想する内容構成になるとともに、基礎科学の民俗学研究にもインパクトを与えうるものと考えています（「教科開発学と大学教育の一貫性—民俗学＝同時代生活誌を基軸として—」『教科開発学を創る』2、愛知教育大学出版会〔2018〕参照）。

授業では、民俗学の調査法をふまえた地域の生活に根ざした伝統文化を題材として、教科開発学の構築について考えるとともに、受講者が自立的な研究の進め方や博士論文の書き方について理解を深め、身につけられることを目標としています。

3. 担当講義について

【文化資源活用論】

文化資源としての民俗文化について、文化財行政、教育資源、地域資源（地域活性化や観光の資源など）の観点から講述します。そして、文化資源としての民俗文化の活用をとおして基礎研究（民俗学）の応用・社会的還元について検討します。あわせて、論文の書き方についても講述します。

【民俗学教材論研究】

地域社会の人々の生活の中から問題を見つけ、その人々に関わることにより資料を引き出して考えるという民俗学の立場から民俗調査（民俗誌や博物館展示）をふまえた教材開発論を講述して、「同時代生活誌」という教材の開発・創造を試みます。同時代生活誌の作成をとおして、民俗調査・研究により獲得された高度な一次資料をもとに教材を開発・創造することの重要性の理解を深めることを目標としています。あわせて、自立的な研究法や論文の書き方についても講述します。

4. 主要な研究業績（2017.4～）

- 1) 「小学校社会科と民俗学教材論—高浜市吉浜地区における「同時代生活誌」の試みから—」『教科開発学を創る』1、愛知教育大学出版会（2017.3）
- 2) 「教科開発学と大学教育の一貫性—民俗学＝同時代生活誌を基軸として—」『教科開発学を創る』2、愛知教育大学出版会（2018.3）

5. 主要な社会活動業績

- 1) 愛知教育大学地域連携公開講座や市町村の市民大学講座などの講師：「暮らしの中の民俗学」・「松本清張から見た民俗学—「或る『小倉日記』伝」を題材として—」など
- 2) 岡崎市美術博物館博物資料収集委員会委員（2006～）、名古屋市博物館資料委員会委員（2013～）、鳥取県立博物館協議会委員（2014～）

稲葉 みどり

所属 愛知教育大学教育学部日本語教育講座
職位・学位 特別教授 博士（学術）
博士課程分野 人文社会系教科学
担当科目 教科開発学実践論、言語教育内容論研究
教科開発学セミナーⅠ・Ⅱ・Ⅲ
研究テーマ 言語教育に関する教科開発、外国語教育、言語習得、授業研究



1. これまでの教育研究について

研究テーマは第一言語習得、第二言語習得、外国語教育（日本語教育、英語教育）、異文化理解教育等です。第一言語、第二言語の習得過程で起こる様々な現象について研究から得られた知見を外国語教育に活かそうと考えています。最近では外国語教育の授業研究、外国語教師の認知に関する研究を行っています。教育は、学部では日本語教育学に関連した授業や実習、初等英語科教育、卒論等を担当しています。教職大学院では英語教育（教材分析と授業実践開発等）に関する授業を担当しています。

2. 博士課程における教育研究について

ことばを柱とした研究や教育を創造していきたいと考えています。例えば、高等教育機関における日本語コミュニケーション能力の育成、小中高等学校における効果的な英語教育の方法、省察を通じた教師の成長等です。学位論文では、英語教育、日本語教育、国語教育、特別支援教育、幼児教育、保育等の分野の研究をしている指導生を担当しています。

3. 担当講義について

【教科開発学実践論】

新しい教育を創造開発するには、これまでの教育実践を省察し、問題点や課題を発見し、それと同時に実践を理論化して共有できるようにする必要があります。さらにその理論を指導に生かすための能力も求められます。授業では、高等教育機関での教育実践も射程に入れて、教科開発学における実践上の課題の把握、大学教員としての教育実践力、教員FD等、実践的諸課題を追究します。受講者は各自のこれまでの研究を、教科開発学の視点から構成しなおして発表し、具体的に議論を進めます。

【言語教育内容論研究】

「ことば」はどのような教科を学ぶにも基礎となります。教科を超えて、ことばを理解し、運用する能力を養成できるような教育の創造開発をめざします。さらに、世界に向けて発信力のある言語運用ができる能力や資質の養成を学校教育の中でどのように行うかを研究します。

4. 主要な研究業績

- 1) 稲葉みどり. (2019). 「異文化探求の授業におけるグループ発表を自己評価する－振り返りによる学びの構築をめざして－」『愛知教育大学教職キャリアセンター紀要』4, 69-76. 愛知教育大学教職キャリアセンター (ISSN 2424-0605)
- 2) 稲葉みどり (2019). 「日本語教授法の理解と実践力の育成－模擬授業の観察を通じて実習生が学んだこと－」『教養と教育』19, 1-8. 愛知教育大学共通科目専門委員会 (ISSN 2433-5339)
- 3) 稲葉みどり (2020) 「模擬授業の教育的効果の考察－様々な外国語教授法の実践を通じて－」『教科開発学論集』8, 7-15. 国立大学法人愛知教育大学・国立大学法人静岡大学院教育学研究科共同教科開発学専攻（後期3年博士課程）(42187-7327)

5. 主要な社会活動業績

- 1) 一般社団法人大学女性協会国際奨学委員
- 2) 高校訪問出前授業, AUE日本語指導講習講師
- 3) 愛知教育大学公開講座開講（高校生向け講座, 教員向け講座等）

伊藤 貴 啓

所属 愛知教育大学教育学部地域社会システム講座
職位・学位 教授 博士（理学）
博士課程分野 人文社会科学系教科学
担当科目 地理学教材研究論、文化資源活用論、教科開発学セミナーⅠ・Ⅱ・Ⅲ
研究テーマ 農業地域の自立的発展とその条件、ヨーロッパ国境地域の空間変動、
教員としての実践的指導力育成と地域教材開発（社会科地域学習および防災教育）
教員養成における教科専門と教科教育の架橋に関する研究



1. これまでの教育研究について

地理学担当教員として、農業地理学およびEUの国境地域や農村地域の研究を行ってきました。前者ではイノベーションを視点に農業地域の自立的発展を考え、他方でレジリエントな産地の条件を探っています。後者では主にオランダ国境地帯を対象に越境地域連携の展開と構造のほか、農村地域の持続的発展の方途を探る研究をオランダやルーマニアを対象に進めています。さらに、このような教科専門としての地理学をベースに教員養成段階における教員としての実践的指導力育成の方途を主に社会科と防災教育の分野で探っています。

2. 博士課程における教育研究について

本博士課程では地理学教材研究論ほかを担当しています。研究面では、自らの専門である地理学と社会科教育をフィールドに教科専門と教科教育の架橋に関わる方途を探りながら教科専門のおもしろさを伝えつつ、いかに教員としての実践的指導力を高められるのかを先達に学びながら考えるこの頃です。そのなかで、教員養成段階における教科専門と教科教育の架橋に関わる実践史研究に着手しています。

3. 担当講義について

【文化資源活用論】

文化資源としての地域資源について、そのとらえ方と地域形成・振興との関わりを愛知県におけるフードツーリズム、ルーラルツーリズムに事例を求めて、自然資源・景観・観光・人材育成などの観点から受講者とともに考えて学んでいます。

【地理学教材研究論】

本講義では地理学における野外調査の技法を座学とフィールドでの観察などから理解することで①「地域」を観る目を養い、②社会科の内容である地域社会の事象をフィールドで理解し、その仕組みを解き明かす能力とともに、③それらを構造的に把握して教材を開発する資質能力の育成を目的としています。

4. 研究業績（2017年4月～）

- 1) ルーマニアのカルパチア山村における持続的発展. 矢ヶ崎典隆・菊地俊夫・丸山浩明編『シリーズ地誌トピックス 第2巻 ローカリゼーション-地域へのこだわり』朝倉書店, pp.100~109, 2018年3月
- 2) 愛知県三河地方における小学校社会科副読本の利用状況からみた社会科地域学習の課題. 地理学報告119, pp.83~98, 2017年12月

5. 主要な社会活動業績

- 1) 愛知県防災教育マニュアル作成委員会（委員長）『あいちの防災教育マニュアル』（136p），2017年11月
- 2) 豊田市史（現代部会）編さん執筆委員
- 3) 平成31年度教員免許状更新講習（総合的な学習の時間における国際理解教育）講師（共同開講）
- 4) 平成31年度 日本地理学会小林浩二研究助成審査委員会委員
- 5) 平成31年度 豊川市の未来を拓く教育推進懇談会（会長）
- 6) 安城市，岡崎市，高浜市，知立市，幸田町社会科副読本監修

中野真志

所属 愛知教育大学生生活科教育講座
職位・学位 教授・博士（文学）
博士課程分野 人文社会系教科
担当科目 教科開発学原論、生活科教育内容論研究、教科開発学セミナーⅠ・Ⅱ・Ⅲ
研究テーマ ジョン・デューイの教育論、生活科及び総合的な学習の理論と実践



1. これまでの教育研究について

研究者として、当初、アメリカのカリキュラム理論及び社会科教育について研究していましたが、日本において生活科が誕生して以降、その研究対象を生活科、後に総合的な学習に広げ、カリキュラム理論だけでなく教育方法及び授業論の観点からも生活科、総合的な学習及び社会科の理論と実践について研究してきました。また、これらの研究とともに、ジョン・デューイの教育論、デューイ実験学校のカリキュラム理論と教育実践も研究しています。

2. 博士課程における教育研究について

本博士課程においては、これまでの研究成果に基づき、教科の内容構成のもととなる親学問が存在しない生活科及び総合的な学習を教えるのに必要な資質・能力とは何か、生活科と総合的な学習における体験と活動をどのように單元構想に位置づけ、それらを知識、技能の習得と活用及び態度の育成にどのように関連づけるのか、生活科と総合的な学習における素材とは何かについてカリキュラム理論、教育方法学および授業論の観点から考察すること、その考察を通して教科とは何かについてともに考えたいと思います。

3. 担当講義について

【生活科教育内容論研究】

生活科新設までの経緯、誕生した背景と要因について考察し、親学問をもたない生活科という教科の本質と独自性についての理解を深めます。そのために、まず、生活科の目標と内容、單元構想、年間指導計画の基本的な考え方について検討します。次に、生活科と総合的な学習の源流の一つであるデューイ実験学校のカリキュラム理論と教育実践について考察し、現在の生活科のカリキュラム及び授業実践を批判的に分析し、考察する能力の習得を目指します。

4. 主要な研究業績（2014.3～）

- 1) 『生活科・総合的学習の系譜と展望』三恵社（加藤智との共編著）、2018年10月
- 2) 文部科学省、国立教育政策研究所、教育課程研究センター編著『発達や学びをつなぐスタートカリキュラムースタートカリキュラム導入・実践の手引きー』学事出版、2018年4月（作成協力者・副主査）
- 3) キャサリン・キャンプ・メイヒュー、アンナ・キャンプ・エドワーズ著、小柳正司監訳『デューイ・スクールーシカゴ大学附属実験学校：1896年～1903年ー』あいり出版、2017年（8章、18章、補遺1、補遺2の翻訳）
- 4) 「J.デューイ（John Dewey）のカリキュラム理論と教科観ーデューイ実験学校のカリキュラム理論と相補的な歴史と地理を中心にー」『愛知教育大学研究報告』第66輯（教育科学編）2017年3月、pp.1～8
- 5) 「デューイ実験学校における探究的・協同的学習」『愛知教育大学研究報告』第65輯（教育科学編）2016年3月、pp.1～8
- 6) 『デューイ実験学校における統合的カリキュラム開発の研究』風間書房、2016年2月
- 7) 『改訂版 探究的・協同的な学びをつくるー生活科・総合的学習の理論と実践ー』三恵社（加藤智との共編著）、2015年10月
- 8) 「『総合的な学習の時間』の現代的諸課題への対応」『せいかつ&そうごう』第21号（藤本勇二、永田忠道との共著）2014年3月、pp.44～53

5. 主要な社会活動業績（2019年3月）

- 1) 日本生活科・総合的学習教育学会 常任理事（2002年度～現在）、学会誌編集部長（2017年度～現在）
- 2) 国立教育政策研究所「スタートカリキュラム実践事例集の作成に関する協力者会議」委員（2015年5月～2016年3月）
- 3) 愛知県教育センター10年経験者研修（教科指導研修）小学校生活科 講師（2004年度～現在）
- 4) 社会福祉法人 愛知県社会福祉協議会 福祉読本『ともに生きる』編集委員長（2017年度～現在）

丹 藤 博 文

所属 愛知教育大学教育学部国語教育講座
職位・学位 教授・教育学修士
博士課程分野 人文社会系教科学
博士課程担当科目 文化資源活用論・国語科教育教材論研究
研究テーマ 国語科教育・文学教育・言語論・物語研究（語り分析）



1. これまでの教育・研究について

ソシュールやウィトゲンシュタイン以降の言語論、記号論や構造主義による文学理論をベースとして、あるいは戦後文学教育の理論と歴史をふまえつつ、国語教科書に掲載される文学教材の読みについて研究しています。近年は、物語論（ナラトロジー）・フランスの国語教科書を研究することで、語りを日本の文学教育に導入すべく指導過程を提案し実践的な有効性を検討しています。

2. 博士課程における教育・研究について

高度情報化社会といわれ、子どもたちにもスマホが普及する中で、子どものリテラシーをどう育てていくか、文学的なテキストの果たすべき役割とは何かといったことを明らかにしていきたいと考えています。学校においても、電子黒板やデジタル教科書が導入されようとしています。メディア社会における文学の教育的な意味と役割を追究することが課題です。

3. 担当講義について

【文化資源活用論】

言語論・物語論について概説し、物語分析の手法を紹介します。そのうえで、小・中学校国語教科書に掲載される文学教材を分析し読みを問題としていきます。受講者には、自分で物語分析を行い、レポートとして提出してもらいます。

【国語科教育教材論研究】

20世紀の言語論・文学理論を概説したうえで、言語論的転回の立場から小・中・高校の国語教科書における文学教材・説明文教材の読み直しを図ります。そのうえで、メディア論的転回への道筋を探りたいと考えています。

4. 主要な研究業績（2017.4～）

1) 著書

〈単著〉

『平成26～28年度科学研究費補助金・基盤研究（C）研究成果報告書 国語科の授業における〈語り〉分析の有効性に関する実証的研究 課題番号26381195』（2017）

『ナラティブ・リテラシー—読書行為としての語り—』（溪水社2018）

〈共著〉

愛知教育大学大学院教科開発学専攻編『教科開発学を創る 第1集』（愛知教育大学出版会2017）、『小学校国語科授業研究 第5版』（教育出版2018）、『国語教育指導用語辞典 第4版』（教育出版2018）、日本読書学会編『読書教育の未来』（ひつじ書房2019）、全国大学国語教育学会編『新たな学びを創る 小学校国語科授業研究』（東洋館出版2019）、『あまんきこハンドブック』（三省堂2019）

2) 論文

「連載・語り講座①～⑦」『道標』（Vol.33～39教育出版2016～2019）、「附属学校園ワンダーランド」愛知教育大学教職キャリアセンター 教科教育部門『SCOPEⅢ』（No.9 2019.3）「中学校における〈言語論的転回〉の授業」『愛知教育大学 教職キャリアセンター紀要』（第5号2020.3）、「抵抗のメソッド—主体的読みとは何か—」『国語国文学報』（第78号2020.3）

5. 主要な社会活動業績（2019）

1) 日本文学協会委員、日本読書学会理事・編集委員、全国大学国語教育学会理事・編集委員

2) 国語教科書編集委員（『ひろがる言葉 小学国語1年～6年』教育出版、『伝え合う言葉 中学国語1年～3年』教育出版）

3) 日本教職員組合教育研究全国集会（日本語教育）共同研究者、教研集会愛知大会・岡崎市教育研究大会（国語）共同研究者

4) 愛知教育大学附属名古屋小学校・岡崎小学校・岡崎中学校（国語）共同研究者、附属名古屋中学校校長

5) 第61回愛知国語教育研究会講演、田原市立神戸小学校研究会記念講演

高橋 美由紀

所属 愛知教育大学 外国語教育講座
職位・学位 教授・博士（地域研究）
博士課程分野 人文・社会学系教科学
博士課程担当科目 外国語教育内容論研究、教科開発学原論、教科開発学セミナーⅠ・Ⅱ・Ⅲ
研究テーマ 小・中学校外国語（英語）教育、アジア地域研究（言語教育政策、言語・文化等）



1. これまでの教育・研究について

「日本人の英語」についての研究課題は、商社勤務（三菱商事株式会社）で綿花輸入の業務に携わった時からであった。その後、教育現場で生徒に教える機会があり、日本の英語教育についても課題を持つこととなった。また、大学入試センター研究開発部の客員研究員として、バイリンガルの子も達や帰国子女が、どちらの言語も操れないでいるという現実を知り、子ども達のバイリンガル教育についての研究も行った。そして、シンガポールの子も達が、母語と学校用語が異なる現状を調査し、かれらの言語使用や言語能力の影響について研究を始めた。

二つの大学院で、応用言語学（博士前期・後期課程）、及び、地域研究（博士一貫課程）分野の研究科で、英語教育や言語教育政策などについて、理論と実践、及び、フィールドワークを主軸にした研究を行った。

どちらの大学院でも研究対象は「こどもの言語教育」であり、これらの研究は、「An Approach to the Early English Education in Public Elementary Schools in Japan」「公立小学校における英語教育導入」、及び、「シンガポール華人社会における児童とその母親に見る言語環境の動態の研究」の博士論文に集約される。また、「Issues and Aspects Surrounding English and the English Education of Children in Asian Countries」などのアジア地域の小学校英語関連の発表などは、これらの二つの大学と、客員研究員としてNational University of Singapore の Faculty of Arts and Social Sciences ; Chinese studies での研究成果である。

2002年度に「総合的な学習の時間」が新設され、小学校英語活動が導入される時に、テキスト教材、及び、指導書、歌とチャンツのCDと指導法のビデオなどを作成した。高橋美由紀・山岡多美子（著）（2001）『Sunshine Kids Book 1』、『Sunshine Kids Book 2』（2002）（開隆堂出版）。さらに、2011年度の小学校外国語活動導入に伴い、テキスト教材などを作成した。高橋美由紀（代表著者）（2009）『Hello, Kids! Book 1/2』（開隆堂出版）。どちらの教材も、その後文部科学省で作成された『英語ノート』（開隆堂出版）や『Hi, friends! Book 1/2』（東京書籍）の内容や指導の方法などに類似点が多くみられることから、筆者らと文部科学省の方向性が一致していることが認識できた。

2. 博士課程における教育・研究について

博士課程の外国語教育内容論研究では、外国語教育の言語政策、言語教育、社会言語学などの分野、及び、英語教育（対象は初等教育と中等教育）についての教育・研究を行う。また、Doctor of Education (EdD)を視野にいれて、より実践的な方法による方法論の修得、すなわち、「事例研究」「フィールドワーク」など、及び、教育現場でのつながりを大切にした教育・研究を行う。なお、「外国語教育内容論研究」では、国際共通語である英語の役割と小学校英語教育について、理論と実践の視点から授業を行う。

3. 主要な研究業績

1) 【招待講演】

Миюки Такахаси (2018) “Традиционные символы Японии (цвета, цифры, цветы, животных), суеверия и традиционных обычаев» "The traditional symbols of Japan (colors, numbers, flowers, animals), superstitions and traditional customs". Kazan University in Russia

2) 【論文】

高橋美由紀, 柳善和 (2019) 「オーストラリアの初等・中等教育における外国語教育」『中部地区英語教育学会第48号pp. 213-220

高橋美由紀 (2019) 「シンガポール日本人学校と英語教育」『グローバル経営』425

高橋美由紀, 山内優佳, 柳善和 (2020) 「小学校英語教育における「読むこと」「書くこと」に関する評価」『愛知教育大学研究報告』第69輯pp. 1-8

4) 【出版物】

Anthony RYAN, 高橋美由紀 (2020) 『CLIL in Diverse Contexts次期学習指導要領とCLILを活用した英語の授業づくり』鳴海出版全237頁 「グローバル人材育成のための小学校外国語活動・小学校外国語教育－教科書教材にみられるCLIL」他担当

梶田叡一（編著）、高橋美由紀他 (2019) 『人間性の涵養』金子書房 全198頁「英語学習と人間性の涵養」担当
信田敏宏・加藤剛（編著）、高橋美由紀他 (2019) 『東南アジア文化事典』丸善出版 全794頁「シングリッシュ」担当

5) 【研究発表】

Yamaichi, Y., M. Takahashi & Y. Yanagi (2019) On the Assessment of Reading and Writing in Elementary School English Teaching The seventh Conference on Foreign Language Education and Technology, Waseda University.

岩 山 勉

所属 愛知教育大学教育学部理科教育講座
職位・学位 教授（副学長）・博士（理学）
博士課程分野 自然系教科学
担当科目 科学技術活用論、物理教材論研究、教科開発学セミナーⅠ・Ⅱ・Ⅲ
研究テーマ 物理教材開発・研究、理科におけるものづくり教育、半導体物理学



1. これまでの教育研究について

量子ビーム（イオン・レーザービーム等）を用いた半導体ナノ結晶の作製とその物性評価を中心とした研究を行っている。半導体物質を微細化することにより、固体の物性と著しく異なる半導体ナノ結晶特有な物性の発現が期待される。これは、量子サイズ効果や表面効果などによるものである、現在は、イオンビーム（イオン注入法）、レーザービーム（レーザーアブレーション法）、エキシマUVランプ、近赤外線ランプ、電子線等を用いることにより、微細構造の制御された半導体ナノ結晶、機能性薄膜を作製し、その物性の評価、さらには、その光電子機能デバイスとしての応用の可能性探索を行っている。

2. 博士課程における教育研究について

子どもたちの「理科離れ」が様々な場で叫ばれており、対応が急務となっている。これは、教育現場で「なぜ理科を学ぶ必要があるのか」という素朴な疑問に明確に答えていないことに原因の一端があるものと思われる。現実的には、科学技術の発展とともにブラックボックス化され、専門家以外はその原理を知らず、単にユーザとしてその恩恵を受けるのみの場合が多い。本課程では、これまでの自身の研究を基盤として、先端科学技術の原理をいかに簡素化・モデル化し、教育現場に定着させていけるのかという課題に取り組みたいと考えている。さらに、先端科学技術を活用した教材開発にも取り組みたい。

3. 担当講義について

【科学技術活用論】

初等・中等教育における理科の具体的な内容について、最新の科学研究の成果をふまえ、教科内容における広範な専門的知識の重要性の認識とその理解を深める授業を行う。博士課程における、共通的な科目であり、非専門の方も多く履修することを考慮し、基礎から、専門的知識、先端科学技術を導入し、それを活かしながら、新たな理科（物理）教材を開発する意義や方法、その面白さについて学ぶ。

【物理教材論研究】

身の回りの物理現象や先端科学技術を概説しつつ、教材開発力を養い、その授業での活用法を検討する。特に、学習への動機付けや日常生活との関わりから、理科を学ぶ意義や目的、楽しさを伝える工夫として従来型の理科教材ではなく、先端科学技術を利用した「日常生活」と「理科学習」をつなげる新規の教材開発研究を行い、その有用性を検討する。

4. 主要な研究業績

- 1) 「小学校で理科を教えるための理科ミニマム ～小学校教員を目指す学生と理科の苦手な現職教員のために～」愛知教育大学出版会（2018）.
- 2) 「中学校理科研究（物理分野）」愛知教育大学出版会（2018）.
- 3) 「理数探究（物理分野）」愛知教育大学出版会（2019）.
- 4) 「電気抵抗の視覚的理解が可能な新規教材開発 - 中学校理科・高等学校物理・理数探究における活用 -」教科開発学論集 8, 73-82（2020）.

5. 主要な社会活動業績

- 1) 刈谷市理数大好き推進協議会理事（刈谷市教育委員会）
- 2) 刈谷市立住吉小学校学校評議員
- 3) 愛知教育大学連携公開講座講師「先端科学技術と日常生活の関わり」
- 4) 教員免許状講習講師「小学校理科（電流の働き、電気の利用単元）」

稲毛正彦

所属 愛知教育大学教育学部理科教育講座
職位・学位 教授・理学博士
博士課程分野 自然系教科学
担当科目 科学技術活用論、理科教育内容論研究、教科開発学セミナー
研究テーマ 無機化学、環境科学分野での教科開発



1. これまでの教育研究について

学部および大学院において無機化学担当教員として教育と研究に携わっています。主な研究テーマは金属イオンの関与する電子移動反応、光化学反応や配位子置換反応などの溶液内反応に関する研究です。金属ポルフィリン錯体などの特異な反応性を示す金属錯体を取り上げ、その動的挙動を各種の分光法を利用して明らかにするとともに、高速レーザー分光の手法を駆使して、光励起に伴って生じる不安定化学種の電子構造や反応性の解明をめざして研究を行っています。最近では金属ポルフィリン複合系における光誘起電子移動反応とその応用（光エネルギーの化学的エネルギーへの変換）にも取り組んでいます。

2. 博士課程における教育研究について

本博士課程においては、近年注目されている地球環境問題を念頭におき、自らの専門分野である無機化学の研究を基盤として環境科学を学校教育にいかにか定着させるかという課題に取り組みたいと考えています。地球環境と人類社会の持続可能性への展望の提示が現在の学術界に課せられた大きな課題であり、サステナビリティ学の学校教育への展開という観点から博士課程での教育研究に関わっていきたいと考えています。

3. 担当講義について

【科学技術活用論】

現代文明は最先端の科学的知見に基づいて作り上げられたさまざまな技術に依拠しています。学校教育においてはこのような科学技術を適切に伝授し、その適正な活用に関する理解の増進を図る必要があります。このような観点で、化学の分野における科学技術の活用について解説を行います。

【理科教育内容論研究】

近年、地球環境が悪化の一途を辿っています。学校現場では次世代を担う人材の養成のために、このような地球環境問題への関心を喚起するとともに、問題を正確に理解し、持続可能な社会の構築のための処方箋を考える必要があります。本授業では温室効果や低炭素社会実現を目指した代替エネルギー開発などを題材として、持続可能な社会の構築のための戦略の学校教育への展開を検討します。

4. 主要な研究業績（2017年4月以降）

- 1) Structure Dependence of Intramolecular Electron Transfer Reactions of Simple Dyads of Zinc(II) Porphyrin Complex Bearing a Peripheral Bipyridine Moiety, K. Sakakibara *et al.*, *Dalton Trans.* **2017**, 46, 12645-12654.
- 2) Behavior of Ionic Liquids Around Charged Metal Complexes: Investigation of Homogeneous Electron Transfer Reactions between Metal Complexes in Ionic Liquids, T. Mabe *et al.*, *J. Sol. Chem.* **2018**, 47, 993-1020.
- 3) Detailed Reaction Mechanisms of 4-Pyridylboronic Acid and (N-Methyl)-4-Pyridinium Boronic Acid with D-Sorbitol in Aqueous Solution, D. Kusuyama, *et al.*, *Chemistry Select*, **2019**, 4, 4944-4951.
- 4) Reactivity of Boronic Acids toward Catechols in Aqueous Solution, Y. Suzuki *et al.*, *J. Org. Chem.*, **2020** (*in press*).

5. 主要な社会活動業績

- 1) 愛知教育大学連携公開講座講師「環境科学と日常生活の関わり」
- 2) 名古屋市立向陽高等学校SSH運営指導委員会委員
- 3) 日本化学会東海支部幹事（2018-2019年度）

飯島 康之

所属 愛知教育大学教育学部数学教育講座
職位・学位 教授 教育学修士
博士課程分野 自然系教科学
担当科目 数学教材論研究
研究テーマ 動的幾何ソフトを中核とした教育用ソフト開発・コンテンツ開発・
授業研究、数学教育



1. これまでの教育研究について

数学教育学に関する教育・研究を行っています。中核は、Geometric Constructor (GC) という動的幾何ソフト(作図ツール)です。DOS版(1989-)、Windows版(1996-)、Java版(2000-)、html5版(2010-)を開発しました。附属学校の他さまざまな学校と連携して授業研究を行い、動的幾何ソフトが数学教育に及ぼす影響を、教材研究、カリキュラム研究、授業研究など幅広く、理論的かつ実践的に研究しています。

2. 博士課程における教育研究について

2010年から開発に着手したGC/html5は、いろいろな意味での先進性を研究する中核になっています。html5+JavaScriptで開発することによって、次世代の教育用ソフトのあり方を具現化しています。複数の点を同時に動かせることなど、操作性と数学的活動との対応づけもできます。4人1組での学習の場で利用することによって言語表現の活性化が期待されます。また附属学校・公立学校の実際の授業で検証し、理論的かつ実践的に明らかにすることに取り組んでいます。

3. 担当講義について

【数学教材論研究】

数学教育において、数学的問題解決に対して汎用のソフトを開発・利用することで、その改革を目指すさまざまな研究に注目します。ソフト開発、コンテンツ・教材開発、授業研究、認識論的研究などのさまざまな領域において、それらの研究がどのように行われているのかを文献で明らかにするとともに、GCに関する実際のコンテンツ・教材開発や授業研究に接し、理論的かつ実践的に研究します。今年からはSTEM教育の中での数学のあり方も模索してみたいと思っています。

4. 主要な研究業績 (2015.4~)

Y. Iijima, Ch. 64 Teaching and Learning Mathematics and communication technology in Japan - the case of Geometric Constructor, Bharath Sriraman et al (eds), The First Sourcebook on Asian Research in Mathematics Education : China, Korea, Singapore, Japan, Malaysia, India (International Sourcebooks in Mathematics Education), 1437-1553, 2015

飯島康之, 作図ツールGC/html5の開発—HTML5+JavaScriptによる教育用ソフト開発の可能性—, 科学教育研究vol.39, pp.161-175, 2015

飯島康之, 作図ツールGC/html5を用いた数学的探究における精度・誤差について—インタラクティブな探究に向けて—, 教科開発学論集4, 111-121, 2016

飯島康之, ICTを利用した算数・数学での探究のサイクルについて—完全数などについての探究事例を手がかりに—, イプシロン59, 7-18, 2017

飯島康之, GCを使った「学び合い」の授業のための教材研究の一例—12/6のGC活用研究会(松元実践)に向けて—, イプシロン. 60, p. 7-16, 2018

飯島康之, GCを使った数学的探究における事実と問いのダイナミズム—対応表をもとに進める数学的探究に関するケーススタディを基にして—, イプシロン, 61, 9-24, 2019

小 谷 健 司

所属 愛知教育大学 教育学部 数学教育講座
職位・学位 教授・博士（理学）
博士課程分野 自然系教科学
担当科目 科学技術活用論、数学教育内容論研究、教科開発学セミナーⅠ・Ⅱ・Ⅲ
研究テーマ 数学教材開発、常微分方程式論



1. これまでの教育研究について

私の研究分野は常微分方程式論です。常微分方程式とは微分を含む方程式で、自然科学の研究に大いに役立っています。私は常微分方程式を幾何学的に考える問題に興味を持ち、長年研究を行ってきました。同時に、教育学部の学生たちと身近な事象に現れる数学的な問題についても研究してきました。このことについても、いくつかの結果を残しています。

2. 博士課程における教育研究について

私は長年、身近な事象に現れる私は数学について研究してきました。このことを生かし、学生のみならずと新たな数学教材を作り出したいと思っています。

3. 担当講義について

【科学技術活用論】

数学的な考え方・数学的な問題解決の仕方について、身近な事象に現れる数学を題材として授業したいと思います。内容は受講者の経歴等によって柔軟に変更します。

【数学教育内容論研究】

授業内容の1つめは、数学を教えるうえで知っておくべきことです。例えば、人類は実数を2千年以上のむかしから使ってきました。しかし、その正体について詳しく理解している人は少ないと思います。授業内容の2つめは、身近な事象に現れる数学についてです。内容は受講者の経歴等によって柔軟に変更します。

4. 主要な研究業績

- 1) 高校訪問授業の記録15ゲームを数学的に考える, イプシロン61 (2019), 63-68.
- 2) Relations between two generalized pi's, 愛知教育大学研究報告, 自然科学編68(2019), 1-3. (Luey Sokea氏との共著)
- 3) ビー玉の数学, イプシロン60 (2018), 51-58.

5. 主要な社会活動業績

- 1) 新城市教育委員会「数楽チャレンジ大会」実行委員会 顧問 (2001年～現在)
- 2) 愛知県立刈谷高等学校SSH運営指導委員会委員 (2014年～現在)
- 3) 国際協力事業団 短期専門家 (数学教育) (2001年7月31日～9月8日)
- 4) 国際協力事業団 短期専門家 (数学教育) (1999年3月28日～4月9日)

古田 真司

所属 愛知教育大学教育学部養護教育講座
職位・学位 教授 博士（医学）
博士課程分野 創造系教科学
担当科目 教育評価実証方法論、保健教育内容論研究、教科開発学セミナーⅠ・Ⅱ・Ⅲ
研究テーマ 学校保健、養護教育、保健教育、健康情報リテラシー



1. これまでの教育研究について

これまで公衆衛生学、特に学校保健の分野を中心に研究を行ってきました。この分野におけるテーマは、「不定愁訴を持つ児童・生徒に対する教育保健学的研究」です。不定愁訴とは、器質的異常がないのに症状（頭痛やだるさ、腹痛など）が出現することで、学校の保健室に内科的な訴えで来室する児童・生徒の多くがこれに当てはまります。医学的な異常がなくても症状があるのは事実で、そのことを教員（あるいは養護教諭）や子ども自身が理解する手段として、生理学的指標を用いて、学校での対応方法を検討しています。

2. 博士課程における教育研究について

学校では日常的に、一般教員や養護教諭によって、児童・生徒の健康を守り健康を育んでいくための授業や指導（保健教育や保健指導）が行われていますが、残念ながら、その内容についてはきちんと吟味されていません。医学や保健の分野では、次々と新しい考え方や発見が発表されています。しかし、これらをそのまま鵜呑みにして安易に行動することはとても危険です。保健分野の様々な情報から、何が正しいかあるいは有用かを見分けて、自らの健康行動に結びつける能力を、私は「健康情報リテラシー」と呼んでいますが、学校現場で、子どもたちにこのような能力を身につけさせる方法を研究しています。

3. 担当講義について

【教育評価実証方法論】

学校教育における児童・生徒へのさまざまな指導や教育方法について、その妥当性や効果を科学的に検証することは、教科開発の視点からも非常に大切です。ここでは、学校で行われる保健指導や保健教育に対する評価法をとりあげて、その概要を解説します。

【保健教育内容論研究】

保健教育には、限られた時間数の中で、子どもたちに生涯にわたって自らの健康を守る能力を身につけさせるという目標があります。そのため、まず保健教育が何をめざすべきかの議論を中心に、文献的な検討を行います。これを踏まえて、それぞれの学校にふさわしい保健教育案を作成する方法について検討していきます。

4. 主要な研究業績（2013.4～）

- 1) 保健教育における健康情報リテラシーの重要性に関する検討, 教科開発学論集 第1号. 1-12, 2013年6月
- 2) 児童・生徒の合理的な「判断力」育成をめざして構想する保健教育の教科学, 教科学を創る 第1集（愛知教育大学出版会）125-141, 2013年9月
- 3) 中学生の健康情報リテラシーに関する基礎的検討, 愛教大研究報告63（教）. 65-73, 2014年3月
- 4) 学校全体で取り組む体育・健康に関する指導の長期的影響に関する検証－「はだし教育」を受けた児童の約20年後の調査から－, 教科開発学論集 第2号. 161-169, 2014年3月
- 5) 文献研究の方法－教育現場における研究のために－, 学校保健研究57（1）. 41-45, 2015年4月
- 6) 中学生の保健分野における批判的思考力に関する基礎的検討, 東海学校保健研究39（1）. 45-57, 2015年9月
- 7) 学生の健康情報リテラシーを向上させるためのプログラム開発, 愛教大研究報告66（教）. 55-61, 2017年3月
- 8) 保健教育の評価を目的とした健康情報判断力テストの開発, 教科開発学論集 第5号. 1-11, 2017年3月
- 9) 教科開発学における教育評価の重要性－保健分野の教育評価論からの一考察－, 教科開発学を創る 第1集（愛知教育大学出版会）. 109-123, 2017年3月
- 10) 保健分野の教育実践を「論文」にするための視点－実践から科学的根拠（エビデンス）を抽出するために－, 教科開発学を創る 第2集（愛知教育大学出版会）. 103-116, 2018年3月

5. 主要な社会活動業績

- 1) 知立市・市民公開講座「役に立つ医学・健康情報の集め方」
- 2) 附属名古屋中学校教育研究発表会・学校保健情報交換会・指導助言者

村 越 真

所属 静岡大学大学院教育学領域
職位・学位 教授 博士（心理学）
博士課程分野 教育環境学
担当科目 学校危機管理論研究、教育フィールド調査論、教科開発学セミナーⅠ・Ⅱ
研究テーマ リスク認知、学校の危機管理、リスクマネジメント、空間認知、安全教育



1. 研究ハイライト

- ①不確実性の高い環境の中で、人はどう賢く問題解決をしているのか？
- ②主体的、対話的な安全・防災教育の探求
- ③リスクの高い環境でのリスクマネジメントの知恵

上記3テーマがここ20年間の研究の柱としてきた。①は主として1990年代に研究し、成果としては、(村越、1991、1995；Murakoshi、1990、1994、Murakoshi、1997；村越、2004等)がある。2000年以後は、②③を主たるテーマとして、子どもや教員・指導者がどのように危険を認知しているのか、そこにどのような安全上の課題があるのか(村越、2004、2006、2008)、危険を回避するスキルを育成する上で有効な教育方法はどのようなものかを実践・実験の両面から検討した(2011、2015；村越・小山・河合、2016)。また、自然体験・アウトドアスポーツでの事故の実態、活動者の危険認知や対処能力についての研究も行った(村越、2010、2013、2016；村越ら、2014)。2016年からは、自然環境の中でリスクに気づき対処する認知プロセスの実証研究を進め、高齢者はリスク特定能力が低下することを示唆する結果を得た(村越、2017)。また、過酷な自然環境のリスクに対する知識や実践知の研究を行っている(満下・村越、2019)。国立登山研修所の専門調査委員や講師として、これらの成果を山岳遭難対策協議会、全国の登山団体への啓発活動、教育現場の研修などにも活用してきた。

2. 今後の研究の展開と博士課程における教育研究

最近の主要な研究成果は、①村越真(2017)登山者のリスク特定能力の実態：登山道を対象としたKYT図版による検討。野外教育研究, 21(1), 1-15、②村越真・満下健太(2020)過酷な自然環境でのリスクマネジメントの実践知。認知科学, 27(1), 23-43、③満下健太・村越真(2020)リスクに見出される教育的意義：3相因子分析法による小学校の体育的活動に対するリスク認知と教育的意義の関連の検討。体育学研究, 28(1), p. 13-21. がある。

①では、登山道のKYT図版による登山者のリスクリテラシーの実態を明らかにした。②では、南極観測隊の安全管理隊員への聞き取りから質的研究法によってリスクの特性に応じたマネジメント方略の実践知を明らかにした。③では3相因子分析の手法によって、リスクに教育的意義が見いだされる可能性を定量的に示した。

2019～2021年の南極地域観測において、日本の南極観測で正式に採用される初の人文社会科学的研究「リスク対応の実践知の把握に基づくフィールド安全教育プログラムの開発」の研究代表者を務め、2020年度には観測隊参加予定。幼少期の遊びや児童期の自然体験も「不確実性」という点では南極の過酷さと変わらない。見かけ上の過酷さの違いを超えた挑戦的活動におけるリスクマネジメントの統一的な原理の発見・構築が今後の課題である。これらの成果は、リスク社会と呼ばれる現代におけるパーソナルなリスクマネジメントの理論構築とそれを踏まえた研修プログラムの開発につながる事が期待される。また、教育の世界でリスクマネジメントやリスクコミュニケーションをどのように取り入れていくかといった政策的な視点も視座に入れ、研究を進めている。

村 山 功

所属 静岡大学大学院教育学研究科教育実践高度化専攻
職位・学位 教授 教育学修士
博士課程分野 教育環境学
担当科目 教育プログラム開発論、教育工学論研究
研究テーマ 認知心理学、学習科学



1. これまでの教育研究について

これまで、現行学習指導要領と全国学力・学習状況調査に基づく授業改善について、研究や助言を行ってきました。その成果の一部を『平成30年度調査 全国学力・学習状況調査における中学校理科と教科書の活用』として公表し、また2019年3月3日の教科開発学研究会において「全国学力・学習状況調査に見る中学校理科授業の実態」として発表しました。

それと並行して、次期学習指導要領に対応した授業づくりについても研究や教育を進めており、授業改善につながるような論文を新たに執筆しました。今後も実践的な研究を進めていきます。

2. 博士課程における教育研究について

主指導教員として、院生が博士論文を書くことができるよう、計画的に働きかけていきます。特に、学術誌へ論文を掲載できるよう研究を支援していきます。また、2020年度からは、教育工学論研究のe-learning化に取り組みます。学部や教職大学院の授業データも含めて、learning logの分析も教育工学論研究で扱っていく予定です。いずれ、教科開発学論集でも報告したいと考えています。

3. 担当講義について

【教育プログラム開発論】

博士論文のために教育実践研究を行う必要がある院生に、教育プログラムを開発する際の勘所やノウハウを伝える講義です。扱ってきた内容は、主として教育方法の側面です。実験群・統制群による比較研究が行いにくい教育実践の場での研究方法が中心になります。前半は、(1) 教育プログラムの作成・実施・評価のための手法、(2) 研究のためのデータ収集・分析のための手法を中心に扱いました。後半では実際の博士論文を題材にして、前半で教えてきたことをどのように具体化すれば博士論文となるかを伝えてきました。来年度からは担当科目を交代します。

【教育工学論研究】

教育を再現可能な現象として捉え、工学的にアプローチする方法を紹介します。分野としては、インストラクショナル・デザイン (ID) に相当します。ただし、IDに関する教科書のほとんどは肝心のインストラクションの部分が不十分なため、この部分を学習科学の知見で補完しています。今後は、評価についても力点を置くつもりです。

4. 主要な研究業績 (2016.4～)

- 1) 「附属静岡中学校の研究史と次期学習指導要領 - 共同研究者から見た姿 -」, 村山功, 静岡大学教育学部研究報告 (人文・社会・自然科学編), 68, 155-166, 2018/03.
- 2) 「教員養成スタンダードから見た教育実習 - 静岡大学教育学部附属静岡中学校の場合 -」, 村山功, 静岡大学教育実践総合センター紀要, No.28, 335-341, 2018/02/28.
- 3) 『平成30年度調査 全国学力・学習状況調査における中学校理科と教科書の活用』, 大日本図書, 全48ページ, 2018/12
- 4) 「教育目標・内容, 指導方法, 学習評価の一体化に向けて - 新学習指導要領における『主体性』を中心に -」, 村山功, 静岡大学教育実践総合センター紀要, No.30, 194-201, 2020/03/31.

5. 主要な社会活動業績

- 1) 文部科学省「全国的な学力調査に関する専門家会議」委員
- 2) 静岡県学力向上推進協議会長
- 3) 公益社団法人全国学校図書館協議会理事

吉田 和人

所属 静岡大学大学院教育学領域
職位・学位 教授・博士（スポーツ健康科学）
博士課程分野 教育環境学
担当科目 身体運動指導論研究
研究テーマ スポーツバイオメカニクス、スポーツコーチング、
パフォーマンスアナリシス、運動発達



1. これまでの教育研究について

「身体運動における優れた技能」「身体運動の効果的な指導・援助」「子どもの運動発達」などをテーマに研究を行っています。また、卓球選手の競技力向上や卓球競技の世界的な発展に資することを目的として、卓球の競技研究を国内外の研究者との共同で行っています。さらに、就学前の子どもの健やかな発達を支えることを目的として、静岡大学教育学部附属幼稚園での実践研究などにも関わっています。

2. 博士課程における教育研究について

身体運動科学分野の研究（主に、自然科学的手法を用いたもの）の考え方や分析手続きについて、教育環境学や教科開発学に生かしていくことが重要であると考えています。

3. 担当講義について

【身体運動指導論研究】

身体運動の優れた指導実践を調査し、それぞれの特徴や課題を考察します。さらに、身体運動の指導に関する研究などから、それらの知見を援用する様々な方法の現状と課題についての理解を深めます。これらを通して、身体運動の効果的な指導に資する研究の視点や方法論を考察します。

4. 主要な研究業績（2018年～）

- 1) Table Tennis Match Analysis: A Review, Journal of Sports Sciences, 2018, 36-23, pp.2653-2662, Michael Fuchs, Ruizhi Liu, Ivan Malagoli Lanzoni, Goran Munivrana, Gunter Straub, Sho Tamaki, Kazuto Yoshida, Hui Zhang, Martin Lames
- 2) 幼児期の健康・運動発達を考慮した教材および環境に関する検討：異なる投てき物を投げた時の評価の分析を中心に、静岡大学教育学部研究報告教科教育学篇, 2018, 49, pp.105-114, 富田梨花, 吉田和人
- 3) 体育授業における映像の即時フィードバック効果に関する研究, 佐賀大学教育実践研究, 2018, 36, pp.63-68, 八嶋文雄, 井上伸一, 吉田和人
- 4) 卓球においてサービスがラリーに与える影響の定量化, 名桜大学総合研究, 2018, 27, pp.27-33, 玉城将, 吉田和人
- 5) 異なる打撃局面における一流卓球競技者のフォアハンドトップスピンストロークの特徴：初速度の大きな打球を生み出すインパクト, バイオメカニクス研究, 2019, 22-4, pp.152-166, 城所収二, 稲葉優希, 吉田和人, 山田耕司, 尾崎宏樹
- 6) 一流卓球競技者の肩と腰の可動性が身体移動を伴う場面におけるフォアハンドトップスピンストロークに与える影響, 体育学研究, 2019, 64-1, pp.169-185, 城所収二, 稲葉優希, 吉田和人, 山田耕司, 尾崎宏樹
- 7) 「自チームの選手および相手チームの選手の特徴の理解」『球技のコーチング学』, 2019, 大修館書店, 日本コーチング学会編, pp.222-231, 吉田和人
- 8) 卓球の競技力向上のための科学サポート, 生体の科学, 2020, 71-3, pp.216-220, 稲葉優希, 城所収二, 松本実, 尾崎宏樹, 山田耕司, 吉田和人
- 9) Influence of playing style on the occurrence of missed shots in table tennis, International Journal of Racket Sports Science, 2020, 2(1), pp.32-41, Tamaki, S., Yoshida, K.

5. 主要な社会活動業績

- 1) 2020～現在 公益財団法人日本卓球協会理事
- 2) 2016～2020 公益財団法人日本卓球協会参事
- 3) 2019～現在 Editorial Board Member of International Journal of Racket Sports Science
- 4) 2017～現在 公益財団法人日本卓球協会スポーツ医・科学委員会委員長
- 5) 2013～現在 国際卓球連盟スポーツ医科学委員会委員（2013～17：Deputy Chair）
- 6) 1993～現在 公益財団法人日本オリンピック委員会強化スタッフ

鎌塚 優子

所属 静岡大学教育学部養護教育専攻
職位・学位 教授・博士（教育学）
博士課程分野 創造系教科学
担当科目 教科開発学実践論、養護実践教育学研究、教科開発学セミナーⅠ・Ⅱ・Ⅲ
研究テーマ 学校保健学、養護実践教育学、健康相談・健康相談活動



1. これまでの教育研究について

23年間の養護教諭としての教育実践を基盤とし、主に養護教諭でなければ得られない独自の視点について「心の問題への気づき」という観点で探究してきました。世界に類をみない教育職である養護教諭の専門性とは何かを近接研究分野・領域と連携、協働し、かつさまざまな研究方法を模索することで、より創造的、発展的な研究結果を導き出していくことを重視しています。

2. 博士課程における教育研究について

本博士課程では、学校保健、養護教諭の教育実践研究について、未だ発展途上にある養護教諭に関わる学問構築に寄与する研究を行いたいと思います。養護教諭の専門性とは何か、養護とは何かについて、歴史的背景を踏まえ、現在の養護実践、今後予測される養護実践のあり方について探求していきます。また学校保健の視点から子供たちのさまざまな心身の健康課題解決のために、実践的観点を理論から考察し、今後の学校保健のあり方について考えて行きたいと思います。

3. 担当講義について

【養護実践教育学】

養護の歴史や制度、養護の捉え方・養護教諭の実践、養護に関する近接領域の研究などに関する研究成果や文献をもとに、養護の目的・機能・方法についての文献を分析し議論を通じて理論構築を図ります。また養護実践、養護教育のあり方や方向性、学問構築について討議し、更に、養護教育のあり方と現職養護教諭の研修課題についてについて分析し考察します。

4. 主な研究業績（2019.4.～）

- 1) 中学生における健康課題解決の行動変容に影響を及ぼす要因の検討—内省力に注目して—, 山崎友子, 鎌塚優子, 谷健二, 東海学校保健研究, 43 (1), 151-160, 2019
- 2) がん教育における養護教諭の役割に関する研究, 鈴江毅, 鎌塚優子, 矢野潔子, 谷健二, 東海学校保健研究, 43(1), 91-102, 2019
- 3) ケースメソッドによる道徳教育実践を指揮した一校長に関する研究—リーダーの内面に形成されゆく教育実践基盤をナラティブから取り出す試み, 竹内伸一, 鎌塚優子, 中村美智太郎, 静岡大学教育学部研究報告（教科教育学篇）第51号, 67-82, 2019
- 4) セクシュアルマイノリティ児童生徒へのスクールカウンセラーによる支援の現状と課題—肯定的カウンセリングの自己効力感に注目して—井出智博, 玉井紀子, 鎌塚優子, 山元薫, 松尾由希子, 細川知子, 静岡大学教育学部研究報告（人文・社会・自然科学篇）, 70, 79-93, 2020
- 5) 学びの継続性を意識した小学校・中学校における保健教育に関する研究—学習内容の印象に関する実態調査を手がかりとして—深澤多恵, 鎌塚優子, 静岡大学教育実践総合センター紀要, 272-279, 2020
- 6) 学級担任と養護教諭の連携・協働のための学び—新しい教員養成カリキュラム・授業実践の取組み—, 梅澤収, 鎌塚優子, 静岡大学教育実践総合センター紀要, 18-27, 2020
- 7) 実習指導を行う養護教諭のための「養護実習サポートガイド」の作成と評価, 齋藤千景, 竹鼻ゆかり, 三森寧子, 鎌塚優子, 鹿野裕美, 埼玉大学紀要教育学部, 69 (1) 65-75, 2020
- 8) 養護教諭における性的マイノリティ児童生徒への対応の自信に関わる要因の検討—小学校, 中学校, 高等学校の比較—鎌塚優子, 玉井紀子, 井出智博, 松尾由希子, 山元薫, 細川知子, 日本健康相談活動学会誌, 15(1), 41-51, 2020
- 9) 技能系教科における「思考・判断・表現」の評価方法の研究—体育実践を事例として—, 新保淳, 山崎朱音, 鎌塚優子, 教科開発学論集, 愛知教育大学大学院・静岡大学大学院教育学研究科共同教科開発学専攻, 8, 153-157, 2020

5. 主な社会的活動業績

- 1) 日本養護教諭養成大学協議会 理事（2018年度～現在）
- 2) 日本健康相談活動学会 理事（2018年度～現在）・日本健康相談活動学会編集委員会委員（2004年度～現在）
日本健康相談活動学会第16回学術集会 学会長（2020年2月）
- 3) 日本学校保健学会 評議員（2019年度～現在）
- 4) 東海学校保健学会 理事・評議員（2013～現在）

香 野 毅

所属 静岡大学教育学部特別支援教育専攻
職位・学位 教授 博士（心理）
博士課程分野 教育環境学担当科目
研究テーマ 特別支援教育 心理支援 動作法 子育て支援



1. これまでの教育研究について

特別支援教育専攻の教員として、障害をはじめとする支援ニーズのある人への支援教育について、主として心理学の立場から取り組んできました。障害種別としては、肢体不自由、知的障害、ASDをはじめとする発達障害、いわゆる情緒障害などが対象となりますが、障害種に特化した支援というよりも、生活や心理面の支援を前面に出すことで、あらゆる人を対象にできると考えています。支援の窓口としては「身体」や「動作」を得意としています。また家族支援や地域との連携などについて実践的な研究を進めてきました。

大学では、学部では肢体不自由児の心理や教育を中心に、大学院では発達障害児の理解と対応を中心に授業を行っています。

2. 博士課程における教育研究について

障害をはじめとする支援ニーズのある人への支援教育について、エビデンスのある方法の開発に取り組んでいきたいと考えています。加えて、それを支える仕組みや制度、人的環境といった面からも、学校や支援の場をいかに機能させていくかについて考えてみたいと考えます。

3. 担当講義について

【教科開発学原論】

障害のある児者への支援について、アセスメントから実践、評価につながるサイクルについて、これまでの知見等を紹介しながら、一緒に考えていきたいと予定しています。

【特別支援教育研究】

障害のある人への指導支援の種々の方法や技法について深めていくとともに、その背景や構成等について理解を深めていきます。また学校や家庭といった関係機関がいかに機能していくのかについても考えてみたいと思います。

4. 主要な研究業績 (2018, 2019)

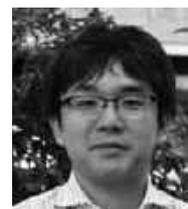
- 1) 「肢体不自由のある児童生徒における日常生活行為の自立度と諸能力との関係」特殊教育学研究 2010年9月 第48巻3号 pp.201-210
- 2) 「家庭での動作法への取り組みの実態とトレーナーやスーパーバイザーの役割について」リハビリテーション心理学研究 2012年10月 第39巻1号 pp.69-75 座光寺卓・香野 毅
- 3) 「緊張が高い子どもへの理解とアプローチ」発達教育 2014年5月 Vol.33 No.5 pp.4-11
- 4) 「発達障害のある子どもの姿勢と動き」教育と医学 2015年3月 No.741 pp.58-64
- 5) 「肢体不自由者の持つニーズの年齢段階による変化 - 保護者への質問紙と聞き取りによる調査から -」特殊教育学研究 第54巻2号 2016年7月 pp.77-86
- 6) 「学齢児を持つ保護者の相談ニーズに関する調査研究」静岡大学教育学部附属教育実践総合センター 紀要 2017年3月 第26号 pp.1-7 香野 毅・大石啓文・田代 篤・坂間多加志

5. 主要な社会活動業績

- 1) 県内特別支援学校等 学校評議員 複数
- 2) NPO法人しずおか福祉の街づくり 理事
- 3) 小中高等学校, 特別支援学校, 幼保こども園 等研修講師 多数

塩田 真吾

所属 静岡大学大学院教育学領域
職位・学位 准教授・博士（学術）
博士課程分野 教育環境学
担当科目 教育プログラム開発論、情報教育学研究
研究テーマ 教育工学、情報教育



1. これまでの教育研究について

主に情報教育の中のICT活用やプログラミング、情報モラル、情報セキュリティなどの教育内容・教材論、教育方法について、実践的に研究を進めています。特に、情報モラルの分野では、どうすれば自分のこととして考えられるかという「自覚」をテーマに研究しています。

2. 博士課程における教育研究について

情報教育をはじめとする現代的教育課題について、教科を超えた横断的な視点から研究を進めています。博士課程では、情報教育に関して教育環境学的な背景に基づいて指導することが可能です。

3. 担当講義について

「教育プログラム開発論」では、インストラクショナル・デザインについて扱い、博士論文で行う実験授業の効果的・効率的な実施について検討します。

「情報教育学研究」では、ICT教育、情報モラル教育の学習内容構造、教育方法について包括的な理解を図るとともに、授業開発及び評価の方法論について扱います。

4. 主な研究業績（2018年4月～）

- ・塩田真吾・高瀬和也・酒井郷平・小林溪太・藪内祥司（2018）「当事者意識を促す中学生向け情報セキュリティ教材の開発と評価－『あやしさ』を判断させるカード教材の開発－」, コンピュータ利用教育学会「コンピュータ & エデュケーション」Vol.44, pp.85-90
- ・高瀬和也・酒井郷平・塩田真吾（2018）「ヒューマンエラー対策手法を用いた個人情報漏洩を防ぐ教員研修教材の開発と評価－学校における情報セキュリティリスクに対する自覚意識の向上を目指して－」, コンピュータ利用教育学会「コンピュータ & エデュケーション」Vol.45, pp.115-120
- ・酒井郷平・塩田真吾著（2018）『行動改善を目指した情報モラル教育－ネット依存傾向の予防・改善－』静岡学術出版
- ・酒井郷平・塩田真吾（2019）「中学生を対象としたLINEでのコミュニケーションにおけるリスク評価の分析」, 日本教育工学会論文誌43巻（Suppl.）, pp.153-156
- ・Kazuya Takase, Taichi Yasunaga, and Shingo Shiota（2020）"Development of Thinking Tools to Foster Creative Problem Solving Skills: A Trial in Programming Education," International Journal of Information and Education Technology, Vol.10, No.6, pp.471-475
- ・塩田真吾・橋爪美咲・香野毅編著（2020）『特別な支援を要する子どものためのネット・スキル・トレーニング－子どもの情報モラルを育むために－』静岡学術出版

5. 主な社会的活動（現在）

- ・文部科学省「青少年を取り巻く有害環境対策の推進」技術審査委員会技術審査専門員
- ・文部科学省委託「情報モラル教育推進事業」検討委員会 副座長
- ・静岡県中山間地域の小規模校におけるICT活用推進事業検討会議 委員
- ・静岡市遠隔教育システム導入実証研究事業 委員 など

黒川 みどり

所属 静岡大学教育学部社会科教育講座
職位・学位 教授 博士（文学）
博士課程分野 人文社会系教科学
担当科目 歴史教材論 教科開発学原論 教科開発学セミナーⅠ・Ⅱ・Ⅲ
研究テーマ 日本近現代史、思想史、歴史教育、マイノリティ、アジア認識



1. これまでの教育研究について

静岡大学では、日本近現代史、教科内容指導論、日本文化論、人権教育論などの授業を担当してきました。日本近現代史、思想史を専門としています。大正デモクラシー研究から出発し、民本主義から出発し無産政党的の指導者となった大山郁夫の思想、第一次世界大戦後の国民統合政策、さらには部落問題をレイシズムの枠組みのなかで捉え返す試みや、近現代の差別の諸相を描きだす研究などを行ってきました。近年は、丸山眞男や竹内好を中心にすえて戦後思想史、知識人論に向きあう一方、歴史教育のあり方についても研究を進めています。

2. 博士課程における教育研究について

本博士課程においては、人権論、思想史について検討を進めています。また、高校日本史の教科書執筆などをおして考えてきた、義務教育・後期中等教育から教員養成大学における歴史教育の問題などを考えていきたいと思っています。

3. 担当講義について

【歴史教材論】

歴史教育、社会科教育のありようを見据えながら、歴史の理解のために有用な歴史教材を提供できるように、歴史学の方法論についての理解を深め、歴史学の基礎的な力を身につけることをめざしていきます。当面は、受講者の関心をも鑑みながら、中学・高校の歴史教科書などの検討を行い、議論を深めていきたいと考えています。

4. 主要な研究業績 (2011.4～)

- 1) 『描かれた被差別部落—映画の中の自画像と他者像』, 岩波書店, 2011年4月.
- 2) 赤澤史朗・北河賢三・黒川みどり編『戦後知識人と民衆観』, 影書房, 2014年5月.
- 3) 「教員養成の立場から歴史教育を問う」, 『歴史評論』第774号, 2014年10月.
- 4) 黒川みどり・藤野豊『差別の日本近現代史』, 岩波書店, 2015年3月.
- 5) 『創られた「人種」—部落差別と人種主義 (レイシズム)』, 有志舎, 2016年3月.
- 6) 寺木伸明・黒川みどり『入門被差別部落の歴史』, 解放出版社, 2016年5月.
- 7) 「丸山眞男における「開かれた社会」—竹内好との対話をとおして」, 『思想』2017年3月.
- 8) 黒川みどり・山田智『竹内好とその時代—歴史学からの対話』, 有志舎, 2018年3月
- 9) 教科書 高校日本史A 高校日本史B (実教出版) (共著)
- 10) 黒川みどり・山田智『評伝 竹内好—その生涯と思想—』, 有志舎, 2020年2月

5. 主要な社会活動業績

- 1) 東京大学日独共同大学院シンポジウム「市民社会とマイノリティ」基調講演 (2014年3月14日)
- 2) グローバルエデュケーションセンター「早稲田学」公開講義「大山郁夫と早稲田大学」(2017年10月23日) 於: 早稲田大学
- 3) 韓国東北アジア歴史財団 第2回歴史和解のための日韓フォーラム (招待) (2018年12月16日)

白 畑 知 彦

所属 静岡大学教育学研究科共同教科開発学専攻
職位・学位 教授 博士（文学）
博士課程分野 人文・社会学系教科学
担当科目 外国語教育論研究、教育プレゼンテーション論、教科開発学セミナーI・II・III
研究テーマ 言語理論・言語習得理論に基づく外国語教育学の研究



1. これまでの教育研究について

大学院生の頃より、ずっと第二言語習得の研究をしてきました。第二言語習得には次のような特色があります：(a) 母語からの転移がある（そして、上級者になってもしつこく残るものと、そうでないものがある）、(b) 教室で教科書を使用しながら学習する場合であっても、体系的に習得が進んでいく（一方で個人差も生じる）、(c) 特に成人学習者の場合、習得が不完全な状態で停滞してしまう場合が多い。このような現象は私にとってとても不思議で興味深い現象であり、理論的に説明したいと考えています。第二言語としての日本語習得研究にも興味があります。その他、習得研究成果の外国語教育への応用、外国語としての英語教授法、外国語学習論、児童英語教育論、外国語学習評価論、英語教育課程論などの領域にも興味を持って研究してきました。

2. 博士課程における教育研究について

基本的にはこれまでの研究の方向性と変わりませんが、「外国語教育学における教科開発学とは？」というテーマを常に念頭に置きながら、学生を指導し、自らも研究をおこなっていきたくて考えています。

3. 担当講義について

【教育プレゼンテーション論】

本講義は小南先生と二人で担当している科目です。学会発表でのプレゼンテーション技術だけではなく、教室での授業の工夫、人前で話をする際の態度や心構え、準備の仕方など考察していきます。

【外国語教育論研究】

ある教え方が「良い」と主張する場合、その教え方の何が良いのか、本当に効果があるのか、単にユニークな教え方に過ぎず効果は望めないのか、きちんと調べないといけません。そのためにも言語習得理論をしっかりと学習していきたくてものです。

4. 主な研究業績（2019年度）

- (1) 「日本語母語話者による短距離whプロープの習得－ミニマリスト・カートグラフィック・アプローチに基づく－」『第二言語習得研究モノグラフシリーズ』第3巻（白畑知彦・須田孝司編），pp. 69-104. 東京：くろしお出版 横田秀樹・白畑知彦・須田孝司（共著）. 2019年6月15日
- (2) 『第3版 英語教育用語辞典』白畑知彦・富田祐一・村野井仁・若林茂則（共著）378頁. 東京：大修館書店 2019年9月10日
- (3) 「日本語母語話者による英語非対格動詞の過剰受動化現象に関する考察」『第二言語習得研究モノグラフシリーズ』第4巻（白畑知彦・須田孝司編），pp31-55. 東京：くろしお出版 白畑知彦・近藤隆子・小川睦美・須田孝司・横田秀樹・大瀧綾乃. 2020年3月30日
- (4) The acquisition of Wh-questions by Japanese learners of English: Focusing on subject Wh-questions. 2018 International Conference on Bilingual learning and Teaching (ICBLT): E-proceedings, 153-157. The Open University of Hong Kong. June, 2019
- (5) 「書く力・話す力を伸ばす効果的なフィードバック Part 1 Theory 文法項目別効果的な誤り訂正」『英語の先生 応援マガジン』Autumn 2019（第40号），pp2-7. 2019年9月10日. 東京：アルク
- (6) Optimizing Second Language Vocabulary Learning with English Word Tests. *Studies in Subject Development*, Vol. 8, pp. 29-38. Kodama, K. & Shirahata, T. March 31, 2020
- (7) Effects of explicit instruction on intransitive and transitive verbs in L2 English: with a special focus on non-instructed verbs. *ARELE (Annual Review of English Language Education)*. Vol. 31, pp.81-96. Kondo, T., Shirahata, T., Suda, K., Ogawa, M. & Yokota, H. 2020年3月31日

坂口京子

所属 静岡大学教育学部国語教育講座
職位・学位 教授・博士（教育学）
博士課程分野 人文社会系教科学
担当科目 国語教育論研究、教科開発学実践論
研究テーマ 国語教育史、言語教育論、国語科授業研究、国語科教師教育



1. これまでの教育研究について

専門は国語教育史研究です。特に戦後新教育期における経験主義教育の摂取と実践的理解の過程に着目し、カリキュラムや授業構想について研究してきました。現在の国語・国語科教育に関する教材、指導法、カリキュラム開発に関する研究や、国語科教師教育研究にも取り組んでいます。ここ数年は、言語力や思考力（中でも選択力）の育成を視点として、国語教科書や先進の実践の調査・分析を行なっています。

2. 博士課程における教育研究について

以上に述べた教育研究を継続し、現在あるいは今後の国語教育実践を相対化し得る視点を歴史研究から学びつつ、それを常に再構築していくことに取り組んでいきます。また、教育の現実を真摯に捉えようとする際、自ずと見えてくる新しい研究領域と研究方法を追究していきたいと考えています。

3. 担当講義について

【国語教育論研究】

国語・国語科教育について、教育課程・教育内容・教育方法の3点とその関連をどう図っていくかを軸に考察していきます。わが国の戦後国語教育史を概観した上で、現在の実践例を取り上げてその価値を考察します。受講者の関心も鑑みながら、教育実践の複合性とそのデザインについて論じます。

【教科開発学原論】

担当者のこれまでの研究について教科開発学の立場から再考し、それをもとに具体的な議論を進めます。教育の現実の捉え、研究領域と研究方法の妥当性、論構築の論理性について論議しつつ、教科開発学の内実と方法を追究します。

4. 主要な研究業績（2017～）

- 1) 公益財団法人教科書研究センター「授業における教科書の使い方に関する調査研究委員会」（プレ研究：2018～2019年度）国語部会委員
- 2) 「教師の選書を視点とした読書指導の改善」『早稲田大学国語教育研究』38号，早稲田大学国語教育学会，2019.3
- 3) 「自分の居場所を見つける-ある中学生をめぐる実践記録から」『キャリアデザインのための自己表現-過去・現在・未来を結ぶバイオグラフィ』細川英雄・太田裕子編著，東京図書，2017.9
- 4) 『物語文教材研究のヒント-国語の授業作りで悩むあなたへ-』編著，静岡学術出版，2017.2

5. 主要な社会活動業績

- 1) 駿東地区国語部研修推進委員会及び授業研修会講師（2019.10）
- 2) 裾野市教育委員会指定研究発表会講師：裾野市立富岡第二小学校「関わり合いの中で主体的に学ぶ子～学びをたのしむ～」（2019.11）
- 3) 駿東郡長泉町立長泉小学校校内研修講師（2019）
- 4) 浜松市教育研究会（国語科研究部）講演「『言葉の力』を育てる魅力的な国語の授業の創造-新学習指導要領をふまえて-」（2018.8）
- 5) 沼津教育振興会国語科小学校部主任者会「国語科におけるカリキュラム・マネジメント」（2017.2）

小 南 陽 亮

所属 静岡大学教育学部
職位・学位 教授 理学博士
博士課程分野 自然系教科学
担当科目 生物教育内容論研究、教科開発学実践論、教科開発学セミナー
研究テーマ 身近な自然を活用した生物教材と教育内容の発展



1. これまでの教育研究について

生物多様性の劣化は、気候変動と同様に、深刻な地球環境問題として国際的に認識されています。日本においても、生物多様性条約に基づいて、政府は生物多様性国家戦略、自治体は生物多様性地域戦略を策定し、その保全に取り組んでいます。その中で、生物多様性の意味、生物多様性を保全する理由についての教育が不可欠となり、生物多様性にふれる行動、生物多様性を守る行動、生物多様性を伝える行動を体感することが重要となっています。そのためには、理科などの各教科における環境教育を充実させ、児童生徒が生物多様性を含む環境を深く理解した上で環境を守る主体的な行動がとれるようになることが必要です。このようなことを背景として、長年にわたって続けてきた森林生態や生物間相互作用に関する基礎科学的な研究を活かし、生物多様性について学ぶことができる新たな教材の開発と教育内容の発展に資することを目的とした研究を行っています。

2. 博士課程における教育研究について

生物多様性の内容を効果的に教育するための新たな教材や指導法を開発する研究のフィールドとして、生物多様性の学習に適した環境のひとつである里山を選びました。この研究では、学校教育において生物多様性を学習するための教材として里山の生物や環境がどのように利用可能であるかを解明し、里山を利用した生物多様性教育の教材を開発することを目指しています。これまでの研究では、次のようなことを明らかにしてきました。

- 1) 里山において簡易な樹木センサスが作業量や方法の点では学校教育で実施可能なものであり、得られたデータを生徒自身が解析することで、生物多様性とは何か、生物多様性はなぜ劣化しているのか、生物多様性はなぜ保全する必要があるのかを学習することができることを示しました。
- 2) 学校教育で観察の対象となってきた生物は植物と昆虫がほとんどでしたが、身近な環境に多様な種が生息しているという点では、鳥類も観察したい生物です。そこで、鳥類を確実に観察する方法として、秋冬季に校庭の樹木につく果実を採食する鳥類を観察することを検証し、中学校・高校の探究活動で観察できる可能性が高いことを示しました。また、その観察によって、生態系における相互作用網の一端を知ることができ、生物同士のむすびつきを学習するきっかけになりうることを提言しました。

3. 主要な研究業績と活動 (2019.4～)

- 1) 中等教育における緑地の樹木を対象とした探求活動のモデル – 静岡大学教育学部附属浜松中学校の「天神森」における事例 –. 教育実践総合センター研究紀要, 30 : 89-96 (2020.3)
- 2) Do Coarser Gap Mosaics in Conifer Plantations Induce More Seed Dispersal by Birds? Temporal Changes during 12 Years after Gap Creation. forests 10: 165-175 (2019.10)
- 3) 静岡北中学校インセンティブ・レクチャー「木の分布から森の過去と未来を推定する」(2019.9)

熊倉啓之

所属 静岡大学教育学部数学教育講座
職位・学位 教授 理学修士
博士課程分野 自然系教科学
担当科目 数学教育論研究 教科開発学原論
研究テーマ 教材開発論, 小・中・高接続カリキュラム論



1. これまでの教育研究について

静岡大学に着任して以来、算数・数学科教育法等担当教員として、数学教育に関する教材、指導法、カリキュラムの開発に関する研究を行っています。これまでに、数学を学ぶ意義を実感させる指導法、数学的思考力・表現力を育成するための教材開発、小・中・高の接続カリキュラム、フィンランドと日本の数学教育との国際比較について、研究を深めています。また、最近では、長年にわたって教育課題とされている「割合の活用力」に関する研究を行っています。

2. 博士課程における教育研究について

本博士課程においては、これまでの教育研究で行ってきたことを基盤としながら、さらに、指導の対象である「数学」の本質や歴史を踏まえた上で、近年注目されている数学的リテラシーについて考察を加え、数学的リテラシーを育成するための指導の在り方についても追究していきたいと考えています。

3. 担当講義について

【数学教育論研究】

本授業では、算数・数学科の指導内容について、1) 小・中・高の算数・数学科のカリキュラム、2) 数学的な思考力・表現力の育成に焦点を当てた教材・指導法、3) 数学を学ぶ意義を実感させる教材・指導法、の3点を中心に分析・考察します。

4. 主要な研究業績 (2018.4～)

- 1) 「第4章 数学的活動に基づく学習指導の設計 第3節 数学的活動に基づく高校数学の授業設計」岩崎秀樹・溝口達也編著『新しい数学教育の理論と実践』ミネルヴァ書房, 2019.3, pp.62-94.
- 2) 「中学生・高校生の割合の理解に関する調査研究」静岡大学教育実践総合センター紀要, No.29, 2019.3, pp.80-89, 熊倉啓之・國宗進・松元新一郎.
- 3) 「チェバ・メネラウスの定理に関する教材開発-n角形への拡張」静岡大学教育実践総合センター紀要, No.29, 2019.3, pp.90-99, 四之宮佳彦・熊倉啓之.
- 4) 「空間図形の理解に関する調査研究-小・中学生の見取図の理解に関して-」奈良教育大学紀要, 第68巻第1号(人文・社会), 2019.11, pp.147-156. 近藤裕・熊倉啓之・國宗進・藤田太郎.
- 5) 「中学校・高等学校における割合指導に関する研究」静岡大学教育実践総合センター紀要, No.30, pp.49-58, 2020.3, 熊倉啓之・國宗進・松元新一郎・早川健・近藤裕.
- 6) 「正弦定理・余弦定理・面積公式に関する教材開発-n角形への拡張-」静岡大学教育実践総合センター紀要, No.30, 2020.3, pp.79-88, 四之宮佳彦・熊倉啓之.

5. 主要な社会活動業績 (2018.4～)

- 1) 和歌山県高等学校数学教育研究会講師 (2018.6)
- 2) 第72回九州算数・数学教育研究(佐賀)大会高等学校部会講演会講師 (2018.7)
- 3) 日本数学教育学会第100回全国算数・数学教育研究(東京)大会講習会講師 (2018.8)
- 4) 大分県立竹田高等学校平成30年度高校活性化支援事業に係る授業研究会指導助言 (2018.11)
- 5) 熊本県高等学校教育研究会数学部会春季講演会講師 (2019.6)
- 6) 第101回全国算数数学教育研究(沖縄)大会高等学校部会講演会講師 (2019.8)
- 7) 石川県教員総合研修センター研修講座・教科指導リーダー養成研修講師 (2019.9)
- 8) 茨城県高等学校教育研究会数学部研修会講師 (2019.11)

郡 司 賀 透

所属 静岡大学大学院教育学領域
職位・学位 准教授・博士（教育学）
博士課程分野 自然系教科学
担当科目 教科開発学原論 理科教育論研究
研究テーマ 理科カリキュラム基礎論 理科カリキュラム史研究
理科カリキュラムにおける工業に関する教育内容・教材論



1. これまでの教育研究について

私がこれまで携わってきた研究の一つは、戦後日本の高等学校化学教科書における化学工業教材です。関連して二つ目は、主として1950年代における日本の経済成長と教育の関係を、理科教育内容・教材論の水準で研究を進めておりその特質を明らかにしようとしています。三つ目が科学的探究及びエンジニアリングデザインプロセスを活用した理科授業・教材研究になります。

2. 博士課程における教育研究について

教科開発学の視点から、専門領域である「理科」を基盤にしつつも、領域の枠に拘泥することなく、児童・生徒をとりまく環境を絶えず意識しながら、現代の学校教育に諸問題に対応する研究を進めています。理科の特定の教育内容・教材の歴史の変遷について、教育環境学的な背景に基づいて指導することが可能です。

3. 担当講義について

「教科開発学原論」では、①理科が基礎を置く自然科学の本質、②日本の理科教育の歴史と現状の理解を通じた理科教育の意義、③理科教育における探究の過程とエンジニアリングデザインプロセスの意義理解を目指します。

「理科教育論研究」では、教科開発学の核心をなす理科カリキュラム開発について、理科の目的論・目標論、理科の学習内容構造、子どもの自然理解の実態、理科教授論及び、科学と社会との関連について包括的な理解を図るとともに、理科における教科開発力の育成を目指します。

4. 主な研究業績（2016年4月～）

- ・郡司賀透 「初等理科教科書におけるSTEM教材の取り扱いに関する研究」 『教科書フォーラム』 2016年10月 17号 pp.2-14
- ・郡司賀透 「理科教科書分析の現代的展開」 大高泉 『理科教育基礎論研究』 協同出版 2017年6月 pp.68-80
- ・伊藤哲章・郡司賀透 「幼児の生命現象認識と小学校生活科教材への示唆」 『静岡大学教育実践総合センター紀要』 2018年3月 27号 pp.83-90
- ・郡司賀透 「初等理科カリキュラム構成とその動向」 大高泉・吉田武男 『初等理科教育』 ミネルヴァ書房 2018年7月 pp.31-38
- ・郡司賀透 『理科教育における工業的教材の意義と変遷』 風間書房 2019年2月 252頁

5. 主な社会的活動（現在）

日本理科教育学会（評議員）、日本エネルギー環境教育学会（編集委員）等々

新 保 淳

所属 静岡大学大学院教育学領域保健体育系列
職位・学位 教授 博士（教育学）
博士課程分野 創造系教科学
担当科目 体育教育論研究、教科開発学セミナー
研究テーマ 身体教育論、授業研究論、体育哲学



1. これまでの教育研究について

静岡大学に着任以来、体育学担当教員として、中でも身体教育に関連する問題領域において、哲学的及び社会学的視点から研究を行ってきました。具体的には、我々の身体を取り巻く自然・社会環境の変化が、身体教育のプロセスにある子どもにとってどのような影響があるのか。またそうした現状を受けて学校体育では、どのような理念のもとにどのような実践していくべきかについて、いくつかの視点の提示を試みました。最近では、これまでに明らかにした「理論知」を実践に生かすための授業カリキュラムの開発とその評価方法の創造に向けて、そのための新たな方法論を探求しつつ持続的に研究を行っています。

2. 博士課程における教育研究について

共同教科開発学専攻にかかわりながら、また本専攻におけるカリキュラム内容の作成を行ってきたという立場から「教科開発学とは？」を問うとともに、この博士課程の「独自性」の探究に取り組んできました。結論から言えば、“これが「教科開発学」だ”とは、未だ確信をもって言い切ることができません。ただ私一人の思い込み以上に、本専攻の構成員全体が集う「教科開発学セミナー」Ⅰ～Ⅲにおける学生の発表内容とそれに対する教員からの質疑応答を通して、あるいは、博士論文の審査等を通して、「教科開発学」について、そしてまたこの博士課程の「独自性」について、さらに探求を深める必要があると思います。そのためにも、本専攻メンバーである教員と学生の風通しをさらに良くしていく必要があるでしょう。一方で私自身も、本専攻のイメージを固めたり壊したりしつつ、今後の博士課程のさらなる発展に向けて、教育研究ともに関わっていきたいと考えています。

3. 担当講義について

【体育教育論研究】

「体育科」における不易を求めることによって、これまでの「体育科」の問題点を明らかにするとともに、今後の方向性について講義および討論を行っています。また、“21世紀における教育および保健体育科像”についても、現状の問題点と現代的課題の克服を目指して、「持続可能な発展」等々をキーワードにしつつ議論を深めたいと考えています。方法論的には、スポーツ科学における「理論」とそれらの体育「実践」への応用における問題点について検討を行うことから、「理論」と「実践」とがどのような原理的課題を孕んでいるのかについて理解を深めたいと考えています。

4. 主要な研究業績 (2019.3～)

- 1) 「学び」の自己展開力に関する評価方法の研究 2 – 評価方法の他種目への応用の可能性 – , 静岡大学教育実践センター紀要, 平成31年3月, 第28号, pp.93-106
(共著: 山崎朱音, 新保 淳)
- 2) 保健体育科における「思考力・判断力・表現力」の評価方法の研究 – 創作ダンス授業を事例として – , 静岡大学教育実践センター紀要, 令和2年3月, 第29号, pp.93-106
(共著: 山崎朱音, 新保 淳, 柳 伶奈, 石貝孝洋)
- 3) 技能系教科における「思考・判断・表現」の評価方法の研究: 体育実践を事例として 教科開発学論集, 令和2年3月, 第8号, pp.153-157
(共著: 新保 淳, 山崎朱音, 鎌塚優子)
- 4) ESDの視点からみた体ほぐし運動の可能性, 体育科教育, 令和2年5月号

松 永 泰 弘

所属 静岡大学教育学部
職位・学位 教授 博士（工学）
博士課程分野 創造系教科学
担当科目 技術教育内容論 教科開発学セミナー I
研究テーマ 動くおもちゃ・科学技術ものづくり教材・数学的活動教材開発



1. これまでの教育研究について

科学技術ものづくり教材の中でも、機械領域の教材開発を行う。おもな教材として、形状記憶合金エンジン・スターリングエンジン・蒸気エンジンカー、受動歩行模型、機械式振子・天賦時計、Automata・Marionetteを4つの柱とし、ひもを移動する模型、回転模型、レーザー加工による組立式模型などの教材を開発。動作原理を探究しながら、新しい道具に挑戦し、ものづくりに熱中する子どもたちの姿、家族や友達に動作原理を説明しながら製作したものを自慢する子どもたちの姿、ものづくりの継続により、困難に立ち向かう子どもたちの姿が出現するような不思議や驚きを伴う教材開発。

2. 博士課程における教育研究について

学習集団における多様性の統一Unity in Diversityについて取り組む。子どもたちの意味世界に刺激を与え、想像・感情・知識が絡み合い、発達を促し、WET/SETに基づく動くおもちゃものづくり教材の開発を行う。授業実践を通して、教材の特徴、子どもの変容を明らかにする。動くおもちゃGiftsの選定とものづくり教材としての開発を行う。年齢に適した教材・道具の使用、喪失体験児童に及ぼす影響について検討する。現実事象と数学的抽象化を往還する数学的活動教材の開発を行う。

3. 担当講義について

【技術教育内容論】

最先端の科学技術が作り上げられてきた基礎となる技術、特に機械工学分野の技術に学びながら、ものづくり教材の特徴、教材として用いた授業実践の評価について議論する。

4. 主要な研究業績

- ・古田このみ・松永泰弘：組み立て式オートマタの開発，静岡大学教育実践総合センター紀要，No.30，pp.157-164（2020）
- ・K. Furuta, Y. MATSUNAGA, : Development of the Quadrupedal Passive Walking Paper Toy Separated with the Upper and Lower Bodies, Inter-Academia2019, 2-4 Dec 2019
- ・Y. MATSUNAGA : Development of Marionettes Stimulating Children's Semantic World: Teaching Practice Framed by Waves/Showers-of-Emotion Theory, The 13th ICTE, 16-18 Jan 2019
- ・Y. MATSUNAGA, K. Furuta : Development of the Quadrupedal Passive Walking Paper Toy Separated to Upper and Lower Bodies as a Teaching Material, The 13th ICTE, 16-18 Jan 2019
- ・T. YAMADA, Y. MATSUNAGA : Exploratory Design Learning Using Quadrupedal Passive Walking Paper Robot in Elementary School, The 13th ICTE, 16-18 Jan 2019
- ・松永泰弘・古田このみ：紙製4足受動歩行模型を用いた大学生ものづくり探究活動，日本産業技術教育学会，第61巻，第1号，pp.35-42（2019）
- ・古田このみ・松永泰弘：紙製4足受動歩行模型を用いた授業提案とものづくり探究活動の実践，教科開発学論集，第7号，pp.115-124（2019）
- ・松永泰弘：立体を創る数学的活動－現実事象と数学的抽象化を往還する教材 塩山から相貫体・積層体・組木への展開－，第9回教科開発学研究会発表論文集，pp.29-32（2019）
- ・松永泰弘・古田このみ：上肢下肢分離型紙製4足受動歩行模型教材の開発，日本産業技術教育学会，第60巻，第4号，pp.217-223（2018）
- ・松永泰弘・山川裕菜：一足跳び剛体振子模型教材の開発，日本産業技術教育学会誌，第60巻，第3号，pp.135-141（2018）

5. 主要な社会活動業績

- 1) 科学技術高校，浜松工業高校SSH，こどもクリエイティブタウン「ま・あ・る」評価委員
- 2) 科学研究費助成2018-2020，マツダ財団2018-2019，日教弘助成2018

小川 裕子

所属 静岡大学教育学部
職位・学位 教授 博士（工学）
博士課程分野 創造系教科学
担当科目 教科開発学実践論、家政教育内容論研究
教科開発学セミナーⅠ・Ⅱ・Ⅲ
研究テーマ 住生活学習を中心とした教科開発、家庭科教育



1. これまでの教育研究について

静岡大学教育学部において家庭科教育担当教員として、すでに30年になります。この間、前半は出身の専門分野である住居学の研究を継続して「高齢者向け住宅・居住施設の計画に関する基礎的研究」という博士論文をまとめつつ、家庭科教育の教育・研究を進めました。後半では、「高齢者居住」研究を発展させて福祉教育や家庭科教育の研究に繋げようと試みましたが、思うようには進みませんでした。しかし、この間に家庭科教育に関する卒業研究や修士論文に取り組み学生達の興味・関心に寄り添いつつ、また、周囲の家庭科教育研究者との共同研究を進めながら、自らの今後・定年までの教育・研究をどう進めるか考え、2で述べるような課題を設定しました。 *****

2. 現在の教育・研究について

家庭科教育における住生活学習について追究したいと考えています。衣食住と並び称されているにも関わらず、(マイホームを建設したり購入する際を除くと)人々の日常的な住生活への関心は高くないのが今日の我が国の大方の姿です。他方で、住まいは私たちの生活の基盤であり、生活の豊かさを決定する大きな要因の一つですが、住生活学習の実践や研究は、家庭科教育の中でも大変遅れているのが現状です。今後、家庭科における食や衣の教材や授業実践の豊富な蓄積を踏まえつつも、さらに本研究科で学べる学習科学の知見についても積極的に取り入れながら、家庭科の住生活学習を中心とした教育・研究に取り組んでいきたいと考えています。 *****

3. 担当講義について

「教科開発学実践論」(必修)
「家政教育内容論研究」(選択)

4. 主要な研究業績 (2019.3~)

- 1) 室 雅子, 吉本敏子, 星野洋美, 小川裕子, 他3名「生活場面で実践できる力の調査と授業への応用—衣生活について—」椋山女学園大学教育学部紀要, Vol.12, 2019年3月, pp.201-215
- 2) 小川裕子, 吉原崇恵, 吉本敏子, 他4名「生活場面で実践できる力の実態と課題—住生活の学習に関する能力の育成—」, 日本家庭科教育学会第62回大会, 2019年6月, 金城学院大学. 他, 同学会大会にて共同研究者として3報.
- 3) 小川裕子, 高木優子, 飯野由香利, 伊深祥子「高等学校家庭科住生活に関する授業実践研究—ジグソー学習によって自分の住生活を考える授業—」, 2019年度日本家庭科教育学会例会, 2019年12月, 東京学芸大学. 他, 同学会例会にて共同研究者として1報.
- 4) 小川裕子, 他「第I部 2. 社会人調査」の一部, 日本家庭科教育学会編『未来の生活をつくる—家庭科で育む生活リテラシー—』, 2019年6月, 明治図書, p.36, 37, 40, 41
- 5) 小川裕子「4. 調査結果と考察, 4-5住生活」, 科研費報告書(代表・吉本敏子)『生活場面で実践できる力の実態と課題』, 2019年9月, pp.54-67
- 6) 小川裕子, 他6名「生活場面で実践できる力の実態と家庭科教育の課題—住生活の学習との関連—」静岡大学教育学部紀要(教科教育学篇), 資料, 2019年12月

5. 主要な社会活動業績

- 1) 日本家庭科教育学会, 監事
- 2) NPO法人なのはな(幼児教育)理事

伊藤 文彦

所属 静岡大学教育学部
職位・学位 教授 学術修士
博士課程分野 創造系教科学
担当科目 表現・鑑賞論 美術教材論研究 教科開発学セミナーⅠ・Ⅱ・Ⅲ
研究テーマ 美術・デザイン教育方法開発、デザインリテラシー教育論



1. これまでの教育研究について

美術教育の中でもデザイン分野を専門として、デザインの発想法を中心にデザインプロセス全般を対象に研究を行っています。また、創造系の教科の指導者として求められる表現力の研鑽のために、ビジュアルデザインを中心に公的な場面で様々なデザインワークを展開しています。

現代環境において、デザインの領域は多岐に渡っており、コミュニケーション、プロダクト、環境デザイン、イベント・キャンペーン等、現代の私たちの生活とは切り離せない深い関わりをもっています。しかしながらこれまでの美術教育では自己表現や感性などの伝統的な概念を重んじられてきたあまり、美術教育が社会への適合性といった点についてはかならずしも有効な教育になりえていなかったことが問題点としてあげられます。こうした問題意識を背景に、より今日的役割を明確にした横断的な学問としてのデザイン教育を構想するための研究を行っています。

2. 博士課程における教育研究について

本博士課程においては、これまで行ってきたデザインプロセスの構造化およびデザインリテラシー研究を基盤として美術・図画工作科教育の諸問題を明確化し、今後重要度が増してくる表現と鑑賞教育のバランスのとれた芸術教育を学校教育にいかにか定着させるかという課題に取り組みたいと考えています。その際、これまで芸術における感性の問題としてブラックボックス化されてきた部分について、認知科学の知見を援用しながらモデル化することを通して、他の教科との接点を見出しながら、学際的な教科としての美術・デザイン教育を展望するという観点から博士課程での教育研究に関わっていきたくと考えています。

3. 担当講義について

【表現・鑑賞論】

芸術を表現することとそれを鑑賞することは表裏一体の関係であり、常に同時発生的に進行する創造性豊かな思考過程である。この授業では、そういった表現と鑑賞の思考過程を芸術学と認知科学を融合させた学際的な観点で整理し、芸術教育のありかたについて考察するものである。

特に美術・デザインの「リテラシー」について、具体的な作品・製品・イベント等を鑑賞・理解の対象とし、ワークシート作業を含めた実践的な演習も含めながら理解を深める。

【美術教材論研究】

美術・デザイン活動及びその教育について、今日の問題状況や新たな展開について展望する。特に、美術・デザインのもつ特性とその教育の価値について、コミュニケーションやそのリテラシーといった情報概念を軸に考察し、それを応用した教材開発について探求する。

4. 主要な研究業績 (2019.4～)

- 1) 「デザイン思考に基づくアイデア生成手法の学習」, 静岡大学教育学部研究報告, 2019年12月
- 2) 「お茶のまち静岡市」PR用 JR静岡駅バナーデザイン, 静岡市農業政策課, 2019年4月
- 3) 「日本第二言語習得学会第20回年次大会」ポスター等デザイン, J-SLA, 2019年8月
- 4) 「JACET International Convention Kyoto 2020」ポスターデザイン, JACET, 2020年2月
- 5) 「お茶のまち静岡市」タクシーラッピングデザイン (セレナ/ハイエース版), 国土交通省+静岡市タクシー協議会+静岡市茶業振興協議会+静岡市農業政策課, 2020年2月

5. 主要な社会活動業績 (2019.4～)

- 1) 令和元年度静岡県高美工研第1回研修会講演, 静岡市, 2019年5月
- 2) <新卒採用ワークス>特別セミナー「デザイン思考と創造の人材育成」, 静岡市, 2019年11月
- 3) 令和元年度ふじのくに地域・大学コンソーシアムロゴマーク審査委員, 静岡県, 2019年11月

紅 林 秀 治

所属 静岡大学大学院教育学領域 技術教育系列
職位・学位 教授 博士（学校教育学）
博士課程分野 創造系教科学
担当科目 技術教育教材論研究
研究テーマ 技術教育 設計教育 教材開発論



1. これまでの教育研究について

静岡大学に着任して以来、技術科教育法等担当教員として、技術科教育に関する教材、指導法、カリキュラムの開発に関する研究を行っています。これまでに、技術を学ぶ意義を実感させる指導法、設計に関わる思考力やシステム概念の形成過程に関する研究を深めています。

2. 博士課程における教育研究について

本博士課程においては、これまでの教育研究で行ってきたことを基盤としながら、さらに、普通教育としての技術教育の本質や歴史を踏まえた上で、技術リテラシーについて考察します。また、設計力を高めるための指導や教材の在り方についても追究していきたいと考えています。

3. 担当講義について

【技術教育教材論研究】

本講義では、普通教育としての技術教育と専門教育としての技術教育の違いを整理してから、技術教育では欠かすことができない概念である設計について考察します。さらに、設計能力を高めるための教材や教育方法について検討します。検討にあたっては、実際に教材を設計したり製作したりします。

4. 主要な研究業績（2016.4～）

- (1) ものづくりをシステムづくりと捉え直す技術教育の検討, 教科開発学論集 第4号 2016年, pp.143-150
- (2) 設計の学習における最適解を得るまでの思考過程, 科開発学論集 第5号 2017年, pp.87-93, 紅林秀治・村上陽子
- (3) 簡易手指動作分析システムの開発日本産業技術教育学会誌, 第59巻第1号, 2017年, pp.19-28, 青木麟太郎・大村基将・紅林秀治
- (4) 小学校1年生におけるプログラミング授業の実践, 静岡大学教育学部附属教育実践総合センター紀要No.28, 2018年, pp.191-199, 山崎智志・室伏春樹・紅林秀治
- (5) 中学校における計測・制御の学習で身につけさせたい知識と能力（新世代のプログラミング教育特集号）, システム制御情報学会誌62（7）, 2018年, pp.260-265
- (6) 小中学校における普通教育としてのプログラミング教育の展開と課題, 情報処理学会, Vol.60 No.3 通巻648号, 2019年, pp.248-252
- (7) 乗車可能な車輪型倒立振り子教材の開発, 日本産業技術教育学会誌, 第61巻第4号, 2019年, pp.277-286, 山下友也・大村基将・鈴木裕貴・紅林秀治
- (8) 工学設計に基づく中学校技術・家庭科（技術分野）の授業に必要な視点, 教科開発学論集 第7号, 2019年, pp.42-48, 西ヶ谷浩史・紅林秀治
- (9) 簡易手指動作分析システムの教育的活動に関する検討, 教科開発学論集 第8号, 2020年, pp.83-92, 青木麟太郎・紅林秀治

5. 主要な社会活動業績（2015.4～）

- (1) 教育研究会（藤枝市, 焼津市, 島田市, 浜松市）講師
- (2) 静岡県教職員組合 教育研究集会 技術科教育分科会 講師
- (3) 静岡県総合教育センター主催研修 講師
- (4) 掛川市教育情報化推進基本計画策定委員会 委員長

杉山 康 司

所属 静岡大学教育学部保健体育講座
職位・学位 教授 博士（スポーツ健康科学）
博士課程分野 創造系教科学
担当科目 教科開発学原論、体育・課外活動教材論研究
研究テーマ 運動生理学、体力科学、トレーニング科学



1. これまでの教育研究について

保健体育の教科専門である運動生理学をメインに体力科学的、スポーツ科学的な研究を行っています。特に人が行う各種運動およびスポーツについてエネルギー消費量の経済性や骨格筋活動について評価し、その結果を基に運動指導に向けたプログラムや指針について検討しています。対象者は乳幼児から高齢者まで幅広くテーマを持ちながら活動しております。

2. 博士課程における教育研究について

これまで、保健体育の教科としてだけではなく生涯にわたるスポーツ教育に目を向けて研究を行ってきました。特に運動生理学は客観的データの取得を主とした自然科学系の分野であり、学校教育における教科教育のように授業そのものの方法について柔軟に知見を纏め上げていくフィールドとは異なっています。しかし、教科教育の背景には教科専門の知見を欠かすことはできません。博士課程では保健体育の教科専門と教科教育の一体化を目指した教育研究への挑戦が必要であると考えています。

3. 担当講義について

【教科開発学原論】

さまざまな教科で教科専門と教科教育についてどのような連携があるのかなどを模索し、教科開発学専攻での学位の特色と人材育成に向けた討論をしたいと考えています。私の担当する時限では保健体育の授業現場において教師が理解しておかなければならない専門的な研究成果について紹介しながら、他教科との共通点や相違点、他教科の教師も知るべき保健体育の知識（初等、中等教育教員の立場で）について考えてみたいと思います。

【体育・課外活動教材論研究】

教科開発学原論において一部紹介した内容をさらに深めた内容にしたいと思います。運動生理学やスポーツ科学という分野で得られてきた研究成果をいくつかのトピックスに分類し、実際の研究データに触れながら論文抄読し、常に学校教育に応用する立場で討論してみたいと思います。保健体育教科専門の一つである運動生理学分野での実験的手法と今後の創造教科学分野での応用について理解を深めたいと考えています。

4. 主要な研究業績 (2013.4～)

「Relationships between physical fitness and body mass index in 11- and 12- year-old New Zealand and Japanese school children」: 教科開発学論集 2013 1 195-206, [Sugiyama K](#) and Michael J. Hamlin, 保健体育教材としてのポストユアウォーキングの可能性～エキスパートポストユアウォーカーの筋活動およびビギナーが示す運動強度から～」ウォーキング研究, 2016, 20, 21-27, [杉山康司](#) 他, 「Blow Rifle: A Healthy New Sport」Sport Exerc Med Open J. 2017 ; 3(2): 46-52. [Sugiyama K](#)他, 「ノルディックウォーキング, ランニングにするとどうなる?～ノルディックランニングの生理学的応答～」ウォーキング研究21, 2018, 17-25, [杉山康司](#), 他など

5. 主要な社会活動業績

日本体力医学会会員（評議員 平成14年10月～現在）日本スポーツ少年団指導育成部会部会員，静岡県教育委員会スポーツ推進審議会委員他

村上陽子

所属 静岡大学教育学部家政教育講座
職位・学位 教授 博士（学術）
博士課程分野 創造系教科学
担当科目 教科開発学原論
研究テーマ 食文化、食品物性学、食品色彩学、家庭科におけるものづくり、教科連携



1. これまでの教育研究について

食品学・栄養学・食品衛生学・家庭科教育法等の担当教員として、食育や家庭科教育に関する教材開発、教科連携に関する研究を行っています。食品については、各種栄養素の成分組成や調理加工による変化、食品のもつ物理特性（硬さ、凝集性、付着性）とともに、これら物理特性が食嗜好性に及ぼす影響について研究しています。また、和菓子を中心として食品の色彩が食嗜好性に及ぼす影響について分析するとともに、経験的に行われてきた調製方法を理論的に分析するなど、我が国の食文化について科学的・文化的な視点から研究を行っています。最近では、小・中学校における給食指導や食に関する指導などについても研究を行っています。これら研究を通して得られた成果については教材化し、幼稚園をはじめ、小・中・高等学校において実践を行っています。教育分野においては、家庭科における食育、および、ものづくりの課題を明らかにしつつ、これからの家庭科における新しい教材を提案しています。

2. 博士課程における教育研究について

食品における物理的特性や化学的特性、官能特性などを科学的手法・文化的手法を用いて検討していきます。また、家庭科における食品学や栄養学、食品衛生学の意義について、多様な視点から考察できる資質・能力の育成を行っていきたいと考えています。教科連携については、食育など生活に関わる現代的課題やものづくりを核として教科連携モデルを考案し、授業実践していきたいと考えています。

3. 担当講義について

【教科開発学原論】

家庭科の指導内容について、①小・中・高等学校の家庭科の学習における課題、②家庭科教育に必要な視点、③家庭科の知識・技能の定着と多角的視点の育成を目指した教材・指導法について分析・考察します。

4. 主要な研究業績（2019, 2020）

- 1) 季節における和菓子の意匠と製法—造形時の道具に着目して—, 日本家政学会, **70** (12), 811-822, 村上陽子 (2019)
- 2) 教員養成課程の大学生における給食指導に対する認知と教育実習での学びの実態と課題（第一報）, 静岡大学教育学部研究報告 教科教育学篇, **51**, 219-242, 村上陽子, 竹下温子 (2019)
- 3) 学童期の発達段階を考慮した「給食の時間における食に関する指導」の検討（第2報）: 静岡大学教育学部研究報告教科教育学篇, **51**, 243-260, 竹下温子, 村上陽子 (2019)
- 4) 調製方法が打ち物「和三盆」の物理特性に及ぼす影響, 日本調理科学会, **53** (1), 18-24, 村上陽子 (2020)
- 5) 伝統的製法による米飴の調製方法が成分および食嗜好性に及ぼす影響, 教科開発学論集, **8**, 117-126, 村上陽子 (2020)
- 6) 米の搗精度が麦芽糖化飴（米飴）の糖化および食嗜好性に及ぼす影響 —玄米および有色米に着目して—, 静岡大学教育実践総合センター紀要, **30**, 175-184, 村上陽子 (2020)

【著書】

- 1) 「おはたきもち」, 伝え継ぐ日本の家庭料理 米のおやつともち, 農山漁村文化協会 (2019)
- 2) 「小メロン漬け」, 伝え継ぐ日本の家庭料理 漬物・佃煮・なめ味噌, 農山漁村文化協会 (2019)

5. 主要な社会活動業績

- 1) 静岡大学教育学部附属特別支援学校（高等部）校外授業「静岡大学へ行こう！」講師 (2019.4)
- 2) 日本家庭科教育学会第62回大会 実行委員 (2019年6月29日～6月30日)
- 3) 静岡県中学生創造ものづくり教育フェア（お弁当部門）審査委員長, 静岡市立城内中学校 (2019.11)

長谷川 慎

所属 静岡大学教育学部音楽教育講座
職位・学位 准教授 修士（音楽）
博士課程分野 創造系教科学
担当科目 表現・鑑賞論
研究テーマ 音楽教育学、日本音楽の指導法、和楽器（箏・三味線・胡弓）演奏法、
地歌箏曲総論、地歌箏曲の楽器の変遷



1. これまでの教育研究について

地歌箏曲演奏家としての経験から音楽科教育の今日的課題の一つである「日本音楽の指導」に関して指導法、教材開発等を研究している。「体感する日本音楽」をモットーに学生指導を行い、伝統音楽の表現と鑑賞活動に取り組むことで、深奥な日本音楽の良さを体感し他者にその魅力を語れるような学生を育てることを目指している。

2. 博士課程における教育研究について

博士課程においては、「表現・鑑賞論」の授業を伊藤文彦教員と分担で担当する。これまでの音楽科教育における日本音楽指導について俯瞰し、問題点を浮き彫りにしながら今後の指導のあり方について、学生諸君と考えていきたいと考えている。先人が育み伝えてきた音楽でありながら、自らの言葉として語れる教員が少ない現状を改善し、子どもたちにどのように指導するかを考えるのは教科教育に携わる人間の使命の一つである。教員と学生双方が経験を生かして日本学の指導、教材開発について考えていきたい。

3. 担当講義について

【表現・鑑賞論】

芸術は存在そのものが教育であると言える。そして、芸術を表現することとそれを鑑賞することは表裏一体の関係であり、常に同時発生的に進行する創造性豊かな思考過程である。この授業では、そういった表現と鑑賞の思考過程を芸術学と認知科学を融合させた学際的な観点で整理し、芸術教育のありかたについて考察するものである。音楽学概論、音楽教育学概論、音楽鑑賞教育論の視点から教科開発学における音楽科教育を探究する。

4. 主要な研究業績（2019.1～）

- 1) 本多佐保美編著「第V章 1 箏（箏曲）の学習」『日本音楽を学校でどう教えるか』, 開成出版, P.44-47, 2020 日本音楽の教育と研究をつなぐ会編「箏曲」『唱歌で学ぶ日本音楽』, 音楽之友社, 2019
- 2) 齊藤忠彦／菅裕編著「和楽器の指導」『新版 中学校・高等学校教員養成課程 音楽科教育法』, 教育芸術社, P.190-191, 2019
- 3) 有本真紀, 阪井恵, 津田正之編著「II 小学校音楽科の目標と内容「A 表現」器楽分野 (2) 指導のポイント「和楽器」」『教員養成課程小学校音楽科教育法新版教員養成課程小学校音楽科教育法』, 教育芸術社, P. 34-37, 2019
- 4) 長谷川慎・志民一成「音楽授業における歌唱モデル構築のための伝統的な歌唱を稽古する子どもの歌い方の分析 (1)」, 静岡大学教育実践総合センター紀要, 29/29 100-107, 2019
- 5) 笹野恵理子編著「第Ⅲ部 1 多様な音楽文化の諸相と音楽教育「日本の音楽」」『初等音楽科教育』, ミネルヴァ書房, p.103, 2018

5. 主要な社会活動業績（2018.4～）

- 1) 静岡県総合教育センター主催音楽の授業づくり研修会講師「～口唱歌を用いた和楽器の指導～」(2017年10月)
- 2) 文化庁主催令和元年度伝統音楽指導者等研修会講師 (2019年7～8月)
- 3) 日本芸術文化振興会あぜくらの集いにおける講演「三味線の響き～古態楽器の聴き比べ～」(2019年5月)
- 4) 地歌箏曲研究会の開催「第2回古態の楽器による地歌の会」東京藝術大学第1ホール (2019年3月)

VII. 諸 資 料

共同教科開発学専攻所属の大学院生の皆さんへ

共同教科開発学専攻 学務委員会

共同教科開発学専攻の授業等に関するアンケート

共同教科開発学専攻の学務委員会では、大学院生の皆さんを対象に授業等に関するアンケートを実施し、本専攻の今後の改善に活かそうと考えています。ぜひ、ご協力下さい。本アンケートは無記名です。

提出方法：セミナーI・IIの終了時まで記入し、会場出入口のアンケート回収箱に入れてください。

なお、集計は事務職員によって行われ、授業を担当する教員が、アンケートに書かれた内容を直接見ることはありませんので、ありのままのご意見をお書き下さい。

1. 所属大学について どちらか一方に、○をつけて下さい

() 愛知教育大学 () 静岡大学

2. 後期の「基礎科目」について

※「基礎科目」のいずれも受講しなかった方は、3に進んでください。

後期の基礎科目全般に関して、次の1～4の当てはまるものを選んで回答して下さい。

- (1. そう思う 2. ややそう思う 3. あまりそう思わない 4. そう思わない)
- ①授業の内容に満足しましたか …………… ()
- ②あなたは授業に積極的に取り組みましたか …………… ()
- ③シラバス等書かれた目標は達成されたと思いますか …………… ()
- ④授業の内容は自分の研究のために役立つと思いますか …………… ()

3. 後期の「分野科目」について

※「分野科目」のいずれも受講しなかった方は、4に進んでください。

後期の分野科目全般に関して、次の1～4の当てはまるものを選んで回答して下さい。

- (1. そう思う 2. ややそう思う 3. あまりそう思わない 4. そう思わない)
- ①授業の内容に満足しましたか …………… ()
- ②あなたは授業に積極的に取り組みましたか …………… ()
- ③シラバス等書かれた目標は達成されたと思いますか …………… ()
- ④授業の内容は自分の研究のために役立つと思いますか …………… ()

4. 後期の「応用科目」について

2月の「教科開発学セミナーI・II」について、次の1～4の当てはまるものを選んで回答して下さい。

- (1. そう思う 2. ややそう思う 3. あまりそう思わない 4. そう思わない)
- ①セミナーの内容に満足しましたか …………… ()
- ②セミナーの内容は自分の研究のために役立つと思いますか …………… ()

(裏面に続く)

平成29年度～令和元年度 共同教科開発学専攻・開設授業の履修状況(3年間) その1

前期: A期間(4月～5月) B期間(6月～7月) C期間(7月～8月)
後期: D期間(10月) E期間(11月～1月) F期間(1月～2月)

愛知教育大学・静岡大学 合同開講科目				平成29年度 集計		平成30年度 集計		令和元年度 集計		
共同専攻 科目	授業科目名	単位	担 当 教 員	曜日・時限・期間	受 講 者	曜日・時限・期間	受 講 者	曜日・時限・期間	受 講 者	
基礎科目	必修科目	教科開発学原論	a 2	石川 恭 野平 慎二 中野 真志 高橋 美由紀 黒川 みどり 小南 陽亮 杉山 康司 村上 陽子	A期間 4/9(日)・ 4/16(日)・ 4/23(日)・ 4/30(日) ★遠隔	愛教大D2 1名 愛教大D1 5名 静岡大D3 1名 静岡大D1 4名	A期間 4/15(日)・ 4/22(日)・ 4/29(日) ★遠隔	愛教大D1 5名 静岡大D1 7名	A期間 4/14(日)・ 4/21(日)・ 4/28(日)・ 5/6(月) ★遠隔	愛教大D1 7名 静岡大D1 4名
		教科開発学実践論	a 1	稲葉 みどり 倉本 哲男 小川 裕子 新保 淳 鎌塚 優子	D期間 10/7(土)・ 10/8(日) ★遠隔	愛教大D1 4名 静岡大D1 4名	D期間 10/6(土)・ 10/7(日) ★遠隔	愛教大D2 1名 愛教大D1 5名 静岡大D1 7名	D期間 10/5(土)・ 10/6(日) ★遠隔	愛教大D2 1名 愛教大D1 6名 静岡大D1 5名
応用科目	必修科目	教科開発学セミナーⅠ	b 2	全教員	F期間 2/10(土)・ 2/11(日) ●静岡大	愛教大D1 5名 静岡大D1 4名	F期間 2/16(土)・ 2/17(日) ●愛教大	愛教大D1 5名 静岡大D2 1名 静岡大D1 7名	F期間 2/15(土)・ 2/16(日) ●静岡大	愛教大D1 5名 静岡大D2 1名 静岡大D1 7名
		教科開発学セミナーⅡ	b 2	全教員	F期間 2/10(土)・ 2/11(日) ●静岡大	愛教大D2 3名 静岡大D3 2名 静岡大D2 4名	F期間 2/16(土)・ 2/17(日) ●愛教大	愛教大D2 5名 静岡大D3 4名 静岡大D2 3名	F期間 2/15(土)・ 2/16(日) ●静岡大	愛教大D3 1名 愛教大D2 4名 静岡大D3 2名 静岡大D2 7名
	選択科目	教科開発学セミナーⅢ	b 2	全教員	C期間 8/20(日) ●愛教大	静岡大D3 2名	C期間 8/26(日) ●静岡大	愛教大D3 2名 静岡大D3 1名	C期間 8/25(日) ●愛教大	愛教大D3 2名 静岡大D3 2名 静岡大D2 1名

平成29年度～令和元年度 共同教科開発学専攻・開設授業の履修状況(3年間) その2

愛知教育大学開講科目				平成29年度 集計		平成30年度 集計		令和元年度 集計		
共同専攻科目	授業科目名	単位	担当教員	曜日・時限・期間	受講者	曜日・時限・期間	受講者	曜日・時限・期間	受講者	
基礎科目	文化資源活用論	a 1	野地 恒有 伊藤 貴啓 丹藤 博文	A期間 4/29(土)・ 5/6(土)	愛教大D3 2名 愛教大D2 2名 愛教大D1 2名 静岡大D2 3名 静岡大D1 1名	A期間 4/28(土)・ 5/12(土)	愛教大D2 1名 愛教大D1 3名 静岡大D1 1名	A期間 4/27(土)・ 5/11(土)	愛教大D1 3名 静岡大D3 1名	
	科学技術活用論	a 1	岩山 勉 稲毛 正彦 飯島 康之	D期間 10/21(土)・ 10/22(日)	静岡大D2 3名 静岡大D1 1名	D期間 10/27(土)・ 10/28(日)	愛教大D1 2名 静岡大D1 2名	D期間 10/26(土)・ 10/27(日)	愛教大D1 3名 静岡大D1 2名	
	教育評価実証方法論	a 1	古田 真司 石田 靖彦	D期間 10/7(土)・ 10/8(日)	愛教大D2 2名 愛教大D1 1名 静岡大D3 1名	D期間 10/20(土)・ 10/21(日)	愛教大D2 2名 愛教大D1 5名 静岡大D1 2名	D期間 10/19(土)・ 10/20(日)	愛教大D3 2名 愛教大D2 1名 愛教大D1 6名 静岡大D2 1名 静岡大D1 2名	
分野科目(選択科目)	教育環境学	遊び文化環境論研究	a 2	石川 恭	E期間 日曜日・ 隔週	愛教大D1 1名 静岡大D1 1名	E期間 日曜日・ 隔週	愛教大D2 1名 静岡大D1 1名	B期間 日曜日・ 隔週	愛教大D3 2名 愛教大D1 1名 静岡大D3 1名
		教育経営臨床論研究	a 2	倉本 哲男	E期間 土曜日・ 隔週	愛教大D2 2名 愛教大D1 3名	E期間 土曜日・ 隔週	愛教大D2 1名	E期間 土曜日・ 隔週	愛教大D1 5名 愛教大D2 1名
		学校適応論研究	a 2	石田 靖彦	B期間 土曜日・ 隔週	静岡大D1 1名	E期間 日曜日・ 隔週	愛教大D2 2名 愛教大D1 1名 静岡大D1 1名	E期間 土曜日・ 隔週	愛教大D1 2名
		教育哲学・思想論研究	a 2	野平 慎二	E期間 土曜日・ 隔週	愛教大D1 1名	B期間 土曜日・ 隔週	愛教大D1 3名 静岡大D1 1名	B期間 日曜日・ 隔週	愛教大D1 4名 静岡大D2 1名 静岡大D1 1名
		教育方法・内容論研究	a 2	竹川 慎哉					E期間 日曜日・ 隔週	愛教大D1 3名
	人文社会系教科学	言語教育内容論研究	a 2	稲葉 みどり	E期間 日曜日・ 隔週	愛教大D1 1名	E期間 日曜日・ 隔週	愛教大D1 1名 静岡大D2 1名 静岡大D1 1名	E期間 日曜日・ 隔週	愛教大D3 1名 静岡大D1 1名
		民俗学教材論研究	a 2	野地 恒有	B期間 日曜日・ 隔週	愛教大D1 2名 静岡大D2 1名 静岡大D1 1名	B期間 土曜日・ 隔週	愛教大D1 1名 静岡大D1 3名	B期間 土曜日・ 隔週	
		地理学教材論研究	a 2	伊藤 貴啓	B期間 日曜日・ 隔週	愛教大D1 1名 静岡大D3 1名 静岡大D2 2名	B期間 土曜日・ 隔週	静岡大D2 1名 静岡大D1 1名	B期間 日曜日・ 隔週	静岡大D1 1名 静岡大D2 1名 静岡大D1 1名
		国語科教育教材論研究	a 2	丹藤 博文	E期間 日曜日・ 隔週	愛教大D3 1名 静岡大D1 1名	E期間 土曜日・ 隔週	静岡大D1 1名	E期間 日曜日・ 隔週	愛教大D1 1名
		生活科教育内容論研究	a 2	中野 真志	E期間 変則	愛教大D2 1名 愛教大D1 1名	E期間 土曜日・ 隔週	愛教大D2 1名 愛教大D1 1名 静岡大D1 2名	E期間 土曜日・ 隔週	愛教大D1 1名 静岡大D3 1名
		小学校英語教育研究	a 2	高橋 美由紀	E期間 日曜日・ 隔週		B期間 日曜日・ 隔週	愛教大D2 1名	B期間 土曜日・ 隔週	
		外国語教育内容論研究	a 2	高橋 美由紀			B週 日曜日・ 隔週		B期間 土曜日・ 隔週	愛教大D1 2名
		自然系教科学	数学教材論研究	a 2	飯島 康之	B期間 土曜日・ 隔週		B期間 日曜日・ 隔週	愛教大D1 2名	B期間 土曜日・ 隔週
	物理教材論研究		a 2	岩山 勉	E期間 土曜日・ 隔週	静岡大D3 1名	E期間 日曜日・ 隔週	愛教大D1 2名	E期間 土曜日・ 隔週	愛教大D1 1名
	理科教育内容論研究		a 2	稲毛 正彦	E期間 日曜日・ 隔週	静岡大D1 1名	E期間 土曜日・ 隔週	愛教大D1 2名	E期間 日曜日・ 隔週	愛教大D1 1名
数学教育内容論研究	a 2		小谷 健司			E期間 土曜日・ 隔週	愛教大D1 2名	E期間 日曜日・ 隔週	愛教大D1 1名 静岡大D1 1名	
教創科 学系	保健教育内容論研究	a 2	古田 真司	B期間 土曜日・ 隔週	愛教大D3 1名 愛教大D1 1名	B期間 日曜日・ 隔週	愛教大D3 1名 愛教大D1 1名 静岡大D1 1名	B期間 土曜日・ 隔週	愛教大D2 1名 愛教大D1 1名 静岡大D2 1名	

平成29年度～令和元年度 共同教科開発学専攻・開設授業の履修状況(3年間) その3

静岡大学開講科目				平成29年度 集計		平成30年度 集計		令和元年度 集計		
共同専攻科目	授業科目名	単位	担当教員	曜日・時限・期間	受講者	曜日・時限・期間	受講者	曜日・時限・期間	受講者	
基礎科目	選択科目	教育プログラム開発論	a 1	村山 功	A期間 4/15(土)・ 4/22(土)	愛教大D3 1名 愛教大D2 3名 愛教大D1 2名 静岡大D3 2名 静岡大D2 1名 静岡大D1 3名	A期間 4/14(土)・ 4/28(土)	愛教大D1 1名 静岡大D1 2名	A期間 5/12(土)・ 5/19(土)	愛教大D2 1名 愛教大D1 2名 静岡大D2 3名 静岡大D1 3名
		表現・鑑賞論	a 1	伊藤 文彦 北山 教康	D期間 10/1(日)・ 10/15(日)	静岡大D2 2名	D期間 10/20(土)・ 10/27(土)	愛教大D1 1名 静岡大D3 1名 静岡大D1 1名	D期間 10/12(土)・ 10/26(土)	愛教大D1 2名 静岡大D2 3名
		教育フィールド調査論	a 1	村越 真	A期間 5/14(日)・ 5/21(日)	愛教大D1 3名 静岡大D2 1名 静岡大D1 2名	A期間 4/30(月)・ 5/6(日)	愛教大D1 3名 静岡大D2 1名 静岡大D1 3名	A期間 4/20(土)・ 5/4(土)	愛教大D3 1名 愛教大D1 1名 静岡大D1 4名
		教育フィールドワーク論				静岡大D3 2名				
		教育プレゼンテーション論	a 1	白畑 知彦 小南 陽亮	E期間 変則・ 11/26(日)・ 1/7(日)	静岡大D3 1名 静岡大D1 2名	E期間 変形・ 11/25(日)・ 1/5(土)	愛教大D2 1名 愛教大D1 1名 静岡大D1 1名	E期間 変形・ 11/25(日)・ 1/5(土)	愛教大D2 1名 静岡大D2 3名 静岡大D1 3名
分野科目(選択科目)	教育環境学	学校危機管理論研究	a 2	村越 真	B期間 日曜日・ 隔週	愛教大D2 1名 愛教大D1 1名 静岡大D3 1名 静岡大D2 1名 静岡大D1 1名	E期間 日曜日・ 隔週	愛教大D3 1名 愛教大D1 1名 静岡大D1 1名	E期間 日曜日・ 隔週	愛教大D3 1名 愛教大D2 1名 愛教大D1 1名 静岡大D1 1名
		教育工学論研究	a 2	村山 功	B期間 日曜日・ 隔週	愛教大D2 2名 静岡大D3 1名 静岡大D1 3名	B期間 日曜日・ 隔週	静岡大D3 1名 静岡大D2 1名 静岡大D1 1名	B期間 日曜日・ 隔週	愛教大D1 1名 静岡大D1 3名
		身体運動指導論研究	a 2	吉田 和人	E期間 土曜日・ 隔週		E期間 日曜日・ 隔週	静岡大D1 1名	E期間 日曜日・ 隔週	静岡大D2 1名 静岡大D1 1名
		養護実践教育学論研究	a 2	鎌塚 優子			E期間 日曜日・ 隔週	静岡大D1 1名	E期間 日曜日・ 隔週	愛教大D1 1名 静岡大D2 3名 静岡大D1 1名
		特別支援教育学研究	a 2	香野 毅					E期間 日曜日・ 隔週	
		情報教育研究	a 2	塩田 真吾						静岡大D1 1名
	人文社会系教科学	外国語教育論研究	a 2	白畑 知彦	B期間 土曜日・ 隔週	愛教大D2 1名 愛教大D1 1名 静岡大D1 1名	B期間 土曜日・ 隔週	静岡大D1 1名	B期間 土曜日・ 隔週	静岡大D1 1名
		歴史教材論研究	a 2	黒川 みどり	B期間 土曜日・ 隔週	静岡大D1 1名	B期間 日曜日・ 隔週	愛教大D2 1名 静岡大D1 1名	B期間 土曜日・ 隔週	
		国語教育論研究	a 2	坂口 京子	B期間 日曜日・ 隔週		B期間 日曜日・ 隔週		B期間 日曜日・ 隔週	
	自然系教科学	数学教育論研究	a 2	熊倉 啓之	E期間 日曜日・ 隔週		E期間 土曜日・ 隔週	静岡大D1 1名	E期間 土曜日・ 隔週	静岡大D1 1名
		生物教育内容論研究	a 2	小南 陽亮	E期間 土曜日・ 隔週		E期間 土曜日・ 隔週		E期間 土曜日・ 隔週	静岡大D2 1名
		理科教育論研究	a 2	丹沢 哲郎 郡司 賀透	B期間 日曜日・ 隔週		B期間 土曜日・ 隔週		B期間 日曜日・ 隔週	愛教大D2 1名 愛教大D1 1名 静岡大D2 1名
	創造系教科学	美術教材論研究	a 2	伊藤 文彦	B期間 土曜日・ 隔週		B期間 土曜日・ 隔週		B期間 土曜日・ 隔週	
		体育教育論研究	a 2	新保 淳	B期間 土曜日・ 隔週	静岡大D3 1名	C期間 日曜日・ 隔週	静岡大D1 3名	B期間 土曜日・ 隔週	愛教大D1 1名
技術教育内容論研究		a 2	松永 泰弘	B期間 日曜日・ 隔週		B期間 日曜日・ 隔週		B期間 日曜日・ 隔週		
家政教育内容論研究		a 2	小川 裕子	E期間 日曜日・ 隔週	愛教大D1 1名	E期間 日曜日・ 隔週	愛教大D2 1名 愛教大D1 1名	E期間 日曜日・ 隔週		
技術教育教材論研究		a 2	紅林 秀治	B期間 土曜日・ 隔週	静岡大D1 1名	B期間 土曜日・ 隔週	静岡大D1 1名	B期間 土曜日・ 隔週	静岡大D1 1名	
体育・課外活動教材論研究		a 2	杉山 康司	B期間 土曜日・ 隔週	静岡大D2 1名	B期間 土曜日・ 隔週	愛教大D2 1名 静岡大D1 1名	B期間 日曜日・ 隔週	愛教大D1 1名	
家庭科教材論研究		a 2	村上 陽子	B期間 土曜日・ 隔週		B期間 土曜日・ 隔週		B期間 土曜日・ 隔週		

教科開発学論集 第8号 (2020) 掲載論文一覧

【 論 文 】

- 教職課程におけるリスクコミュニケーション演習の効果とリスクへの態度の変容 …………… 村 越 真 …… 1
河 合 美 保
- 模擬授業の教育的効果の考察 …………… 稲 葉 みどり …… 7
－ 様々な外国語教授法の実践を通じて－
- 非認知的スキルの育成に資する総合的な学習の時間に関する基礎的研究 …………… 加 藤 智 …… 17
- Optimizing Second Language Vocabulary Learning with English Word Tests …………… Keita KODAMA …… 29
Tomohiko SHIRAHATA
- 英語の音声指導における明瞭性の成績の伸びと児童の内省の特徴 …………… 箱 崎 雄 子 …… 39
－ 自由記述回答に基づく計量テキスト分析－
中 川 右 也
- 1821-1930年の米国ハイスクール用教科書に見られる
「自然哲学」及び「物理学」の目的の変遷 …………… 荒 谷 航 平 …… 49
- 学校数学における標本調査の位置づけに関する一考察 …………… 塩 澤 友 樹 …… 61
－ ニュージーランド・オーストラリア・アメリカの国家カリキュラムに着目して－
- 電気抵抗の視覚的理解が可能な新規教材開発 …………… 新鶴田 道 也 …… 73
－ 中学校理科・高等学校物理・理数探究における活用－
大久保 博 和
岩 山 勉
- 簡易手指動作分析システムの教育的活用に関する検討 …………… 青 木 麟太郎 …… 83
紅 林 秀 治
- 指揮動作に見られる右腕の動揺と拍間隔の不均一との相関 …………… 河 合 紳 和 …… 93
－ モーションキャプチャシステムによる測定と分析の結果から－
- 発展途上国の高等学校の実験授業に適応可能な種子発芽と苗の
伸長に対する光の波長依存性を教える方法 …………… チャンセン マム …… 105
野 田 陽 平
船 井 裕 由
岩 山 勉
加 藤 淳太郎
- 伝統的製法による米飴の調製方法が成分および食嗜好性に及ぼす影響 …………… 村 上 陽 子 …… 117
- ブラインドサッカー初学児童に対する1回の運動イメージ生成指導の影響に関する事例研究 …… 百 瀬 容美子 …… 127
－ 先天性視覚障害児童のボールキック動作スキルと運動イメージ生成スキルの変化に着目して－
- 生物教育における創造性を高めるための資質・能力の育成 …………… 山 本 高 広 …… 135
－ ヘックスバグ [ナノナイトロ] を用いた教材開発と実践－
熊 野 善 介

【 研究ノート・資料 】

全国学力・学習状況調査における比例概念領域（内包量及び割合、乗除法）の問題分析 …… 大 西 英 夫 ……145
－問題構造と正答率からみた困難点－

技能系教科における「思考・判断・表現」の評価方法の研究 …………… 新 保 淳 ……153
－体育実践を事例として－
山 崎 朱 音
鎌 塚 優 子

【 付 録 】

愛知教育大学大学院・静岡大学大学院教育学研究科 共同教科開発学専攻紀要発行要項 ……………159

『教科開発学論集』投稿要領 ……………161

愛知教育大学・静岡大学教育学研究科
(後期3年博士課程)
共同教科開発学専攻 2019年度報告書
ROAD 第8号

印刷：令和2年3月31日
発行：国立大学法人愛知教育大学
国立大学法人静岡大学
編集：愛知教育大学・静岡大学教育学研究科
ISSN 2187-7319

愛知教育大学・静岡大学教育学研究科（後期3年博士課程）共同教科開発学専攻 2019年度報告書

[ROAD]

ROAD

第8号 令和2年3月発行